

小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料  
による言語地図とその解釈  
第2集



福井玲 編

東京大学大学院人文社会系研究科

韓国朝鮮文化研究室

小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料  
による言語地図とその解釈  
第2集

2018年3月30日

福井玲 編

東京大学大学院人文社会系研究科

韓国朝鮮文化研究室

小倉進平『朝鮮語方言の研究』 所載資料による言語地図とその解釈  
第2集

初版 2018年3月30日 (PDF版および冊子版)

編者 福井 玲 (fkr@l.u-tokyo.ac.jp)

(連絡先)

113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科

韓国朝鮮文化研究室

本篇は、平成 27～29 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)(一般)、課題番号 15K02504、研究代表者 福井玲、研究課題名「小倉進平による朝鮮語方言資料の言語地図化と言語地図作成ソフトウェアの開発」）による成果の一部である。

Geolinguistic studies of the Korean language based on the data collected by  
Ogura Shinpei. Volume 2.

First edition. March 30, 2018 (PDF and print versions)

Department of Korean Studies, Graduate School of Humanities and Sociology,

The University of Tokyo

Edited by Fukui, Rei (fkr@l.u-tokyo.ac.jp)

Copyright (c) 2018 Authors of respective articles.

This work was partly supported by Grant-in-aid Scientific Research (C), 15K02504, 2015–2017.

## 目次

はじめに		iii
凡例		v
<b>■天文</b>		
細雨	林茶英	1
<b>■地理・河海</b>		
山・墓	岩井亮雄	5
<b>■方位</b>		
外	岩井亮雄	9
<b>■人倫</b>		
子の妻	徐旻廷	13
男子・男児	徐旻廷	17
巫女	林茶英	21
<b>■身体</b>		
舌	李美姫	25
<b>■服飾</b>		
簪	全恵子	29
下駄と靴	福井玲	33
<b>■飲食</b>		
粉	李美姫	37
<b>■花果</b>		
李の実	朱林彬・福井玲	41
<b>■菜蔬</b>		
大根	梁紅梅	45
蕎麦	岩井亮雄	49
黄瓜(きょうり)	岩井亮雄	53
稲	福井玲	57
玉蜀黍	福井玲	61
小豆	林茶英	65
<b>■金石</b>		
土	澁谷秋	69
<b>■器具</b>		

鋏	梁紅梅	73
馬槽	國分翼	77
俎	福井玲	83
盥	福井玲	87
鏡	福井玲	91
熨斗	福井玲	95
■走獸		
猫	福井玲	99
亀	金玉雪	103
■水族		
鮎	國分翼	107
■草木		
木	梁紅梅	111
■副詞		
尖れるさま	岩井亮雄	115
■雑		
塵	澁谷秋	119

執筆者一覧

## はじめに

本篇は、昨年度に公表した第1集の続編である。第1集は32篇の小論で33の語彙項目を扱ったが、今回の第2集では30篇の小論で31の語彙項目を扱っている。

昨年度同様、この第2集も小倉進平の『朝鮮語方言の研究』(1944年、岩波書店)に掲載されている朝鮮語方言資料を言語地図化し、その結果と文献上のデータをつきあわせることによって各語彙項目の歴史を立体的に再構成し、その解釈を示したものである。筆者がさまざまな研究会において発表してきた研究と、東京大学韓国朝鮮文化研究室において行なってきた大学院の授業「韓国朝鮮語語彙史」、および2017年度に自主ゼミとして行なった研究会における大学院生諸氏の発表がもとになっている。

小倉進平(1882-1944)は、朝鮮語の諸方言の研究に力を入れ、1910年代から1930年代にかけて朝鮮半島全土について調査を行ない、多くの論文やモノグラフにその成果を発表したが、亡くなる直前の1944年には上記の著書においてその集大成を行なった。その後、彼の方言研究は河野六郎に引き継がれ、また戦後は韓国において、多くの学者による方言研究が行なわれたが、残念なことに、彼が集めた方言調査資料はいまだに十分に活用されてきたとはいえない状態にある。本編は、そのような状態にあって、それをできるだけ活用することを目指したものである。

彼の残した方言資料の特徴とそれを扱う際の留意点については、凡例に示した筆者の論文などですでに述べてきたのでここでは省略する。

言語地図化の作業には、現在開発を行なっている言語地図作成用ソフトウェア Seal 8.0 を用いた。これは科学研究費(平成27~29年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(一般)、課題番号15K02504、研究代表者 福井玲、研究課題名「小倉進平による朝鮮語方言資料の言語地図化と言語地図作成ソフトウェアの開発」)を得て、開発を続けているものである。このソフトウェアはもともと福嶋秩子・福嶋祐介夫妻が開発されたもので、今回、それを Windows の最新の環境(Visual Studio)に合わせて移植し、さまざまな機能の追加を行なったものである。なおこの Seal 8.0 およびマニュアルも本篇と同じウェブページで公開される予定である。

なお、『朝鮮語方言の研究』所載資料の言語地図化は本研究が初めてではなく、すでに中井精一氏による『朝鮮半島言語地図』(平成19年3月)があるが、調査地点や音声記号の表示等に難点があり、また各項目の解説が付けられていないので、畏友遠藤光暁氏の勧めもあって、今回、新たに地図化を行なうとともに、各項目の解説を執筆することにしたのである。

最後に、オリジナルの Seal のソースコードを提供して下さった福嶋秩子先生、さまざまな研究会において研究発表の機会を作ってくださっている遠藤光暁先生はじめ多くの先生方に感謝する。また、これまで筆者の授業に参加した多くの学生諸君から有益なコメント

を得たこと，編集作業を手伝ってもらったことにも感謝したい。

2018年3月30日

福井玲

## 凡 例

▶本書では『朝鮮語方言の研究』上巻に記載された資料のうちから33項目を選んで、解説および言語地図を提示する。31項目のうち「下駄」と「靴」は関連する部分が多いので、解説はまとめて執筆してある。

▶各項目の名称は原則として小倉進平による日本語による表記に従う。ただし読みにくい場合には括弧内に読み仮名を付した。

▶語形の転写は原則として『朝鮮語方言の研究』下巻の「総説」13-14頁に示されている小倉進平の音声表記に従っているが、便宜上、次の3つの記号は本書では別の記号に変更して示す。

小倉の記号	本書の記号
ü (上点つきの u)	i
o (o の斜体字)	ʌ
ö (o ウムラウトの斜体字)	œ

これらのうち、「o の斜体字」と「ö ウムラウトの斜体字」は済州島の独自の母音を表わすのに用いられているが、斜体字は誤読されやすいので、上で示した記号で代替させることにする。また、「上点つきの u」はハングルの ‘으’ の母音の転写に用いられているが、Times New Roman など現行のユニコード準拠のフォントでは単独の文字としては定義されておらず、特定のソフトウェアの上で補助記号の重ね合わせによって表現することは可能であるが、可搬性が低いので、やむを得ずこの母音によりふさわしいと考えられる ‘i’ で代替させることにしたものである。なお、小倉進平が用いた音声記号についての詳細な検討は編者による次の論文を参照されたい。

福井玲 (2016) 小倉進平の朝鮮語方言調査について—『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために—『東京大学言語学論集』37: 41-70. 東京大学言語学研究室.

なお、激音に現れる有気性を表わす記号として、小倉進平は ‘h’ を用いているが、本編では項目によって、それをそのまま用いている場合と、現行の IPA の標準である h (上付きの h) を用いる場合の両方がある。また、濃音の表記に用いられる声門閉鎖音の記号も項目によって通常の大きさのもの(?)と、『朝鮮語方言の研究』で用いられている上付きのもの(?)の両



方の場合があることをお断りしておく。

▶小倉進平による調査地点は『朝鮮語方言の研究』下巻の「総説」15–20 頁によれば 259 地点とされているが、実際に資料編に登場する調査地点はそれより 5 地点多い 264 地点である。これについても詳細は編者による上掲論文を参照されたい。なお、調査地点一覧とその位置を示す地図を凡例の末尾に掲載する。

▶過去の文献資料に見られる語形については主に中世語、近代語、開化期について提示した。その際、刊行年、書名、用例の張数などの情報を次のように略記する。なお、書名の漢字表記には日本の現行の漢字の字体を用いた。

例 무위為電 <1446 訓民正音解例本 56a>

この例では 1446 が刊行年、次いで書名、最後に張数と表裏（表が a, 裏が b）である。なお、正確な刊行年が不明の場合は次のように表示した。

例 16-- 1600 年代で下 2 桁が不明の場合

160- 1600 年代で下 1 桁が不明の場合

▶各項目にはそれぞれ参考文献を付けたが、次の 2 つはほぼすべての項目に共通するので、個別の項目で掲げるのは省略する。それ以外のものは各項目において個別に掲げることにした。

小倉進平 (1944) 『朝鮮語方言の研究』上下 2 巻. 東京：岩波書店.

李翊燮・田光鉉・李光鎬・李秉根・崔明玉 (2008) 『韓国言語地図』ソウル：太学社.

なお、上記以外のもののうち、多くの項目を通じて本編でしばしば言及されるものを参考までに次に掲げておく。なお、日本の読者のために、著者名、書名、出版社名で漢字表記が可能なものは漢字に直して表記した。

韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987–1995) 『韓国方言資料集』全9巻. 城南：韓國精神文化研究院.

姜吉云 (2010) 『比較言語学的語源辞典』ソウル：韓国文化社.

金敏洙 (1997) 『우리말語源辞典』ソウル：太学社.

金武林 (2012) 『韓国語語源辞典』ソウル：知識と教養.

金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.

- 金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』 城南：韓国精神文化研究院.  
 玄平孝 (1962, 修正版 1985) 『濟州島方言研究』(資料篇・論考篇) ソウル：二友出版社.  
 国立国語研究院 (1999) 『標準国語大辞典』 ソウル：斗山東亜.  
 崔鶴根 (1978) 『韓国方言辞典』 ソウル：玄文社.  
 崔鶴根 (1990) 『増補 韓国方言辞典』 ソウル：明文堂.  
 志部昭平 (1990) 『諺解三綱行実図研究』 東京：汲古書院.  
 李基文 (1991) 『国語語彙史研究』 ソウル：東亜出版社.  
 李基文 (1998, 修正版 2002) 『新訂版 国語史概説』 ソウル：太学社.  
 劉昌惇 (1964) 『李朝語辞典』 ソウル：延世大学校出版部.  
 한글학회 (1991) 『우리말큰사전』 ソウル：語文閣.

▶調査地点一覧

番号は『朝鮮語方言の研究』下巻 15-20 頁に基づくが、そこで漏れている地点については、\* を表示した。各地点の行政上の所属が現在とは異なる場合があるが、これもすべて『朝鮮語方言の研究』に基づく。

全羅南道 (濟州島を含む)

- |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 濟州  | 2 城山  | 3 旌義  | 4 西歸  | 5 大靜  | 6 突山  | 7 麗水  |
| 8 光陽  | 9 順天  | 10 筏橋 | 11 高興 | 12 寶城 | 13 長興 | 14 康津 |
| 15 莞島 | * 智島  | 16 海南 | 17 珍島 | 18 靈岩 | 19 木浦 | 20 咸平 |
| 21 靈光 | 22 羅州 | 23 和順 | 24 光州 | 25 長城 | 26 潭陽 | 27 玉果 |
| 28 谷城 | 29 求禮 |       |       |       |       |       |

全羅北道

- |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 30 雲峰 | 31 南原 | 32 淳昌 | 33 井邑 | 34 高敞 | 35 扶安 | 36 金堤 |
| 37 裡里 | 38 群山 | 39 全州 | 40 任實 | 41 長水 | 42 鎭安 | 43 茂朱 |
| 44 錦山 |       |       |       |       |       |       |

慶尚南道

- |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 45 蔚山 | 46 梁山 | 47 東萊 | 48 釜山 | 49 金海 | 50 馬山 | 51 巨濟 |
| 52 統營 | 53 固城 | 54 咸安 | 55 宜寧 | 56 晋州 | 57 泗川 | 58 南海 |
| 59 河東 | 60 山淸 | 61 咸陽 | 62 居昌 | 63 陝川 | 64 昌寧 | 65 密陽 |

慶尚北道

- |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 66 淸道 | 67 慶山 | 68 永川 | 69 慶州 | 70 浦項 | 71 興海 | 72 盈徳 |
| 73 大邱 | 74 高靈 | 75 星州 | 76 倭館 | 77 知禮 | 78 金泉 | 79 善山 |
| 80 軍威 | 81 義城 | 82 尚州 | 83 咸昌 | 84 聞慶 | 85 醴泉 | 86 安東 |
| 87 榮州 | 88 乃城 | 89 英陽 | 90 青松 | 91 道洞 |       |       |

忠清南道

- |        |        |        |        |        |        |        |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 92 大田  | 93 公州  | 94 論山  | 95 江景  | 96 扶餘  | 97 鴻山  | 98 青陽  |
| 99 舒川  | 100 藍浦 | 101 大川 | 102 保寧 | 103 炭浦 | 104 廣川 | 105 洪城 |
| 106 海美 | * 葛山   | 107 瑞山 | 108 唐津 | 109 沔川 | 110 禮山 | 111 温陽 |

112 天安	113 鳥致院						
忠清北道							
114 清州	115 報恩	116 沃川	117 永同	118 鎭川	119 陰城	120 槐山	
121 忠州	122 丹陽	123 堤川					
京畿道							
124 平澤	125 安城	126 水原	127 龍仁	128 利川	129 驪州	130 楊平	
131 廣州	132 京城	133 永登浦	134 仁川	135 金浦	136 江華	137 開城	
138 長湍	139 汶山	140 議政府	141 漣川	142 抱川	143 加平		
江原道							
144 歙谷	145 通川	146 長箭	147 高城	148 杆城	149 襄陽	150 注文津	
151 江陵	152 三陟	153 蔚珍	154 平海	155 旌善	156 寧越	157 平昌	
158 原州	159 橫城	160 洪川	161 春川	162 華川	163 楊口	164 麟蹄	
165 淮陽	166 金化	167 鐵原	168 平康	169 伊川			
黃海道							
170 金川	171 延安	172 海州	173 甕津	174 苔灘	175 長湍	176 松禾	
177 殷栗	178 安岳	179 信川	180 載寧	181 沙里院	182 黃州	183 瑞興	
184 南川	185 新溪	186 遂安	187 谷山				
咸鏡南道							
188 新高山	* 高山	189 安邊	190 元山	191 德源	192 文川	193 高原	
194 永興	195 定平	196 咸興	197 五老里	198 新興	199 洪原	200 北青	
201 利原	202 端川	203 豊山	204 甲山	205 惠山	206 三水	207 長津	
咸鏡北道							
208 城津	209 吉州	210 明川	211 鏡城	212 羅南	213 清津	214 富居	
215 富寧	* 烟台洞	216 茂山	* 明臣	217 會寧	218 鍾城	219 穩城	
220 慶源	221 慶興	222 雄基					
平安南道							
223 中和	224 平壤	225 鎭南浦	226 龍岡	227 江西	228 江東	229 成川	
230 陽德	231 孟山	232 寧遠	233 徳川	234 价川	235 順川	236 順安	
237 永柔	238 肅川	239 安州					
平安北道							
240 博川	241 寧邊	242 熙川	243 雲山	244 泰川	245 龜城	246 定州	
247 宣川	248 鐵山	249 龍岩浦	250 新義州	251 義州	252 朔州	253 昌城	
254 碧潼	255 楚山	256 渭原	257 江界	258 慈城	259 厚昌		

次頁に上記の地点番号を示す地図を掲載する。1-259 までの番号は小倉進平によるものと同じであり、上で述べたように、\* で表示した筆者が追加した 5 地点はそれに続く 260-264 の番号を次のように割り当てて表示してある。

咸北：260 烟台洞，261 明臣，咸南：262 高山，全南：263 智島，忠南：264 葛山





# 細雨

林 茶 英

## 1 はじめに

韓国語の標準語は ka-raŋ-bi (가랑비) である。『朝鮮語方言の研究』(上: 12-13)にはこれにあたる語が 19 種記録されている。類似している語形同士まとめると次の通り。

### (1) ka-nin-bi 系

(1a) ka-nin-bi / kʌ-raŋ-bi / ka-raŋ-bi / ko-raŋ-bi / ka-gi-raŋ-bi / kal-baŋ-bi / kal-gaŋ-bi /  
kal-gi-raŋ-bi

### (1b) niŋ-ge-bi

### (2) po-su-rak-pi 系

po-su-rak-pi / ʔsa-rak-pi / ʔsa-gi-raŋ-bi

### (3) ja-si-bi 系

ja-si-bi / i-sil-bi / i-si-reŋ-i / an-ge-bi

### (4) ʃum-bɔŋ-i 系

ʃum-bɔŋ-i / ʃum-beŋ-i / ʃi-neŋ-bi

しかし、これらのうち ka-nin-bi, an-ge-bi, i-sil-bi, nin-ge (ʃum-bɔŋ-i の標準語), ja-si-bi は現代韓国語において、ka-raŋ-bi とは少し異なる表現として用いられている。『標準国語大辞典』に基づき 19 種の語形を分類すると、次の通りである<sup>1</sup>。

### (1) ka-raŋ-bi 系

(1a) kʌ-raŋ-bi / ka-raŋ-bi / ko-raŋ-bi / ka-gi-raŋ-bi / kal-baŋ-bi / kal-gaŋ-bi / kal-gi-raŋ-bi

(1b) niŋ-ge-bi (1c) po-su-rak-pi / ʔsa-rak-pi / ʔsa-gi-raŋ-bi

### (2) i-sil-bi 系

i-sil-bi / i-si-reŋ-i / ʃi-neŋ-bi

### (3) ʃum-bɔŋ-i (nin-ge)系

---

<sup>1</sup> 『標準国語大辞典』によると、雨粒の大きさは ka-raŋ-bi > i-sil-bi > nin-ge > an-ge-bi の順である。an-ge-bi の場合、(1)雨粒が小さく霧のように見える雨という説明と、(2) nin-ge の済州方言という説明があるが、小倉の資料には an-ge-bi が京畿、黄海地域に分布する語形となっているため、本報告においては、(1)の説明を採択し、an-ge-bi を(4)その他に入れておいた。また、19 種のすべての語形を探してみたが、『標準国語大辞典』に ka-nin-bi, ko-raŋ-bi, ja-si-bi, i-si-reŋ-i, ʃum-beŋ-i は載っていなかった。これらの場合、語形の類似しているグループに配属した。

ʃum-bəŋ-i / ʃum-beŋ-i

(4) その他

ka-nin-bi / an-ge-bi

(5) ja-si-bi (「日照り雨」を表す。)

## 2 地理的分布

(1a)の語形のうち, k<sub>Λ</sub>-raŋ-bi や ko-raŋ-bi は済州島にしか見られない。ka-raŋ-bi は全羅道, 慶尚道, 忠清道の広い範囲にかけて分布し, 京畿道や江原道にも 1 箇所ずつ見られる。ka-gi-raŋ-bi は慶尚北道に, kal-baŋ-bi は慶尚南道や慶尚北道に 3 箇所ずつ分布する。kal-gaŋ-bi は慶尚南道, 慶尚北道, 江原道に若干見られ, kal-gi-raŋ-bi は慶尚北道の 1 箇所に見られる。

(1b)の niŋ-ge-bi は咸鏡南道にだけ見られる。

(1c)の po-su-rak-pi は主に平安北道に分布するが, 黄海道, 咸鏡南道, 平安南道にも 1 箇所ずつ見られる。ʔsa-rak-pi やʔsa-gi-raŋ-bi は咸鏡南道に若干見られる。

(2)の i-sil-bi は全羅南道や咸鏡南道に分布し, i-si-reŋ-i は忠清南道の 1 箇所に, ʃi-neŋ-bi 咸鏡南道の 2 箇所に見られる。

(3)は済州島にしか見られない。

(4)の ka-nin-bi は全羅南道, 全羅北道, 咸鏡南道に分布し, an-ge-bi は主に京畿道に分布し, 黄海道にも若干見られる。

(5)の ja-si-bi は慶尚北道の大丘に見られる。

## 4 文献上の記録

『月印積譜』(1459)に載っている k<sub>Λ</sub>-ra-βi (마르비)が細雨に当たる語形のうち最も古いものと思われ, これが ka-raŋ-bi の古い語形と考えられる。『訳語類解』(1690)や『方言類積』(1778)に k<sub>Λ</sub>-raŋ-bi (마랑비)が見られるが, これらの語形に当たる漢字語は「濛鬆雨」と表現されている。標準語である ka-raŋ-bi は『韓仏字典』(1880)に見られる。

『杜詩諺解』(1481)や『漢清文鑑』(1779)には k<sub>Λ</sub>-n<sub>Λ</sub>n-pi (마느비)が見られるが, これが ka-nin-bi の古い語形と考えられる。ka-nin-bi が見られる文献には『国韓会語』(1895)がある。

i-sil-bi は 2 つの文献に見られるが, 『広才物譜』(18--)では「濛鬆雨」を表す語とされており, 『韓仏字典』(1880)では「細雨」を表す語と説明している。用例を見ると次の通り。

마르비 가티 <1459 月印積譜 1: 36b>

마랑비 濛鬆雨 <1690 訳語類解 上 2a>

마랑비 濛鬆雨 <1778 方言類積 申部方言 4b>

가랑비 細雨 <1880 韓仏字典 133>

마느비 오눗다 <1481 杜詩諺解 23:27a>

이슬비 細雨 <1880 韓仏字典 46>

## 5 考察

ka-raŋ-bi (가랑비)の古い語形である k<sub>Λ</sub>-r<sub>Λ</sub>-βi (마<sub>ㄹ</sub>비)は、粉を表す k<sub>Λ</sub>-r<sub>Λ</sub> (마<sub>ㄹ</sub>)と雨を表す bi (비)の合成語である。金敏洙編(1997)は、近代語の段階において k<sub>Λ</sub>-r<sub>Λ</sub>-βi (마<sub>ㄹ</sub>비)の k<sub>Λ</sub>-r<sub>Λ</sub>に接辞 -aŋ (양)が付加されたと考えるのが正しいとしている。また、남광우(1957)は ka-raŋ-bi (가랑비)を ‘꺾(粉)+‘양(接辞)’+‘비(雨)’のように説明している(金敏洙編(1997:9)の再引用)。

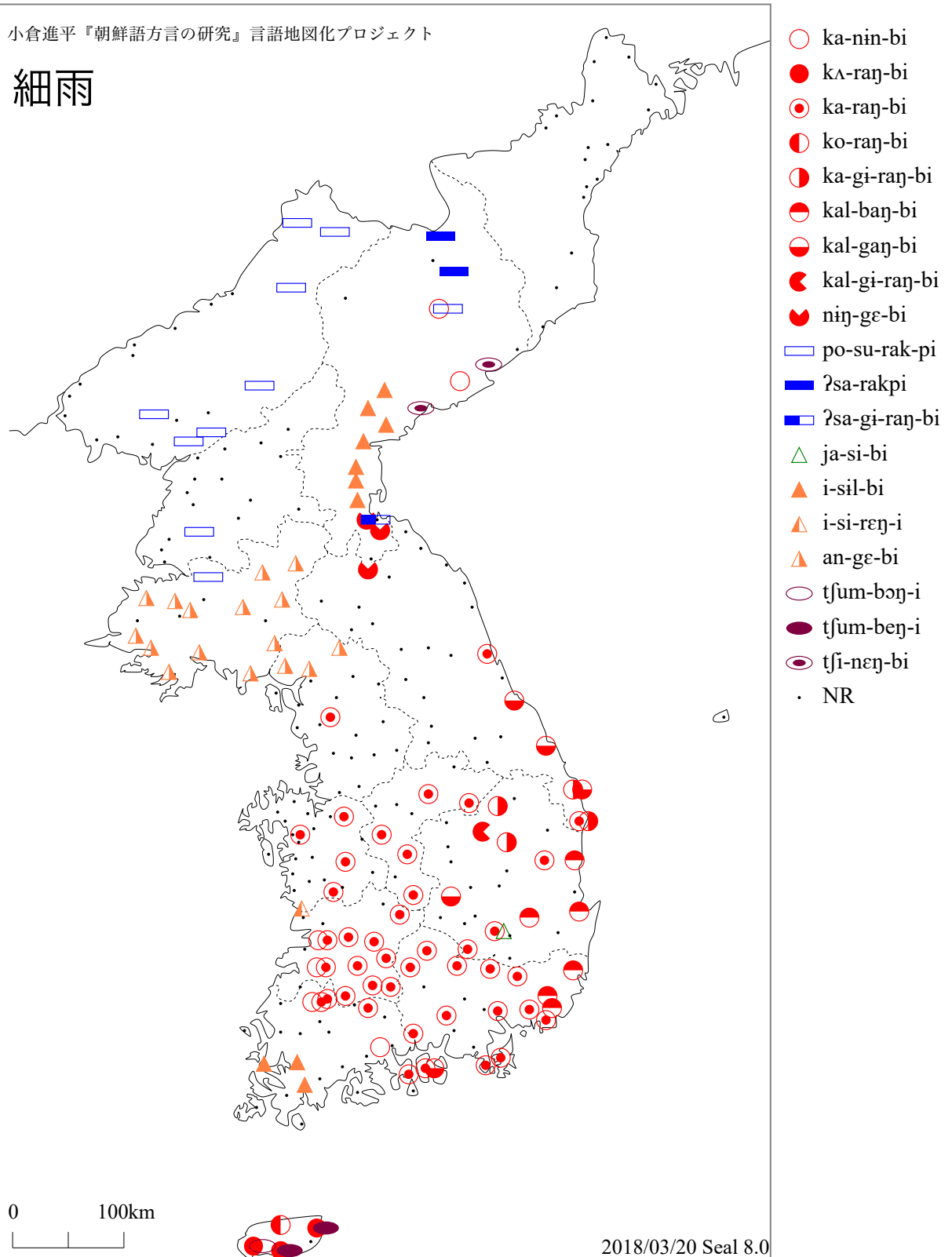
19種の語形の中で、(1a)の7種の語形の場合、k<sub>Λ</sub>-r<sub>Λ</sub>-βiから変化を起こした結果と推察できるが、それらを除いた他の語形は ka-raŋ-biとは関連性が薄いと思われる。『標準国語大辞典』の解説を参考にすると、ka-raŋ-bi (가랑비)の方言に当たる語形には(1b)の niŋ-ge-bi, (1c)の po-su-rak-pi, 'sa-rak-pi, 'sa-gi-raŋ-biがある。しかし、それらの語形のうち po-su-rak-piは po-sil-biの方言(平北, 咸南, 黄海)とも説明している。次に、(2)の i-sil-biの場合、ka-raŋ-biより雨粒の小さい雨を表すとされており、ŋi-neŋ-biが i-sil-biの方言とされている(i-si-reŋ-iは現れない)。また、(3)の ŋum-boŋ-iは nin-geの方言と説明しているが、nin-geは i-sil-biより雨粒が小さい雨を指す。(4)の an-ge-biの場合、nin-geよりさらに小さい雨とされている。最後に(5)の ja-si-biは他の語とは意味が異なり、「日照り雨」を表す jo-u-bi (여우비)の方言形と思われる。

## 参考文献

- 国立国語研究院 (1999) 『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.  
金敏洙編 (1997) 『우리말語源辞典』ソウル：太学社.  
金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.  
崔鶴根 (1990) 『増補 韓国方言辞典』ソウル：明文堂.



# 細雨



# 山・墓

岩井亮雄

## 1 はじめに

韓国の標準語は「山」と「墓」で綴りが異なり、「山」の方は固有語 *me* (메), 「墓」の方は固有語 *mø* (묘) である。標準語の語形にはこの他に、「山」の方は漢字語 *san* (산) が、「墓」の方は固有語 *mu-dòm* (무덤) や漢字語 *mjo* (묘) がある。「墓」の *mø* と *mjo* の語種は違うが、小倉進平の「票」「学校」等のデータを参照すると *mjo* > *mø* と変化した可能性がある。項目名が「山・墓」となっているが、これは語源に由来するものと思われる。

これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「地理・河海」に「山・墓」という項目名で14種の語形が記録される(上: 35-36)。

- (1) *mø* 系: (1a) *mø* / *me*, (1b) *mɛ*, (1c) *mi*, (1d) *mo-i*
- (2) *met* 系: (2a) *met*, (2b) *met*
- (3) *mø-ʔtoŋ* 系: (3a) *mø-ʔtoŋ* / *me-ʔtoŋ* / *me-ʔtoŋ*, (2b) *mɛ-ʔtoŋ* / *mɛ-ʔtoŋ*
- (4) *ʔkak-kim* 系: (4a) *kak-kim* / *ʔkak-kim*

(1) は開音節の一音節語であり、(1a) の半狭母音、(1b) の半広母音、(1c) の狭母音、(1d) の中世語の発音を保存した母音の連続に下位分類できる。(2) は閉音節の一音節語であり、(2a) の半狭母音、(2b) の半広母音に下位分類できる。(3) は (1) の語形に *-ʔtoŋ* / *-ʔtoŋ* がついた複合語である。(4) は (1-3) とは別の語形である。

## 2 その他の語形

『韓国言語地図』(2008)にはこの項目はない。『韓国方言辞典』(重版1987)には산(山)の見出しで(1) *mø* 系の *me* / *mø* / *mi*: (ハングルのローマ字転写は小倉進平の方法(下: 13-14)による。以下同様)が、この他に *mɛ-ʔka-tʰe* / *mɛ-ʔka-tʰi* / *mɛ-ʔka* / *mek-kan* / *mek-kat* / *san* (山) / *sək-kat* / *sək-kat-tʰaŋ* / *o-rim* があり、무덤(墓)の見出しで小倉進平のデータにない語形として、(1) の変種に *me:* / *mø:i* / *me:* / *mo* / *mo:* / *mo-i* / *mo:-i* / *mø:* / *mjoi* (묘) / *mjo* / *mjo:* / *mu:-i* / *mi:* が、(3) の変種に *me:-ʔtoŋ* / *me:-ʔtoŋ* / *me-ʔtoŋ-gə-ri* / *me-ʔtuŋ* / *mø-ʔtoŋ* / *mø-ʔtuŋ* / *mjo-ʔtoŋ* / *mi:-ʔtoŋ* / *mi-ʔtuŋ* が、この他に *mjo-sa* (廟社) / *mu-dòm* / *mu-dim* / *pa-ʔkal* / *san* (山) / *san-so* (山所) がある。小倉進平のデータは主に 무덤(墓)にあたる。ここで、小倉進平のデータには見られない長母音の語形がある点が重要である。この項目の中世語は声調が上声の二重母音(母音の連続)であったとされるからである。また、小倉進平のデータでは記録されていない咸鏡北道については『咸北方言辞典』(1986)に묘:(墓)の見出しで *mo* / *mo-i* / *mos* / *mjo* / *san-so* (山所) が、산(山)の見出しで *san* (山) という語形が見られる。

### 3 地理的分布

(1a) の  $m\emptyset$  は全羅北道, 忠清道, 江原道, 京畿道, 黄海道, 平安南道, 咸鏡南道に見られ,  $me$  は濟州島, 慶尚南道, 京畿道, 江原道, 黄海道, 平安北道などに見られる。(1b) の  $me$  は全羅南道と慶尚南道に, (1c) の  $mi$  は慶尚道に, (1d) の  $mo-i$  は忠清道に見られる。

(2) は全羅道に見られる。

(3) は全羅道や慶尚南道に見られる。(1) か (4) の併用形として現れやすい。

(4) は全羅南道や慶尚南道に見られる。基本的には併用形として現れる。

### 4 文献上の記録

まず「山」にあたる中世語の語形は固有語の:뫼/:뫼ㅎ (左の: は上声を表し, 語幹は助詞などとの結合に伴い交替し得た) である。代表的な用例は以下のようなものである (: や・ は傍点である)。漢字語の산 (山) を使った用例も既に見られる。

□ 如:뫼爲山 <1446 訓民正音 (解例本) 24b-25a>

:뫼히·며 프리·며 글·히·디 아·니·ㅎ·야 <1447 積譜詳節 3: 35b>

□ 山·애 다·라 가·니 <1459 月印積譜 22: 40a>

両唇音後の  $\emptyset$  (ㄱ) はほとんどが  $e$  (ㄱ) に変わるが, 19 世紀末にこうした変化が起きたとされる(兪弼在 2006)。表記と発音に変化が生じたことになる。中世語の発音は [moi] で, それが [me] に変化したことになるが, その過程で [m $\emptyset$ ] を経たかなどは明らかではないと思われる。20 世紀初の文献には固有語の뫼と뫼의の両方の語形も見られるが, この頃になるとほとんどが漢字語の산を使った用例である。

눅흔 뫼에서 안거ㅎ야 <1907 宝鑑 (京郷新聞) 2: 334>

술을 가지고 뫼에 올라 절 ㅎ는 이가 잇거늘 <1908 神学月報 6: 184>

山 뫼 산 <1913 部別千字文 4b>

山 뫼 산 <1916 通学径編 3b> <1918 初学要選 005>

산에 올라가며 <1901 神学月報 1: 53>

次に「墓」にあたる中世語の語形は固有語의무·덤 (左の· は去声を表す) と漢字語의묘 (墓) や분묘 (墳墓) である。これらの語は現代でも用いられるが, このほか, 中世語では「墓」の意味での用例が確認できなかった뫼という語も使われるようになる。

聖人 무덤이라 ㅎ더라 <1459 月印積譜 2: 68a>

國人이 다 울어늘 墓애 가실 제부테 앞서시니 <1459 月印積譜 10: 3b>

한아버와 어버의 분묘를 다 손조 ㅎ 지여 뫼글오 <15-- 三綱行実図 (東京) 孝 26a>

흙을 싹하 되를 만들며 <1852 太上感應篇圖說諺解 2: 61a>

남의 되를 억지로 파거나 <1890 獨立新聞>

## 5 考察

項目名が「山・墓」である所以の一つは語源によると思われる。語源に関して『詞源辞典』(1996: 175–176) に記述が見られるので、それを紹介する。まず  $m\emptyset$  は山の意味の  $mo-ro$ , 即ち  $mjo-roŋ-i$  に由来する。『龍飛御天歌』(1447) に  $phi-mo-ro$  (楸山) という例が見られる。この  $mo-ro$  はもともと墓を意味し,  $o-rom$  が山を意味した。san という漢字語が使われだすと同時に  $o-rom$  が次第に使われなくなり, 墓が山のように盛り上がっていたので山とともに使われるようになった。即ち,  $mo-ro$  ( $mjo$ ) は墓を意味するものとして山の一部分だったが, 山全体をなすことばになった。現代にかけては  $mo-ro \rightarrow m\emptyset \rightarrow me$  のように変化した。このように『詞源辞典』(1996: 175–176) では説明している。

この項目は中世語では上声で  $[moi]$  のように発音されたとされるが, その後  $oi / \emptyset > e$  (ハンデルではしばしば  $\text{ㅁ} > \text{ㅂ}$  のように書かれるため  $\text{ㅁ}$  の発音が判然としないので  $oi / \emptyset$  のように書く) のような両唇音後の母音の典型的な変化を経たものである。19 世紀末にこのような変化が起きたとされる(兪弼在 2006)。小倉進平のデータから, 音変化の地理的特徴が分かる。 $me$  に変化している, 音変化の点からいうと典型的な地域は, 濟州島, 慶尚道の一部, 京畿道, 黄海道, 平安北道である。 $moi > m\emptyset$  のような変化を経た地域は, 全羅北道, 江原道, 京畿道, 黄海道, 平安南道, 咸鏡南道である。忠清道では中世語での発音の  $moi$  を維持する。慶尚道は  $me > mi$  のような狭母音化が起きたと考えられる。以上のような発音の地域差を示すのは興味深い。ところで, 文献上の記録によると中世語  $m\emptyset$  は「山」の意味で基本的に用いられているようなので, 「墓」の方では  $mjo > m\emptyset$  という変化があったかもしれない。

(1)  $m\emptyset$  系以外の語形については, 必ずしもその由来が明らかではないが, 全羅道や慶尚南道といった朝鮮半島南部に見られる点が共通している。(2)  $met$  系の音節末子音  $t$  は,  $met-t\emptyset-dzi$  (땃되지) などの接頭辞から転じたもの, (3) の後部要素が脱落した名残, 中世語の音節末の  $h$  の名残の可能性もあるかもしれない。(3) の後部要素についてもよく分からないが, 漢字語  $ton-de$  (墩台, 高台を意味する) の  $ton$  が意味から見ると関係があるかもしれない。(4) の由来についても判然としない。

## 参考文献

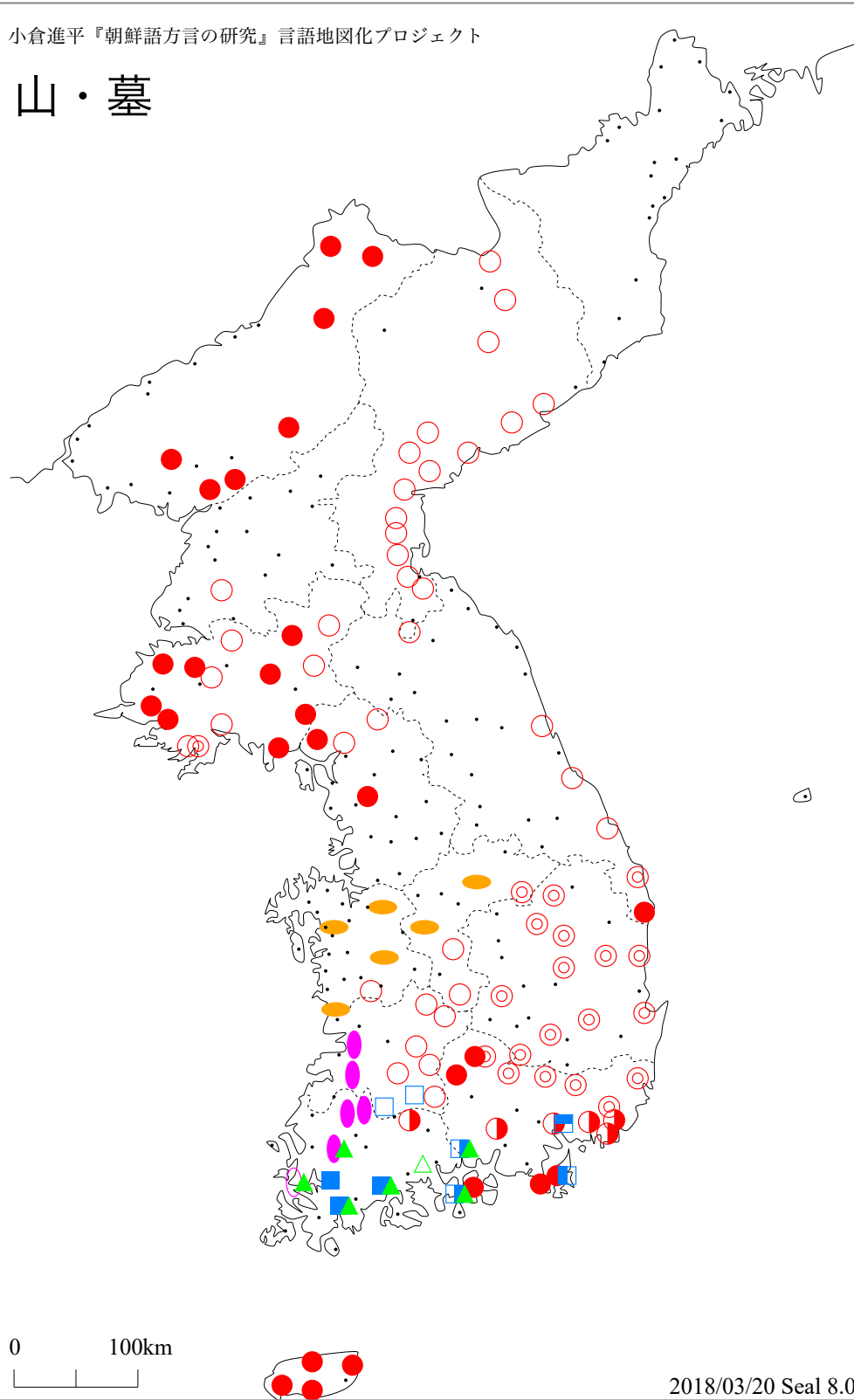
安玉奎 (1996) 『詞源辞典』(海外우리語文学研究叢書 62) ソウル: 韓国文化社.

金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル: 京畿大学校出版局.

崔鶴根 (1978, 重版 1987) 『韓国方言辞典』ソウル: 明文堂.

兪弼在 (2006) 「양순음 뒤 ‘ㅁ>ㅂ’, ‘ㄱ>ㄴ’ 변화에 대하여 (兩唇音後の  $oi > e$ ,  $ui > i$  の変化について)」『李秉根先生退任紀念國語學論叢』193–209. ソウル: 太学社.

# 山・墓



# 外

岩井亮雄

## 1 はじめに

この項目は母音  $\emptyset$  の当時の発音とその地域差を示す貴重な資料である。

韓国の標準語は漢字語の  $\emptyset$  (외, [ø] または [we] と発音される) である (固有語で pak (밖) という語もある)。これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「方位」に「外」という項目名で7種の語形が記録される(上: 54-55)。これらの語形は  $\emptyset$  と母音の変種から成る。

- (1)  $\emptyset$  / we / e
- (2) we / ε
- (3) ui (= wi) / i

地理的分布と音声的特徴を考慮に入れると、(1) 半狭母音の語形、(2) 半広母音の語形、(3) 狭母音の語形に下位分類できる。なお、(3) の ui は、wi と転写する方が適当であると思われる(下: 13-14)。

語形のほかに、一部の地点には地名の読み方のメモ書きなどが残されている(上: 54-55)。「外」の他、「會」「菘」「槐」などを含む地名の読みにおいても、以下のとおり、「外」と同じ母音の発音が現れるか、その地域の周辺で見られる母音の発音が現れる。

[ε]〔慶南〕金海(郡内外洞里を [ε-don-ni] 又は [we-don-ni], 會峴を [he-in] 又は [hi-in] といふ), 居昌(郡内菘亭里を [ε-mak-kol] (sic) 又は [we-mak-kol] といふ), 〔慶南〕密陽(郡内山外面を [san-ε-mjon] といふ); 〔慶北〕浦項(郡内槐東洞を [ke-don-don] といふ); 〔咸南〕洪原(邑内では [ø] 西方西上里では [ε])

[e]〔慶南〕河東(郡内横川面を [heŋ-tʰɔn-mjon] といふ); 〔忠北〕清州(郡内江外面を [kaŋ-e-mjon], 槐山郡を [ke-san-gun] といふ), 永同(郡内槐木里を [ke-mon-ni] といふ。また槐山を [ke-san] と発音するを以て、稽山 [ke-san] と混同する)

[i]〔慶北〕尚州(怪異を [ki-i], 回答を [hi-dap] などといふ)

[we]〔慶南〕陝川(郡内嘉會面を [ka-hwe-mjon], [ka-hwe-mjon], [ka-he-mjon] などといふ); 〔慶北〕青松(郡内月外里を [wɔl-we-ri] といふ); 〔平北〕龜城(郡内龍退洞を [noŋ-tʰwe-don] といふ)

[we]〔慶南〕蔚山(郡内南外里を [nam-we-ri] といふ); 〔忠北〕忠州(槐山及び忠州では槐山郡を [kwe-san-gun] といふ), 丹陽(槐山郡を [kwe-san-gun] といひ, また郡内の外中坊里を [we-tʃuŋ-baŋ-ni], 槐坪里を [kwe-phjon-ni], 檜山里を [hwe-sal-li], 長淮里を [tʃaŋ-we-ri] といふ); 〔咸北〕富居(郡内最賢洞を [tʰwe-hjon-don], 横兵洞を [hweŋ-bjon-

doŋ] といふ), 會寧 (會寧を [hwe-rjɔŋ] といふ)

## 2 その他の語形

『韓国言語地図』(2008)にはこの項目はない。『韓国方言辞典』(重版1987)には固有語の語形 pa-ʔka-tʰe / pa-ʔkat / pa-ʔkat-tʰe / pe-ʔka-tʰe (ハングルのローマ字転写は小倉進平の方法(下:13-14)による)も見られるが,漢字語の語形については小倉進平の語形と同じである。全て短母音である点も小倉進平のデータと同様である。

## 3 地理的分布

言語地図から分かるように, (1) は平安道の一部を除いて全道的に見られる。このうち単母音 ø は朝鮮半島の主に中央付近に分布するのに対し, 二重母音 we は済州島, 慶尚道, 咸鏡道といった朝鮮半島の南部と北部に主に分布する。換言すると, ø は朝鮮半島の西南から東北にかけて帯状に分布する特徴がある。ただし, 咸鏡道にも ø が見られるし, 全羅道, 忠清道, 京畿道の一部にも we が見られる。

(2) は慶尚道, 平安道, 咸鏡道に見られる。慶尚道の多くと咸鏡道の一部では, 言語地図から分かるように, (1) と併用ないし共存して分布している。従って, これらの地域では we / we や e / ε の対立がほとんどなかった可能性がある。これに対し, 咸鏡道の北端と平安道では半広母音の we だけが分布するのが特徴である。また, (1-2) を総合すると, 二重母音 we / we は, 単母音 ø が現れないような, 朝鮮半島の南部や北部に主に分布する特徴がある。

(3) は慶尚道にのみ見られる。これはおそらく狭母音化 e / ε > i によるものであろう。

## 4 文献上の記録

中世語は漢字語の:외 (外, 左側の:は上声を表し, [oi] と発音されたとされる) である。『朝鮮漢字音研究』(2007)の代表的な漢字音も [ʔoiʔ] であり, 『六祖法宝檀經諺解』(1496), 『真言勸供・三壇施食文諺解』(1496), 『翻訳小学』(1517), 『訓蒙字会』(1527), 『小学諺解』(1586), 『大学諺解』(1590), 『中庸諺解』(1590)などに用例が見られる。

中部方言(特にソウルとその隣接地域)の ø (외)の発音に関する文献上の記録を整理した金鳳國(2006)を参照すると, 19世紀末から20世紀初の記録は主に [oi / ø / we] の3種類があり, 中世語の発音を反映した [oi] を除くと, 観察や記述の精密さなどにより単母音 [ø] が優勢であったとされる。1920年以降の記録は主に [ø / we] の2種類があるが, この頃になると二重母音 [we] が優勢になったとされる。

## 5 考察

この項目は中世語では声調が上声の二重母音(母音の連続)であったので, 長母音が記録される地点があることが期待される。しかし, 小倉進平のデータや『韓国方言辞典』(重版1987)には長母音がどの地点にも観察されない。これは, この項目が漢字語であることや,

この項目が単独でというよりはむしろ「～の外」のような環境で用いられることが多いことによるものと思われる。なお、福井玲（2016: 50）では小倉進平の方言データ全体を通して「母音 [ø] が現れる場合には原則として短母音として表記されているような印象を受ける」と言及している。

ø (외) の発音の地域的特徴については、3 節で述べたように、[ø] が全羅道、忠清南道、京畿道、江原道、黄海道、平安南道、咸鏡道に集中して分布する。朝鮮半島を西南から北東にかけて帯状に広がる如くである。済州島は [we] で発音され、[we/e] は全羅南道の一部、慶尚道、忠清北道、京畿道の一部、咸鏡道の一部に分布する。[we/ε] は慶尚道などでも [we/e] と共存して現れるが、平安北道や咸鏡北道の一部に分布するところが特徴的である。従って、[we/e/we/ε] (=A) と [ø] (=B) は ABA 型分布をなすように見える。[wi/i] は慶尚道に分布するが、これは狭母音化によるものであろう。以上の如き発音の地理的特徴は、「外」を中心にこの母音を含む語を幾らか例示しつつ検討した小倉進平の考察（下: 26-28）や、『朝鮮語方言の研究』（1944）で全道的に調査された語彙項目からこの母音を含むものについて検討した岩井亮雄（2017）などに一脈通ずる。

次に、中世語の発音から小倉進平の調査時の発音へどのように変化したかを考える。この音変化に関する先行研究には、(i)  $oi > ø > we$  や (ii)  $oi > we > ø$  のような直線的な変化と、(iii)  $oi > ø$  及び  $oi > we$  のような複線的な変化などの議論がある（金鳳國 2006: 178-181）。まず、小倉進平の記録から分かることの一つは、 $oi > ø$  に変化した地域、 $oi > we/e$  に変化した地域、 $oi > we/ε$  に変化した地域があり、音変化に地域差が見られるということである。これは先の (iii) の考え方に似ている。そして、地理的分布が一種の ABA 型分布をなす可能性について言及したが、このことから、 $we/we > ø$  のような変化が想定できるかもしれない。これは先の (ii) の考え方に通じる。ただし、例えば本稿で引用した金鳳國（2006）は開化期以降の文献上の発音の観察記録や音韻論的な説明の妥当性などを勘案し、先の (i) の考え方を支持している。音変化に関する詳細な検討が要請される。

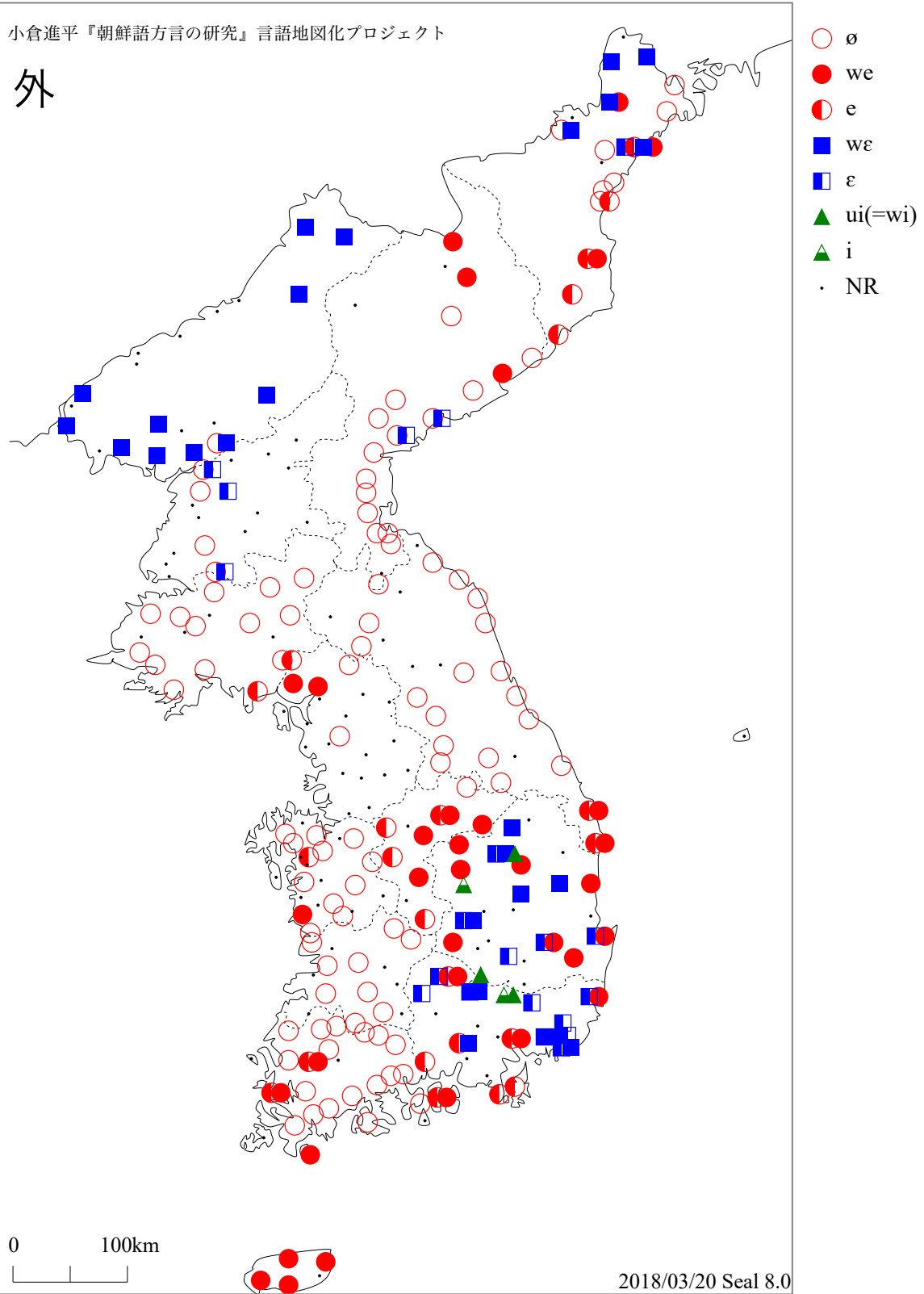
なお、「外」は親族名称などの接頭辞としても用いられるが、小倉進平のデータにはそのような項目ない。

## 参考文献

- 伊藤智ゆき（2007）『朝鮮漢字音研究』東京：汲古書院。  
岩井亮雄（2017）「韓国語の母音 ø の音色の地域差について—小倉進平著『朝鮮語方言の研究』所載資料を活用して—」『東京大学言語学論集』38: 87-99. 東京大学言語学研究室。  
金鳳國（2006）「개화기 이후 국어의 ‘위, 외’ 음가와 그 변화（開化期以降の国語の ui, oi の音価とその変化）」『李秉根先生退任記念国語学論叢』155-191. ソウル：太学社。  
崔鶴根（1978, 重版 1987）『韓国方言辞典』ソウル：明文堂。  
福井玲（2016）「小倉進平の朝鮮語方言調査について—『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために—」『東京大学言語学論集』37: 41-70. 東京大学言語学研究室。



外



# 子の妻

徐 旻 廷

## 1 はじめに

韓国語の標準語は *mjo-ni-ri* (며느리) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「人倫」に「子の妻」という項目名で15種記録されている(上: 63-64)。濟州島で見られる *a-dʒaŋ* を除けば、全ての語形は第1音の母音を基準に、*mjo-nu-ri* 系, *me-nu-ri* 系, *mɛ-ni-ri* 系, *mi-nu-ri* 系に分けられる:

### (1) *mjo-nu-ri* 系

*mjo-nu-ri* / *mjo-ni-ri*

### (2) *me-nu-ri* 系

*me-nu-ri* / *me-nul* / *me-ni-ri* / *me-na-ri* / *me-no-ri* / *me-ni-ri*

### (3) *mɛ-ni-ri* 系

*mɛ-ni-ri* / *mɛ-nil* / *mɛ-no-ri*

### (4) *mi-nu-ri* 系

*mi-nu-ri* / *mi-ni-ri* / *mi-na-ri*

### (5) その他

*a-dʒaŋ*

これらの語形は大部分3音節語であり、各音節の子音には変種がないが、母音にはいろいろな変種が見られる。第1音節の母音には *jo* / *e* / *ɛ* / *i* の4種があり、これによって語形を分類することができる。また第2音節も第1音節と同様、母音の違いによる変種があり、母音の種類としては *u* / *i* / *a* / *ɔ* / *i* がある。その中で最も多く見られる母音は *u* / *i* である。これに対し、第3音節は *ri* と固定されている特徴がある。2音節語の *me-nul* と *mɛ-nil* は各々 *me-nu-ri* と *mɛ-ni-ri* が縮約されたものと考えられる。

## 2 その他の語形

『咸北方言辭典』(1986)によると、咸鏡北道において小倉進平の資料には見られない *며늘*, *아기*, *아기네* のような語形も見られる。また、小倉進平の資料では、濟州島に関して *a-dʒaŋ* という1種の語形しか見られないのに対し、『濟州島方言研究資料編』(1985)によると、語形 *며느리* が濟州島全地域にわたって見られる。

## 3 地理的分布

最も広く分布しているのは(2)の *me-nu-ri* 系であり、その中でも語形 *me-nu-ri* は北西地方

(平安道)の一部を除いて、全地域にかけて分布している。さらに『済州島方言研究資料編』(1985)によると、済州島においても分布している。他に第2音節の母音の違いによる変種 me-ni-ri が全羅南道と咸鏡道に見られ、また me-no-ri が慶尚道の一部、me-na-ri が慶北、江原道の一部、me-ni-ri が平北に見られる。これに対し、現在韓国語の標準語の(1a) mjo-ni-ri は全北の咸平と咸北の鐘城の2か所にしか見られず、もう1つの(1) mjo-nu-ri 系の語形(1b) mjo-nu-ri も忠南、忠北、黄海にしか現れない。

なお、第1音節の母音がεである(3) mε-ni-ri 系と、iである(4) mi-nu-ri 系は、主に南部に分布している特徴がある。(3) mε-no-ri 系の me-ni-ri は全南、慶尚道に、mε-no-ri もまた慶尚道に分布している。mε-nil も慶北の永川の一か所に見られる。(4) mi-nu-ri 系の mi-nu-ri は全羅道、慶尚道と忠北に見られ、mi-ni-ri も全南、慶尚道に見られる。mi-na-ri は慶北の金泉と江原道の一部に見られる。

#### 4 文献上の記録

子の妻を表す語は文献上며·느·리, 며○·느·리, 며·늘, 며느라기의記録がある。その中で最も古い記録は『釋譜詳節』で見られる며·느·리であるが、同じ15世紀の文献『月印千江之曲』では2音節語で、第2音節の母音が‘·’[ʌ] (アレア)である며·늘も見られる。

부인이 며느리 어드샤문... 자손이 니서 가른 위흐시니 <1447 釋譜詳節 6: 7>  
며느리 부(婦) <1527 訓蒙字會 上31>

며늘이 드외야 <1449 月印千江之曲 36>  
며늘의 네 되리라 <1703 三訳総解 10: 20>

며느리 식아비 식어미를 섬교디 <1586 小学諺解2: 2>  
며느리 부(婦) <16世紀 類合上29>

식어마님 며느라기 <1728 靑丘永言 p.120>

15世紀から16世紀にかけて、非語頭音節におけるアレアから一への母音の変化 (ʌ>i)が起きていたこと<sup>1</sup>から、古い語形は2音節の母音がアレアである며·늘/며·느·리であった可能性も考えられる。

#### 5 考察

語源について、金敏洙編(1997)『우리말語源辞典』で次のような記述がある：

<sup>1</sup> 李基文(1998)参照。

[語源未詳。変化 머느리(稊譜 6:7)/머○느리(月曲 36) > 머느리。参考 ①√메[食]+√느르- (運搬)+이[接辞] (정호완 1991.4.15:177)。②√머늘[?]+이[接辞](韓美辞典)] (筆者訳)

ここで語源説の1つとして①にあげてあるのは、この項目の語源を「√메[食]+√느르-(運搬)+이[接辞]」とするものである。しかし、『標準国語辞典』によると、「메」は「1. 祭事の時神位の前に置くご飯, 2. 宮廷で「ご飯」の意味で使われる言葉」(筆者訳)の意味であるが、「運搬」に関する用言나르다の古い語形は나르다であるため、子の妻の語源と関連付けるのは難しいと考えられる。

なお、文献上の記録から、この語形は古くから第1音節の母音がjoであったことが明らかであり、me-nu-ri系, me-ni-ri系, mi-nu-ri系の第1音節の母音はjo > e/e > iのような単母音化と前舌母音化の変化を経たと考えられる。特にmi-nu-ri系が南部地方で見られることは前舌母音化が活発に起きる南部地方方言の特徴が現れたものと説明できる。

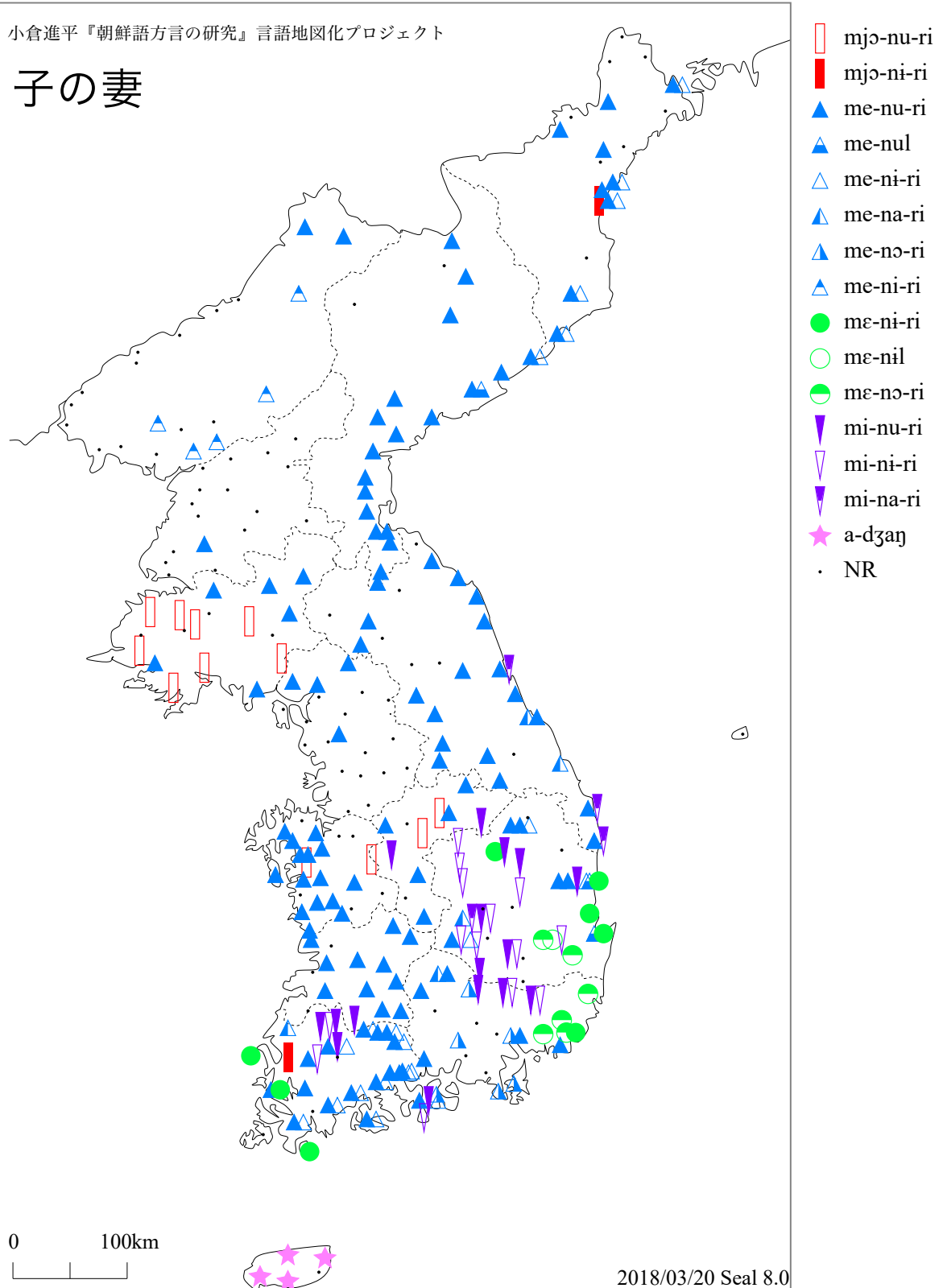
第2音節の母音に関しては、iの他u, a, iもある。上述のごとく15世紀から16世紀にかけて非語頭の位置の母音‘ㆍ’ [ʌ] は ʌ > iのような変化を経たことが良く知られているが、この語形にはi以外の母音、特にuが多く見られる。i > u或いは、i > a, i > iのような変化は説明し難いため、母音‘ㆍ’の変化は、地域によっては変種があったと考えられる。

最後に、現在の韓国語の標準語は第1音節の母音がjo, また第2音節の母音がiのmjo-ni-riであるが、実際の方言形の分布においては語形me-nu-riが全地域にかけて現れ、mjo-ni-riは2か所にしか見られない。より広い分布を見せた語形ではなく他の語形が標準語になったのは、標準語を定める際、古い語形を考慮し、mjo-ni-riという語形を標準語として定めた可能性も考えられるが、より詳しい検討が必要であろう。

#### 参考文献

- 李基文(1998)『新訂版 国語史概説』ソウル：太学社。  
金泰鈞編著(1986)『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局。  
金敏洙編(1997)『우리말語源辞典』ソウル：太学社。  
玄平孝(1985)『济州島方言研究資料編』ソウル：太学社。

# 子の妻



# 男子・男児

徐 旼 廷

## 1 はじめに

現在韓国語の標準語は sa-na-i (사나이) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「人倫」に「男子・男児」という項目名で 19 種類記録されている (上: 64-65)。これらは (1) sa-na-i 系と (2) mǝ-si-ma 系の 2 つに分類される：

### (1) sa-na-i 系

(1a) sʌ-na-i, (1b) sa-na-i / sa-nɛ / sa-na-dʒuŋ, (1c) sɔ-na-i / sɔ-na / sɔ-na-dʒi

(1d) sɔn-si-na / sɔn-si-ni / si-na-dʒø, (1e) si-na-i / si-na-dʒuŋ-i

### (2) mǝ-si-ma 系

(2a) mǝ-si-ma / mǝ-si-ma-gi / mǝ-sɔ-ma / mǝ-si-ma

(2b) mǝ-si-mɛ / mǝ-si-mɛ / mǝ-i-mɛ

sa-na-i 系は古い語形  $\text{사}\cdot\text{나}\cdot\text{이}$  /  $\text{사}\cdot\text{나}\cdot\text{이}$  から由来したと考えられるが、古い語形の第 1 音節に対応する音節の母音を基準に分類することができる。即ち、(1a), (1b), (1c), (1e) は古い語形の第 1 音節に対応する音節は第 1 音節であり、各々の第 1 音節の母音には a / ʌ / ɔ / i のようなものがある。これらの語形は殆ど 3 音節語であるが、(1b) の sa-nɛ は sa-na-i の第 2 音節と第 3 音節の母音が縮約されて 2 音節語になったもの、また、(1c) の sɔ-na は sɔ-na-i の第 3 音節の母音の脱落によって 2 音節になったと考えられる。

(1d) の語形は、古い語形の第 1 音節に対応する音節の母音は i であり、si-na-dʒø は第 1 音節がそれに該当する。sɔn-si-na / sɔn-si-ni に関しては、語形 sɔ-na の存在を考慮すると、古い語形から由来する \*si-na-i を想定し、さらに最後の母音 i が脱落し 2 音節語 \*si-na, \*si-ni になり、後に接頭辞 sɔn- が付いたものだと解釈できる。即ち、古い語形の第 1 音節に対応する音節は第 2 音節であり、これらを考慮すると、古い語形の語頭母音 ‘ ’ [ʌ] に対応する方言形の母音には a / ʌ / ɔ / i / i の 5 種がある。なお、sa-na-i 系の中では語末に接尾辞が付いた、(1b) の sa-na-dʒuŋ, (1c) の sɔ-na-dʒi, (1d) の si-na-dʒø, (1e) の si-na-dʒuŋ-i の語形もあるが、これらの語形に付いた接尾辞は全て子音 dʒ- から始まる特徴がある。

mǝ-si-ma 系の語形は、第 3 音節が (2a) -ma のものと、(2b) -mɛ のものの 2 つに分類することができる。mǝ-si-ma も殆どが 3 音節語であり、第 1 音節は mǝ と固定されているが、2 音節と 3 音節の子音と母音には変種がある。2 音節の母音には i / ɔ / i があり、子音は s である語形が殆どであるが、(2b) の語形の中で 2 音節の子音 s が脱落した語形 mǝ-i-mɛ もある。また、(2a) の語形の中には単語末に -gi が付いた 4 音節語 mǝ-si-ma-gi もある。

## 2 その他の語形

小倉進平の資料以外では, 金泰鈞編著(1986)によると咸鏡北道には선서나, 선순아, 선스나이, 선신아, 선서나, 스나のような語形もあり, 特に語形선스나이, 스나가見られることは, 小倉進平の語形(1d) sɔn-si-na / sɔn-si-ni が스나의前に sɔn- が付いて作られたことの裏付けになる。また, 金英培(1997)によると平安道には새나이, 서날미, 선서나, 선서날미, 아쌌끼のような語形があり, 玄平孝(1962/1985)によると済州道には第1音節の母音が o である語形소나이의, 소나이と ʌ である스나이의もある。

## 3 地理的分布

忠清道地域で sa-na-i 系と mɔ-si-ma 系の分布に重なりが見られるものの, それ以外の地域では2つの語系の分布が南北に分かれており, 典型的な南北対立型分布<sup>1</sup>を成している。即ち, 朝鮮半島の北では sa-na-i 系が, 南では mɔ-si-ma 系が分布している。

sa-na-i 系の中では, sɔn-si-na が咸鏡道, 平安道を中心に最も広く分布している。現在標準語として登録されている sa-na-i は黃海道を中心に, また sa-ne は京畿道, 忠清道を中心に分布している。mɔ-si-ma 系では, mɔ-si-ma が慶尚道, 全羅道, 江原道に最も広く分布し, 第3音節の母音が前舌母音である mɔ-si-mɛ/mɔ-si-mɛ が忠清道と全羅道など, 西の地域を中心に分布している。忠清道では sa-na-i 系の sa-ne と mɔ-si-ma 系の mɔ-si-mɛ 或いは mɔ-si-ma と併用している特徴が見られる。

## 4 文献上の記録

文献上の記録としては, (1) sa-na-i 系の古いものと考えられる순아·히, 사히, 스나·히, 스나히があり, 最も語源的な構成をよく示す語形は15世紀の순아·히である。

순아히 오춤 <1466 救急簡易方 6: 29>

남지녀 소리 겨지비 소리 사히 소리 갓나히 소리 法 소리 <1447 釈譜詳節 19: 14b>

저문 스나히 오춤 <1542 分門瘟疫易解方 20>

스나히가 간나히가 <16世紀 朴通事諺解初刊上 55>

우리 더귀 스나히는 물깃디 아니호고 <1670 老乞大諺解 上 33>

스나히는 지고 겨집은 이고 <1676 捷解新語 4: 24>

간나히 가는 길흘 스나히 에도드시 <1728 靑丘永言 p.13>

스나히 네는 길흘 계집이 칩도드시 <1747 松江歌辭 2: 2>

15世紀の文献に見られる순아·히는15世紀以降스나·히と表記され, その後第3音節の母音の変化によって스나히の語形が現れたと考えられる。스나히は主に17世紀以降の文献で

<sup>1</sup> 福井玲(2017)によると, 朝鮮語方言の分布のパターンには南北対立型分布, 東西対立型分布, 逆L字対立型分布, 圏論的分布がある。

見られる。ㄱ아·히と同じく 15 世紀の文献に 1 件見られる사히は, ㄱ아·히の第 1 音節の母音 ‘ㆍ’ が省略されてた表記と考えられる。なお, 文献上の記録では(2) mo-si-ma 系の古いものは見当たらない。

## 5 考察

金敏洙(1997)では sa-na-i について「男を堂々と威勢が良くて潔いことを強調する言葉。語源：√ㄱ[壯丁]+√아·히[兒]。変化：ㄱ아·히>스나히>스나히>사나이」(筆者訳)と説明している。ㄱ[壯丁]の現代韓国語では漢字語の‘장정’であり, 16 世紀の文献で見られるが(ㄱ녕(丁) <1527 訓蒙字會 中 2>), 現在は使われていない。아·히[兒]の現代韓国語は아이に変化した。

上述のごとく, ㄱ아·히の表記は스나·히になり, 스나·히から第 1 音節の母音の変化, また第 3 音節の母音の変化と子音 h の脱落が想定できる。特に第 1 音節の母音 ‘ㆍ’ [ʌ] に関しては, 18 世紀に a に変化したことがよく知られているが, 方言形 sa-na-i 系で, 古い語形の第 1 音節と対応する音節の母音には a のみならず ʌ/o/i/i があり, 玄平孝(1962/1985)の語形を受け入れると o もある。これらの母音を a>ʌ/o/i/i/o のような変化として解釈するのは難いため, 語頭母音 ‘ㆍ’ の変化には地域差があった可能性が考えられる。

また, sa-na-i 系で最も広く分布している語形は sɔn-si-na であるが, sɔn-si-na はㄱ아·히に由来する \*si-na の前に接頭辞 sɔn-が付いた語形と解釈できる。咸鏡道, 平安道方言に sɔn-が付いた他の語が見当たらないため, sɔn-の意味は不明であるが, 現代韓国語의 선무당, 선머슴のような語彙で, 「未熟だ」の意味を表す接頭辞 sɔn-と関連があるかもしれない。

mo-si-ma 系に関しては, 姜吉云(2010)で mo-si-ma/mo-si-me の語源をトルコ語の男の意味の merdüm と対応させているが, 文献上の記録が見当たらないことから(2) mo-si-ma 系がいつから使われるようになったかは不明であり, 話し言葉でしか使われてなかったことが考えられる。

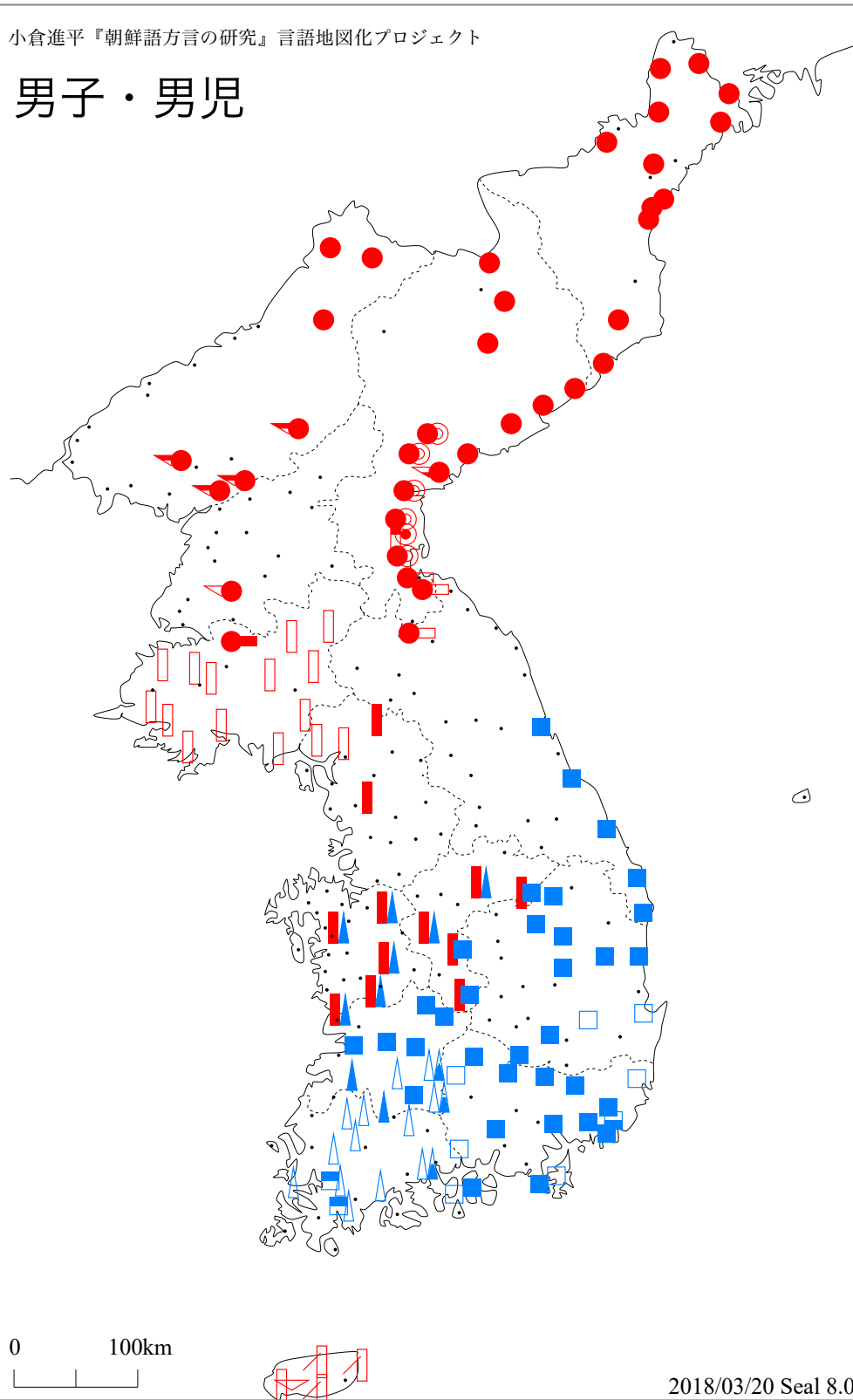
なお, 現在韓国語の標準語で「男」を意味する言葉は漢字語の nam-dʒa(남자(男子))であり, sa-na-i は標準国立国語辞典に「血氣盛りの時の男」(筆者訳)を意味する言葉とされている。nam-dʒa の古い語形남즈は 16 世紀の文献から見られるが(남즈의 씨는 희오 <1553 恩重經 2>), 스나히と남즈が如何に区別されていたかに関してはより詳しい検討が必要である。

## 参考文献

- 金英培(1997)『平安方言研究資料編』ソウル：太学社。  
金泰鈞編著(1986)『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局。  
金敏洙編(1997)『우리말語源辞典』ソウル：太学社。  
玄平孝(1962/1985)『濟州島方言研究』ソウル：太学社。  
福井玲(2017)「言語地図化した小倉進平方言方言資料から見えてくるもの」, 第 256 回朝鮮語研究会発表, 朝鮮語研究会。



# 男子・男兒



# 巫女

林 茶 英

## 1 はじめに

韓国語の標準語は mu-daŋ (무당) である。『朝鮮語方言の研究』(上: 73-74)にはこれにあたる語が 14 種記録されている。

14 種の語形はさらに(1) mu-daŋ 系, (2) tan-gol 系, (3) si-siŋ 系, (4)その他に分類することができる。そのうち(2)の tan-gol 系や(4)の ho-se-mi は固有語である可能性が高いと思われ、(1)の mu-daŋ 系や(3)の si-siŋ 系, そして(4)の pok-sul や sin-baŋ は漢字語と考えられる。

### (1) mu-daŋ 系

(1a) mu-daŋ / mu-dəŋ-i / mu-dəŋ / mu-dε / mu-dəŋ, (1b) mu-jo

### (2) tan-gol 系

tan-gol / tan-gol-le

### (3) si-siŋ 系

si-siŋ / si-siŋ-i / si-səŋ

### (4) その他

pok-sul / sin-baŋ / ho-se-mi

## 2 地理的分布

(1a)の mu-daŋ は最も広い範囲にかけて分布する。全羅南北道, 慶尚南北道, 忠清南北道, 江原道, 咸鏡南北道, 平安南北道及び, 京畿道の 3 箇所や黄海道の黄州にも見られる。mu-dəŋ-i は全羅南道の谷城にしか見られない。mu-dəŋ は咸鏡北道の 2 箇所に分布し, mu-dε は咸鏡南道の 1 箇所や咸鏡北道の 1 箇所に見られる。mu-dəŋ は京畿道の開城や黄海道の延安に分布する。(1b) mu-jo は咸鏡南道の甲山に見られる。

(2)の tan-gol は主に全羅南北道に分布するが, 平安南北道にも若干見られる。tan-gol-le は全南や全北にしか見られない。

(3)の si-siŋ は主に咸鏡北道に分布し, 咸鏡南道や平安南道にも 1 箇所ずつ見られる。si-siŋ-i は咸北の明川に見られ, si-səŋ は黄海道の黄州に分布する。

(4)の pok-sul は咸鏡南北道に分布し, sin-baŋ は済州島に分布する。ho-se-mi は咸南の豊山に見られる。

## 4 文献上の記録

以上の語形の中で文献において確認できる語形には mu-daŋ 及び si-siŋ がある。まず, mu-daŋ が現れる文献は次のとおり。

后 | 그 히에 오래 病호샤 무당과 醫員을 信티 아니호샤 <1475 内訓 2: 54a>

巫 무당 무 <1527 訓蒙字會 中 2b>

무당과 祝 긋것긋게 빌기 <1588 小学諺解 5: 60a>

師婆子 무당 <1690 諷語類解上 27b>

次に si-sin̄が見られる文献は次のとおり。

넛 님그미 스승 스로물 삼가시고 (前聖愼焚巫) <1481 杜詩諺解 10: 25b>

도로 와 큰 스승을 뇌리아 (還來謁大巫) <1481 杜詩諺解 19: 7b>

以上の他に、次のような例に見られる심방は濟州島に見られる sin-ban̄ と関係があるのかもしれない。

어미平生애 심방 긋쑤 즐길씩 天宮에 몬 어더보니 <1459 月印積譜 23: 68b>

祝는 男人 심방이라 <1461 楞嚴經諺解 8:117b>

## 5 考察

巫覡は韓国の土着のシャーマニズムに関連しているため、巫女を表す固有語があったはずであるが、上述した 14 種の語形の中では、(1)の mu-daŋ, (2)の tan を含む語形や(4)の ho-se-mi が固有語に当たる語形である可能性が高い。

金敏洙編(1997: 381)は、mu-daŋ について「語源未詳」としながらも、「参考」として『韓国文化象徴辞典 1』(1992)における mu-daŋ についての「満州語の mu-dan (音, 声, 響)の語根である mud と韓国語の mud-da (問の意味)の語根である mud が一致し、巫女は神と人の間で言葉の仲立ちの役割を務めている」という説明(徐廷範氏による)を引用している。

なお、mu-daŋ の mu は漢語「巫」との関連が考えられるかもしれないが、実際に文献に見られる語形を見ると「巫堂」という漢字語は見当たらず、巫, 師婆子, 祝神人などの漢字語しか見られない。したがって mu-daŋ あるいはこれに似ている固有語が存在し「巫堂」は後に漢字を借りて表記したと推測できる。(1b)の mu-jo の場合、漢字語である可能性が高い。mu-jo を除いた mu-daŋ 系の語形の音変化は次のとおり。

mu-daŋ > mu-deŋ > mu-deŋ-i  
> mu-de  
> mu-dəŋ

次に、ho-se-mi を見ると、咸鏡道では女性の巫覡を ho-se-mi あるいは ho-si-mi と呼び、男

性の巫覡を ho-se-a-bi, または ho-si-a-bi と呼ぶ。それらの語形にはそれぞれ母や父を表す ə-mi や a-bi が含まれている。

最後に tan-gol の語源が「檀君」にかかわっているという説もあるが、檀君の意味が祭祀をつかさどる人という事実を考えれば、まったく関係がないとは言えないだろう。ただ、現時点では根拠が不足しているため、断言できない。

(4)の語形のうち pok-sul は漢字語の「卜術」であり、sin-baŋ は「神房」かもしれないが、上で見たように中世語に심방という語が存在するので、それが変化した形かもしれない。ただし、『韓国民族文化大百科』では逆に sin-baŋ の n が子音の同化を起こして sim-baŋ になったのではないかとしている。

#### 参考文献

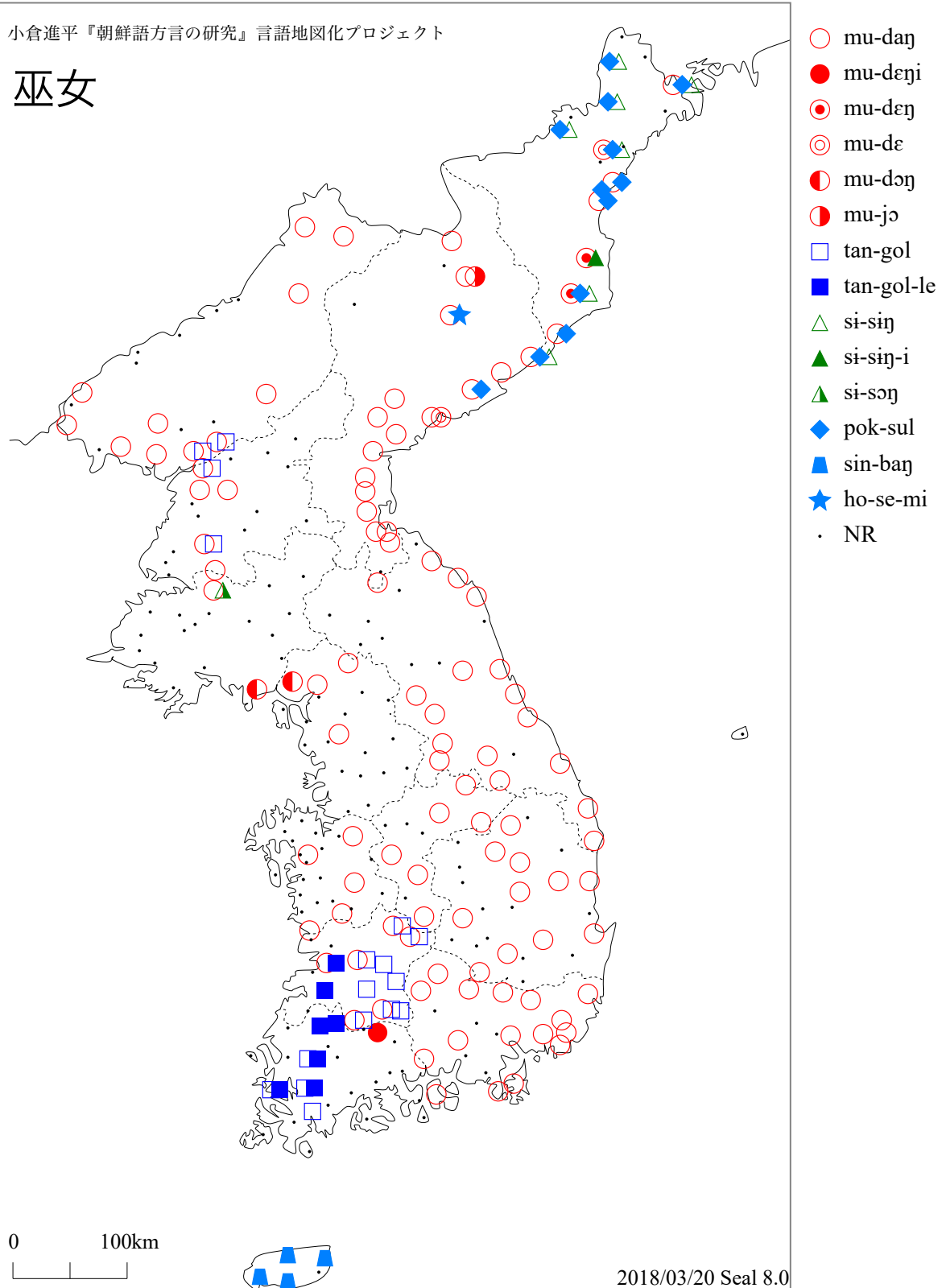
金敏洙編 (1997) 『우리말語源辞典』 ソウル：太学社.

『韓国文化象徴辞典 1』 (1992) ソウル：斗山東亜.

『韓国民俗信仰事典』 (<http://folkency.nfm.go.kr/minsok/index.jsp>)

『韓国民族文化大百科』 (<http://encykorea.aks.ac.kr/>)

# 巫女



# 舌

李美姫

## 1 はじめに

韓国の標準語は hjo(혀) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「身体」に「舌」という項目名で 25 種記録されている (上: 92-93)。

これらの語形は語頭子音の種類により、大きく(1) hjo 系と(2) so 系に分類できる。

### (1) hjo 系

(1a) hjo

(1b) he / hε / he-<sup>2</sup>te-gi / he-<sup>2</sup>pa-dak

### (2) so 系

(2a) so / so-<sup>2</sup>kal / so-<sup>2</sup>kit / so-<sup>2</sup>pa-dak

(2b) se / <sup>2</sup>se / se-<sup>2</sup>ka-dak / se-<sup>2</sup>kit / se-<sup>2</sup>tε / se-<sup>2</sup>tε-gi / se-<sup>2</sup>tii / se-<sup>2</sup>pa-dak / <sup>2</sup>se-<sup>2</sup>pa-dak / se / <sup>2</sup>se

(2c) so / swe / si / <sup>2</sup>si / <sup>2</sup>si-<sup>2</sup>pa-dak

(1) の hjo 系は、中世語から用例が見られる(1a) hjo と、この hjo から母音が変化したとみられるものとそれにさらに<sup>2</sup>te-gi や<sup>2</sup>pa-dak が付いた(1b)に分けられる。

(2) の so 系は母音の種類により、母音が o である(2a)と e または ε である(2b)、その他の母音で現れる(2c)に分けられる。またそれぞれに<sup>2</sup>te-gi などの接辞や先や端の意味を表す<sup>2</sup>kit、平らな表面や底の意味を表す<sup>2</sup>pa-dak などの名詞が付いたものも含まれる。

## 2 その他の語形

小倉進平の資料では、咸鏡北道は口蓋音化が起きた語形である so 系しか現れないが、『咸北方言辞典』(1986)によると 혀, 혀 も見られる。そして「혀」の俗語として 세때:, 세때:, 세때:, 세때: などの語形も見られるが、第二音節が長母音で現れるのは小倉の資料と異なる点である。『韓国言語地図』では慶尚南道の昌寧と密陽で 혀 が見られる。

## 3 地理的分布

現在の標準語形である(1a) の hjo はあまり見られず、朝鮮半島の中央部に散発的に数か所見られるのみである。(1a) hjo の母音の変形である(1b)は平安道の多くの地点と慶尚北道の数地点で現れる。

(2)の so 系は、平安道を除いた全ての地域に広く分布している。李基文(1991)で指摘されているように西北方言(平安道方言)の非口蓋音化はよく知られている現象である。

(2)の so 系の中でも(2a)の母音が o であるものは黄海道や全羅道など、朝鮮半島の西部に

集中して現れる。それ以外の地域(咸鏡道, 江原道, 慶尚道)では(2b)の母音が e または ε のものが広く現れる。その中でも se は咸鏡道, 江原道, 忠清北道に多く現れ, se が濃音化した<sup>2</sup>se は全羅南道や慶尚南道に集中的に現れる<sup>1</sup>。そして se に接辞 -<sup>2</sup>tii が付いた se-<sup>2</sup>tii は咸鏡北道の多くの地点で, se-<sup>2</sup>tε-gi は咸鏡南道と江原道の境界線の周囲に, se-<sup>2</sup>pa-dak と<sup>2</sup>se-<sup>2</sup>pa-dak は全羅北道と忠清北道とそれに隣接した地域, そして京畿道と黄海道の 1 地点で現れる。

sə は小倉の資料では慶北の知禮の一地点しか現れないが、『韓国言語地図』(2008)では京畿道と忠清北道の多くの地点で見られ, その使用地域が小倉の資料より広いことが分かる。

#### 4 文献上の記録

文献上で現れる最も古い語形は『訓民正音』合字解の<sup>2</sup>seである。<sup>2</sup>seが口蓋音化した sə 系のもものは調べた限り中世語の段階では現れない。

ㄷ ㄷ 혀쓰리니 <1446 訓民正音解例>

舌은 혀라 <1447 積譜詳節 19: 9>

#### 5 考察

上記で見たように, 舌の意味で現れる文献上の最も古い語形は<sup>2</sup>seである。『韓国言語地図』(2008)では文献上の<sup>2</sup>seの音価を hjə であるとし, 小倉の資料で見られる sə は hjə が口蓋音化により sjə になり, さらに口蓋音 s の後で j が脱落し, sə (> sə) になったものとしている。以下は『韓国言語地図』(2008)の説明をまとめたものである。

hjə > (口蓋音化) sjə > (口蓋音 s の後で j 脱落) sə > sə  
> (‘여’の縮約) hje > (口蓋音化) sje > (口蓋音 s の後で j 脱落) se

しかしそうすると文献上や方言形で sjə が現れないのは不思議である。そして hjə から hje への変化は‘여’の縮約であるとするより, j の影響で前舌化したと見た方が妥当であろう。

文献上の<sup>2</sup>seの実際の音価は明らかではないが, 現代韓国語の<sup>2</sup>seは結合する母音により様々な音価で現れ<sup>2</sup>, i や半母音 j の前では口蓋音化し, 無声硬口蓋摩擦音 [ç] になる。15 世紀の<sup>2</sup>seの音価も現代と同じであったと仮定すると<sup>2</sup>seの音価は çjə になる。そうすると小倉の資料で現れる(2)の sə 系は çjə が前舌化したものと考えられる。

(1a)の hjə と(1b)の he や hε の関係と(2a) sə と(2b)se の関係は, 小倉進平の他の資料でも現れる ㅅ > ㅈ の変化であると言えよう。例えば星(piɔl > pel), 別に(piɔl-lo > pel-lo) 硯(piɔl-lu >

<sup>1</sup> 慶尚道方言には hjə の方言形である<sup>2</sup>seが使われる ‘썰가 빠지게’, ‘썰빠질놈’ などの慣用的な表現がある。

<sup>2</sup> u の前では無声軟口蓋摩擦音 [x] になり, u や w の前では無声両唇摩擦音 [ɸ] になったりする。

pel-lu)などの項目がある。以上のことを考えると次のような変化が考えられる。

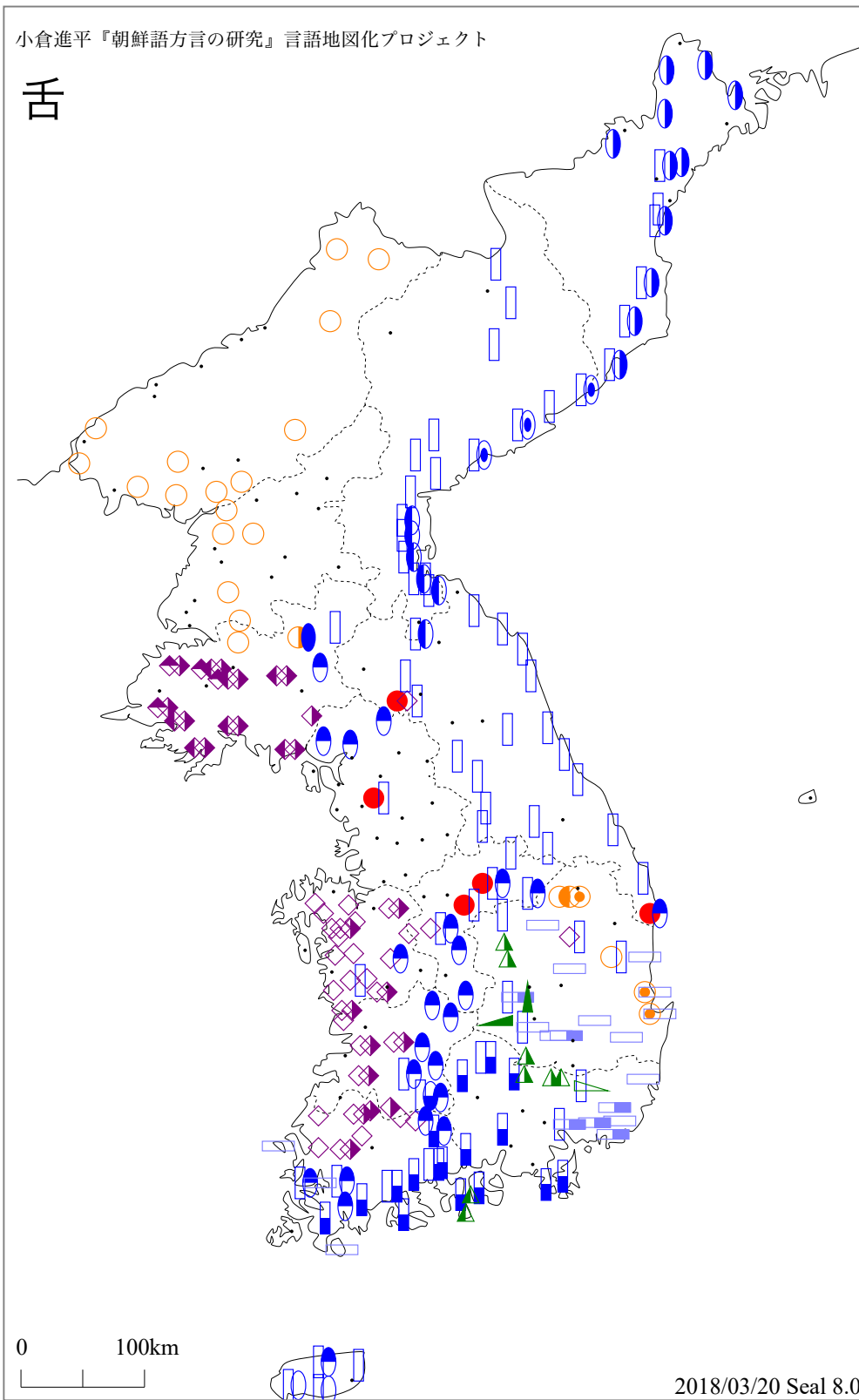
ɕjə > ɕjə/hjə > he~he > he-<sup>2</sup>te-gi / he-<sup>2</sup>pa-dak  
( > ʃə ) > sɔ  
> se~sɛ > se-<sup>2</sup>ka-dak / se-<sup>2</sup>kit / se-<sup>2</sup>tɛ / se-<sup>2</sup>tɛ-gi / se-<sup>2</sup>tii / se-<sup>2</sup>pa-dak  
> <sup>2</sup>se~<sup>2</sup>sɛ > <sup>2</sup>se-<sup>2</sup>pa-dak  
> sɔ  
> swe  
> si > <sup>2</sup>si > <sup>2</sup>si-<sup>2</sup>pa-dak

#### 参考文献

- 金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.  
李基文 (1991) 『国語音韻史研究』ソウル：塔出版社.



舌



- hjo
- he
- ◉ he
- ◐ he-ʔte-gi
- ◑ he-ʔpa-dak
- ◇ so
- ◊ so-ʔkal
- ◈ so-ʔkit
- ◉ so-ʔpa-dak
- ▭ se
- ▮ ʔse
- ◌ se-ʔka-dak
- ◌ se-ʔkit
- ◌ se-ʔte
- ◌ se-ʔte-gi
- ◌ se-ʔtii
- ◌ se-ʔpa-dak
- ◌ ʔse-ʔpa-dak
- ▭ se
- ▮ ʔse
- ▴ so
- ▴ swe
- ▴ si
- ▴ ʔsi
- ▴ ʔsi-ʔpa-dak
- NR

# 簪

全 恵 子

## 1 はじめに

韓国の標準語は pi-njo (비녀) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「服飾」に「簪」という項目名で6種記録されている (上: 152-153)。

語形の種類は多くないが、これらは (1) pi-njo 系, (2) pin-ne 系に分類でき、さらに(1) pi-njo 系は, (1a) pi-no, pi-ne と(1b) pi-na, pi-ne に下位分類することができる。

### (1) pi-njo 系

(1a) pi-njo / pi-no / pi-ne

(1b) pi-na / pi-ne

### (2) pin-ne 系

(1)の pi-njo 系は(1a)のように第2音節の母音が狭い母音 ɔ/e に交替したものと, (1b)のように第2音節の母音が広い母音 a/ε に交替したものに分けることができる。その中でも(1b)の pi-na という語形は目を引く。

(2)の pin-ne 系は, 広い母音 ε に交替した変種に, 第1音節の終声に /n/ が挿入されたものである。

## 2 その他の語形

小倉進平の『朝鮮語方言の研究』では平安南道のデータが無く, 『韓国言語地図』にもこの項目は含まれていなかった。そのため, その他の語形を確認することはできていない。

## 3 地理的分布

標準語である pi-njo の語形は忠清北道の清州と槐山の2地点のみで見られる。(1a) pi-no は忠清南道の1地点でしか見られず, (1a) pi-ne は全羅南道, 慶尚北道の一部と, 北に離れた平安北道の一部に分かれて分布している。

(1b) pi-na は忠清道と京畿道, 黄海道一帯に見られる。(1b) pi-ne は最も多く分布しており, 済州の1地点と全羅道全域, 慶尚道全域, 忠清北道の一部, 江原道, 黄海道の1地点, 咸鏡道全域, 平安北道まで, pi-na が見られる地域を取り囲むように広く分布している。

(2) pin-ne 系は済州島の2地点のみで見られる。

## 4 文献上の記録

pi-njo (비녀)の古い形は빈혀で, この語形が現れる最も古い文献は『救急方諺解』(1466)である。その後も, 『内訓』(1475), 『杜詩諺解』(1481), 『訓蒙字会』(1527), 『光州千

字文』(1575), 『新增類合』(1576), 『小学諺解』(1588), 『家禮諺解』(1632), 『女訓諺解』(1658), 『女四書』(1737), 『方言類積』(1778)など多くの資料に現れる。また, 開化期までこの語形は現れ, 『毎日新聞』(1898), 『大韓毎日申報』(1904)などの新聞でも古い形で表記されている。いくつかの例を挙げる。

시혹 쇠 빈혀를 스라 굽기 니기 지지라 <1466 救急方上 67b>  
내 머리 우힛 빈혀를 바사 브료리라 <1481 杜詩諺解 15:4b>  
簪 빈혀 즘 <1527 訓蒙字會 12a> <1576 新增類合 31a>  
箴 빈혀 즘 <1575 光州千字文 16a>  
笄는 이제 빈혀니 婦人의 首飾이라 <1632 家禮諺解 3:20a>  
크게 울고 빈혀를 마라 목을 달려 죽으니 <1737 女四書 4:25b>  
안히의 빈혀를 잡히며 <1904 大韓毎日申報>

また, 『韓国漢字語辭典(卷4)』の「鬢」の項目に「鬢舌 빈혀」の記載があり, 『古今釋林』からその用例を引いている。『古今釋林』の第28卷東韓釋語には「鬢舌」の項目で次のように説明されている。

鬢舌 本朝 東俗謂簪釵之 屬曰빈혀即鬢舌也

現在の標準語である비녀の語形が現れる最も古い文献は『戒女書』(16--)で, その後19世紀末から20世紀初頭の『女士須知』(1889), 『獨立新聞』(1896), 『大韓毎日申報』(1904), 『部別千字文』(1913)などに見られる。用例は次の通り。

아비 가라칠 일 아니로디 네 나히 비녀 씻기의 이르러 <16-- 戒女書>  
은 비녀들을 썩여 보내면서 이걸 팔아 곡식을 사서 <1896 獨立新聞>  
簪 비녀 잠 <1913 部別千字文>

また, 『17世紀國語辭典(上)』には빈하が見出し語として挙がっており, 文献では『七長寺版類合』(1664), 『靈藏寺版類合』(1700)にこの語形が見られる。

簪 빈하 즘 <1664 七長寺版類合 19a> <1700 類合靈藏寺 19a>

## 5 考察

標準語の(1) pi-njo 系のうち(1a)は, 古い形の빈혀の h が脱落し n が連音化して現代語の pi-njo となり, 半母音 j が脱落して狭い母音の pi-no , そして接尾辞が付いた pi-ne へ変化したと考えられる。(1b) pi-na は古い形の빈하の h が脱落し n が連音化して現代語の pi-na に変化したと考えられるが, (1b) pi-ne は pi-na に接尾辞が付いて pi-ne へ変化したものか, あ

るいは、狭い母音の/a/が広い母音の/a/に交替して接尾辞がついたものかは判断し難い。(2) pin-ne 系は(1b)の広い母音の pi-ne に/n/挿入現象が見られる変種であるが、これは済州道でのみ見られる。また、慶尚道で pi-ne と pi-ne が併用されているのを見ると、この地域で既に애と예の区別が無くなっていた可能性も考えられる。

文献上の記録を見ると、17世紀に빈하の語形が『七長寺版類合』に現れるが、七長寺は京畿道の安城にあり、小倉進平の調査データで pi-na という語形が京畿道に見られることから地理的分布が一致する。また、『靈藏寺版類合』にも빈하の語形が現れるものの、靈藏寺の所在ははっきりせず<sup>1</sup>、現代語の pi-na の分布との関係はわからない。

語源についてははっきりしないが、古い形の빈하が「鬢舌」として文献に見られることから、部分的に漢字語を含むと考えられる。『韓国漢字語辞典(巻4)』では「鬢」は音読みにし、「舌」は설とは読まずに、訓である「혀(舌)」と解釈されている。音読みと訓読みを合わせて対応させているのは「혀」という字音が存在しないからであろう<sup>2</sup>。

#### 参考文献

李基文解題(1977)『古今積林 三』ソウル：亜細亜文化社。

檀国大学校附設東洋学研究所(1996)『韓国漢字語辞典』ソウル：檀国大学校出版部。

韓国精神文化研究院編(1995)『17世紀国語辞典(上)』ソウル：太学社。

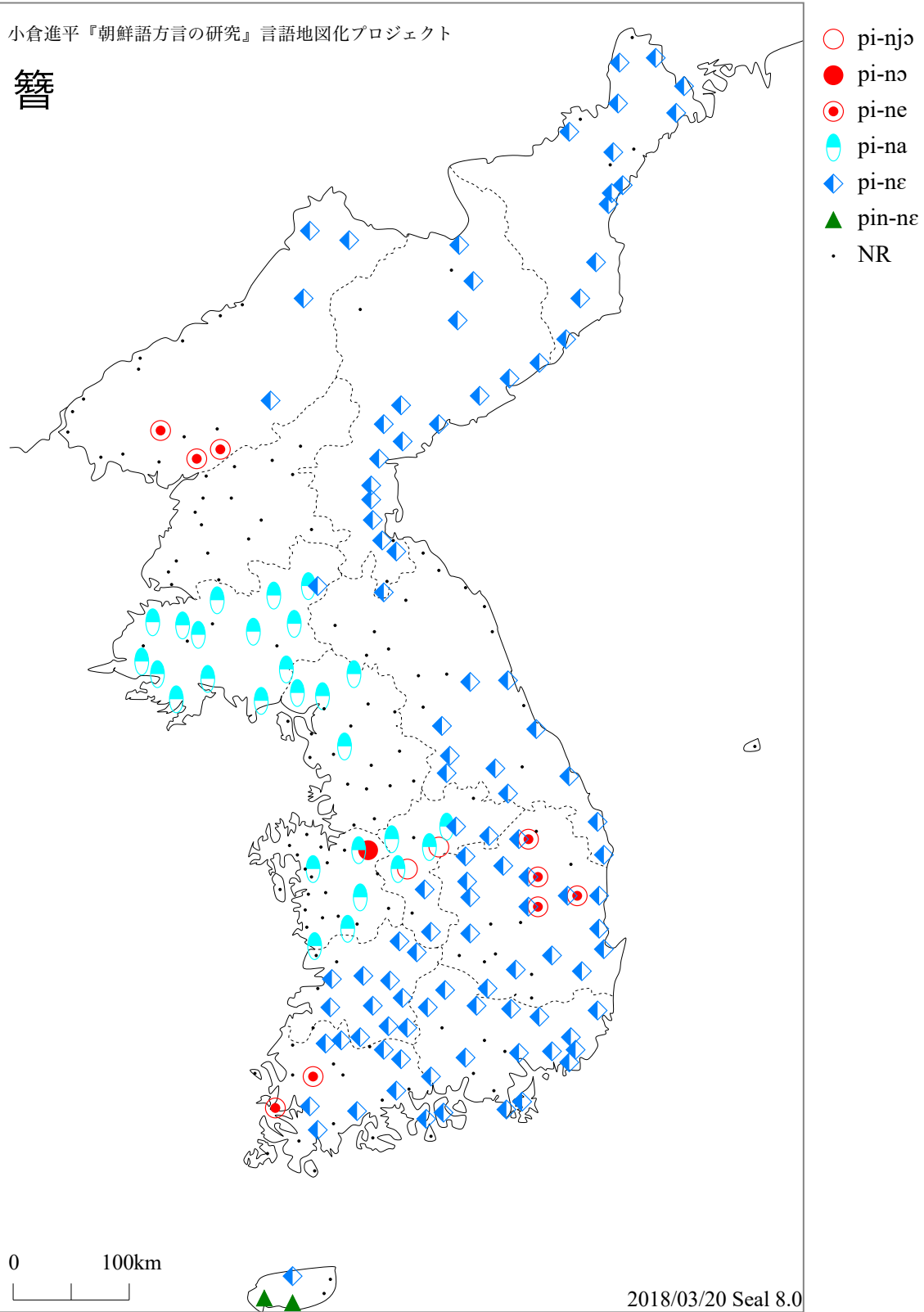
---

<sup>1</sup> NAVER (<https://search.naver.com>) で検索すると平安北道に同名の寺があるが、詳細は不明である。

<sup>2</sup> 「혀」には舌という意味の他に「서까래(垂木)」という意味もある。「서까래」とは木造建築物などに用いる構造材で、棟から軒に架けられる角材で、形状は細長い。

小倉進平『朝鮮語方言の研究』言語地図化プロジェクト

# 簪



# 下駄と靴

福井 玲

## 1 はじめに

この2つの項目は日本語からの借用語であるという点で他の多くの項目とは異なり、韓国語の語彙史の研究対象とされたことはほとんどないものと思われる。これらはいずれも20世紀初頭に日本語から借用されたと考えられる。「下駄」の方は現在では廃語となっているが、小倉進平のデータでは変種が比較的多く、新語が導入時にどのような変種が生じうるのかという点に関心が引かれる。一方、「靴」の方は ku-du (구두) という語形で現在でも使われ、標準語にもなっている点が異なる。韓国語における ku-du の意味は『標準国語大辞典』によると、「主に皮で作った西洋式の履物。≒洋鞋・洋靴。(＜(日) kutsu [靴])」(筆者翻訳)とあり、語源が日本語であることも明示している。

## 2 「下駄」について

上でも述べたようにこれは20世紀初頭の日本語からの借用語と考えられるが、新しく入った語にしては変種が多いのが特徴である。『朝鮮語方言の研究』には合計12種の語形が記録されている(上: 137-138)。これらは第1音節の母音のバリエーション、第2音節の頭子音の種類(閉鎖音か破擦音か、あるいは濃音か)、また語末に子音-lが添加されているかどうかといった観点から分類することができる。

- (1) ke-da / ke-da / ki-da / kja-da, (2) ke-dʒa / ke-dʒa / kjo-dʒa,  
(3) ket-ta / kit-ta / ken-ʔta, (4) ke-dal / ke-da-ri

(1)は語中子音を平音で表した語形で、母音はさまざまである。(2)は語注子音が破擦音になっているもの、(3)はそれが濃音になっているものである。(4)は第2音節以下が -dal あるいは -da-ri となって、語末に -l あるいはそれにさらに -i が添加されている形である。

### 2.1 地理的分布

(1)の語形が全国的に最も広く分布する。現在の韓国語では日本語の語中の清音を写すときに、濁音と区別するために激音(または濃音)を用いるが、当時は平音を用いるのが普通のことだったと考えられる。この習慣は非標準語とされながら現在でも俗語として残っている借用語によく見られる現象である(例えば, 노가다 <「土方」, 시다 <「下」)。 (2)の語中子音が破擦音となる語形は慶尚南道を中心として用いられるが、咸鏡南道、黄海道などそれ以外の地域にも若干見られる。(3)の濃音化する語形は全羅南北道に主に分布し、咸鏡南道にも1地点存在する。(4)の語末に -l を付加した形は咸鏡道特有の語形である。

## 2.2 文献上の記録

19世紀末から20世紀初頭の例はいまだ見出していないが、朴景利の小説『土地』(1969–1994)などのような植民地時代のことを描いた文学作品などでは使われている。

## 3 「靴」について

「靴」は言うまでもなく日本語では履物を表す語として古くから使われてきた。『万葉集』巻14の東歌「信濃路は今の墾道刈りばねに足踏ましむな(なむ)くつ(久都)はけわが背」(3399)のようによく知られた歌にも登場する。

韓国語に借用された「靴」を表す語形は『朝鮮語方言の研究』では、(1)ku-du と(2)ku-dzu の2つであるが、後者の地域で2地点(咸鏡南道文川と咸鏡北道羅南)についてku-tsu と発音されるという注記がなされているので(上:138)、本稿の地図ではこれも別語形として都合3種類の語形をあげておく。ただし、ku-tsu という発音は普通の韓国語の音韻体系に沿った発音とは考えられないので、日本語としての外来音発音だった可能性がある。

### 3.1 地理的分布

(1)の語形は黄海道以南で用いられる。(2)の語形は咸鏡道を中心に用いられるが、黄海道でも2地点で用いられている。この他、小倉進平のデータにはこの項目について平安道の記録がないが、金履浹編著(1981)によるとやはり(2)の구주という語形が用いられている。

### 3.2 文献上の記録

今のところ19世紀以前には見られず、20世紀初頭の新聞や新小説などに若干の例が見られる。これらは「下駄」よりも「靴」の方が早くから用いられていたことを示している。

보리집 모조 장스와 구두 장스와 양복 장스가 수날거시오 <1904 大韓毎日新報(5451)>  
소레복에 고모 쓰며 통량갓에 구두 신고 흔들흔들 가는 모양 한인 일인 겹힛고나  
<1904 大韓毎日新報(7829)>

## 4 考察

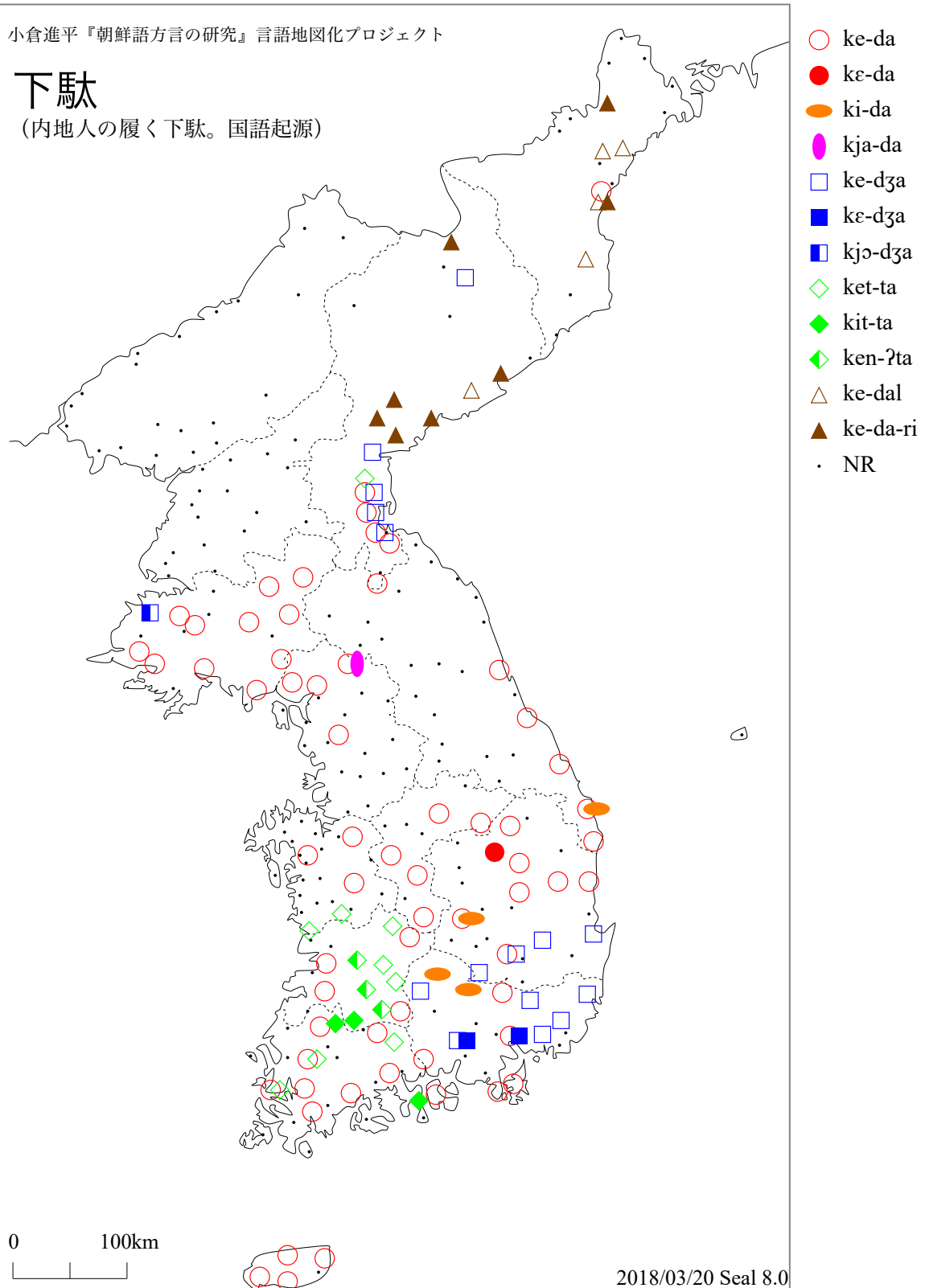
「下駄」については、新語にも関わらずこのような変種が存在する理由は不明であるが、(3)の濃音の発音は日本語の語中の清音をどう写すかに関する見解の相違を反映したものかもしれない。また「靴」について、そもそも今日の標準語でなぜku-duとなっているかが問題である。開化期に日本語の「つ」を実際の発音とかわりなく機械的にこう捉えたのかもしれない。また、もう1つのku-dzuの方は日本語の破擦音を反映したものかもしれない。

### 参考文献

金履浹編著(1981)『平北方言辞典』韓国精神文化研究院。

# 下駄

(内地人の履く下駄。国語起源)

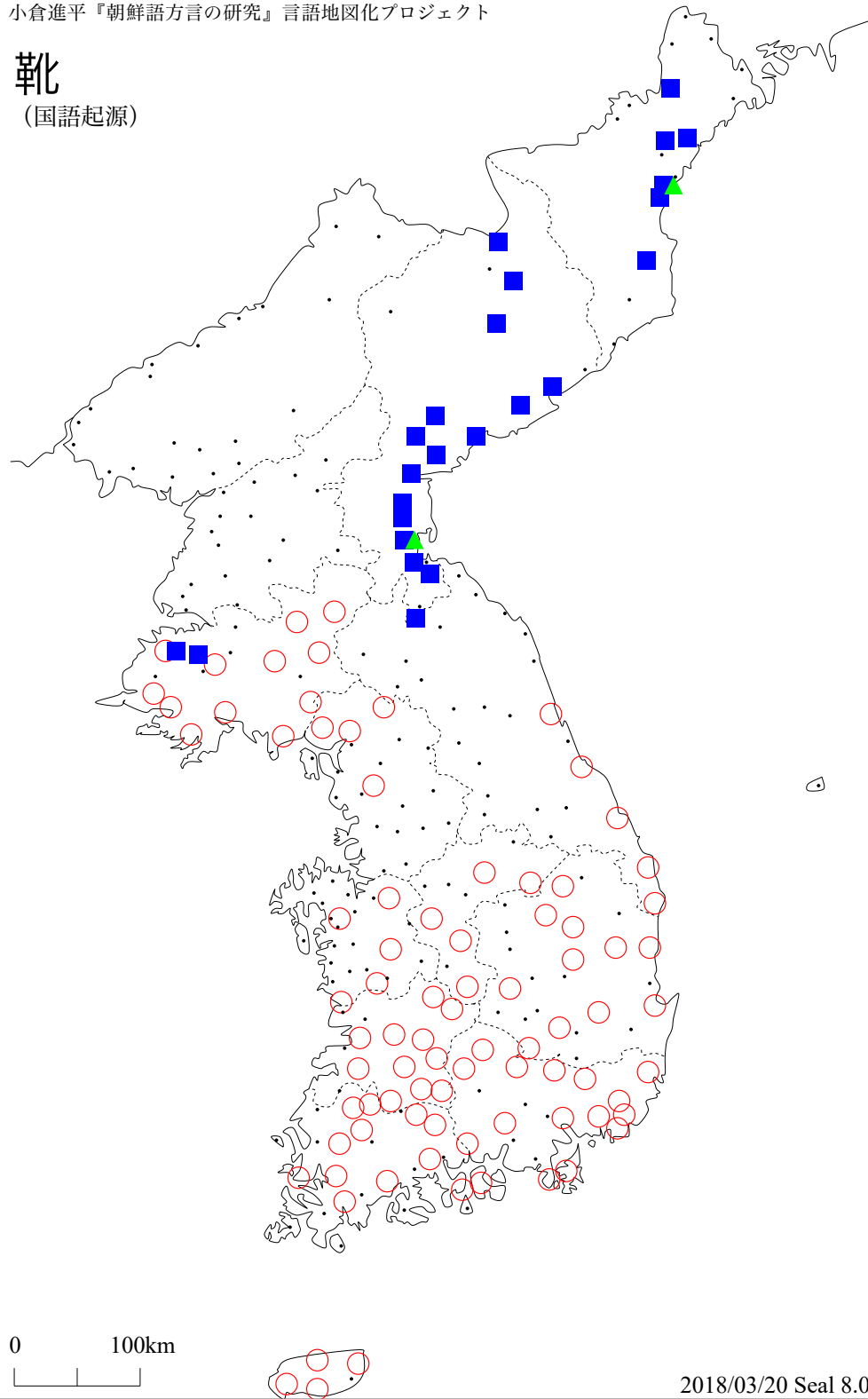




# 靴

(国語起源)

- ku-du
- ku-dzu
- ▲ ku-tsu
- NR



# 粉

李美姫

## 1 はじめに

韓国の標準語は ka-ru (가루) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「飲食」に「粉」という項目名で6種記録されている(上: 162)。この6種はすべて語頭に k を持ち、語中に流音(r または l)を持っており、同一の語形からの変種であると考えられる。

### (1) ka-ru 系

(1a) ka-ru / ka-ri / kʌ-ru

(1b) kal-lu / kal-li

(1c) kal-gi

(1a)は、現在の標準語である ka-ru とその母音の変種である。(1b)の kal-lu 系は語中に -ll- が現れるもの、(1c) の kal-gi 系は語中に -g- が現れるものである。

## 2 その他の語形

小倉進平の資料では、咸鏡北道で kal-gi しか現れないが、『咸北方言辞典』(1986)によると갈기는「粉が」(粉+主格)という意味でも使われるとしており、「粉を」(粉+対格)という意味では갈고, 「粉に」(粉+所格)という意味では갈게, 갈위에が使われるとしている。これらの語形から格助詞の部分を除くと粉の語形としては갈が想定できる。

濟州島の語形として kʌ-ru 以外に、『濟州島方言研究資料篇』(1985)によると마를, 마르, 마로などの語形が見られる。これらはすべて第一母音が中期語の ‘·’[ʌ] (いわゆるアレア) に対応する母音である。

## 3 地理的分布

現在の標準語形である ka-ru は京畿道, 黄海道, 平安道, 忠清道, 全羅北道や慶尚北道の一部にかけ, 全国的に広く現れる。それと対照的に, ka-ri は南部地域である全羅道と慶尚道で集中して現れる。第一母音がアレアである kʌ-ru は濟州島にだけ現れる。

語中に -ll- が現れる kal-lu と kal-li は散発的に現れ, kal-lu は黄海道の新溪の一か所, kal-li は慶南の陝川と慶北の高靈の二か所にだけ現れる。しかし『韓国言語地図』(2008)によるとその使用地域が小倉の資料より広く, kal-lu は京畿道と江原道の境目に数地点<sup>1</sup>, kal-li は慶尚北道と南道の境目に数地点<sup>2</sup>現れる。

<sup>1</sup> 京畿道の漣川, 抱川, 加平, 南楊州, 江原道の鐵原, 横城, 原城である。

<sup>2</sup> 慶尚北道の金陵, 星州, 達城, 慶尚南道の陝川, 昌寧, 咸安である。

kal-gi は地図上では咸鏡道の多くの地点と江原道の2地点にしか現れないが、小倉の資料の ka-ru の項目のところで括弧内に「以上平北各地では主格を表す場合には [kal-gi] といふ」と記されていることから、平安北道では ka-ru と kal-gi が併用されていたことが分かる。そして『韓国言語地図』(2008)によると갈기または畚は江原道と慶尙北道にかけ、小倉の資料より多くの地点で見られる<sup>3</sup>。

#### 4 文献上の記録

粉に当たる中期語の語形は単独形と共同格では마루(가루), その他の格助詞が付いた場合は 굴오로(가루로), 굴을(가루를), 굴이(가루에)などで現れ, 마루/굴오の語形が想定できる。

命을 마루근히 ㅎ야도 得道을 期限이 잇디 아니ㅎ리니 <1463 法華經諺解 1:223a>

沒藥入 마루와 차 저고매 조처 <1466 救急方諺解 71b>

梅檀香入 굴오로 브르고 <1447 積譜詳節 6:38a>

細辛과 桂皮 | 굴을 等分ㅎ야 입 안해 녀흐라 <1466 救急方諺解 18a>

梅檀末은 梅檀香入 굴이라 <1459 月印積譜 10:54b>

その他にも굴를(가루를), 굴릭(가루에), 굴리(가루가)なども現れる。この語形は主に16世紀以降の文献で多く見られる。

이베 피 나거든 부도조젯 굴를 더 녀흐라 <1541 牛馬羊猪染疫病治療方 10a>

사당 굴릭 셋거 잉도 마곰 비비여 <1608 胎産集要 45b>

두 산이 어우러 마라 굴리 드외느니라 <1459 月印積譜 1:29a>

#### 5 考察

中期語で現れる굴오로, 굴을, 굴이などの語形のㅇは有声軟口蓋摩擦音 [ɣ] であったと考えられるため、それより古い時代では \*kalk であったと想定できる。そして主に咸鏡道で現れた kal-gi の g は \*kalk の k の名残であると考えられる。小倉の資料で現れるㅇ [ɣ] の名残として方言形で k または g が現れる例としては, 柄(tfal-gi), 砂(mol-ge / mol-ge-mi など)の項目がある<sup>4</sup>。

中期語よりさらに古い時代の語形を \*kalk と仮定すると、そこから現代の諸方言へは次のような変化が想定できる。

<sup>3</sup> 江原道の高城, 襄陽, 溟州, 三陟, 平昌, 旌善, 寧越と慶尙北道の奉化, 安東, 麗川, 尙州, 善山である。

<sup>4</sup> しかしこれらの語形の使用地域の共通性は見当たらなかった。柄の tfal-gi は主に咸鏡道, 平安北道, 砂の mol-ge / mol-ge-miなどは咸鏡道, 平安北道, 黃海道, 慶尙北道などと比較的広い地域で現れる。

\*kʌlk > kʌl-gi > kal-gi  
 > kʌly  
 > kʌ-rʌ > kʌ-ri > ka-ri > ka-ru  
 > ka-ri  
 > kʌ-ru

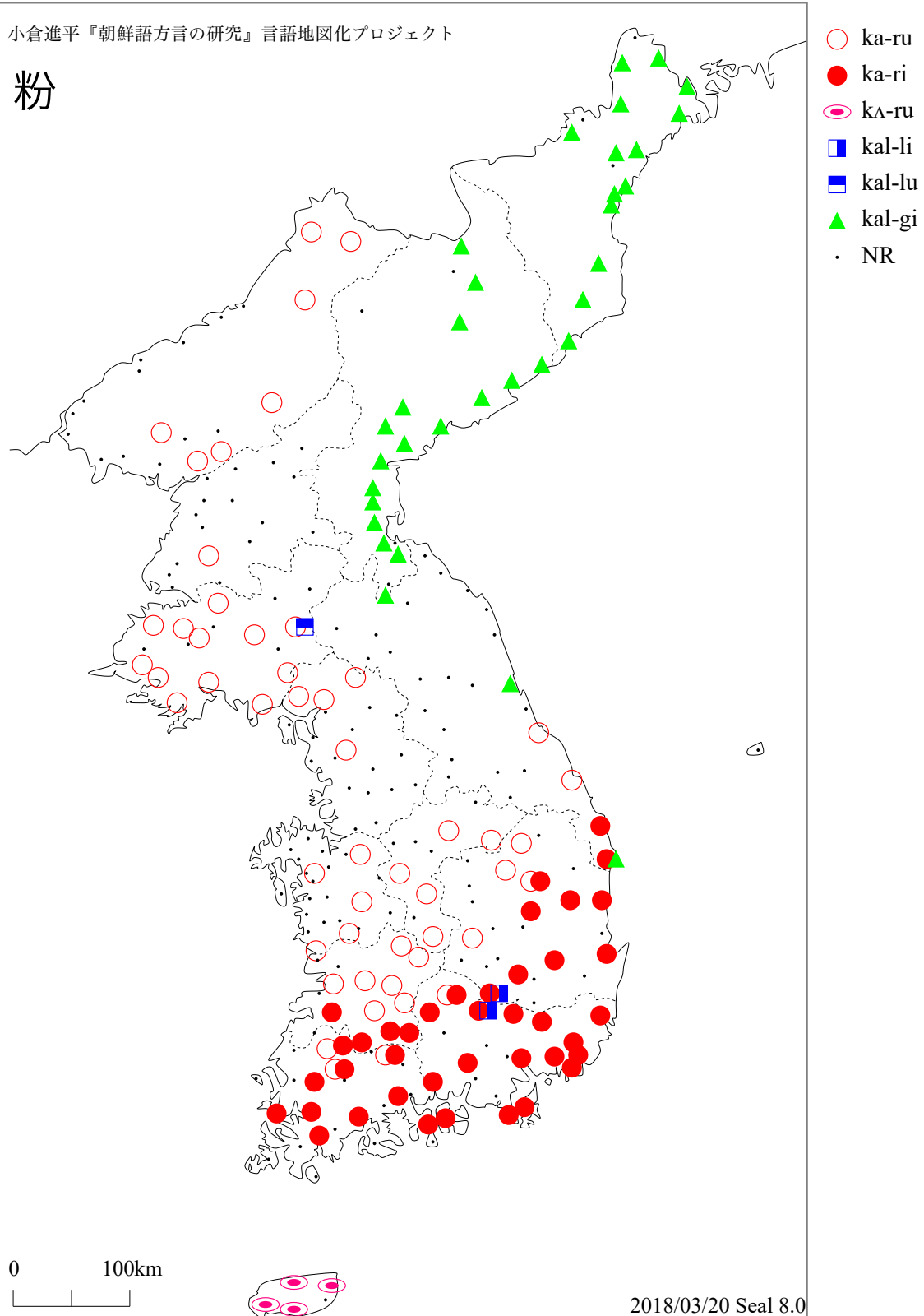
咸鏡道で現れる kal-gi は\*kʌlk に接辞-i が付いて kʌl-gi になり, ʌ > a により kʌl-gi > kal-gi の変化を経たと考えられる。中期語の kʌ-rʌ は\*kʌlk の末子音 k の弱化, 脱落によるもので, 濟州島で現れる kʌ-ru は中期語の kʌ-rʌ の第二母音のアレアが ʌ > i の変化により kʌ-ri になり, 円唇化により kʌ-ru になったと考えられる。ka-ru と ka-ri はそれぞれ kʌ-rʌ > kʌ-ri > ka-ri の変化から第二母音の円唇化により ka-ru となり, 前舌化により ka-ri になったと思われる。kal-lu および kal-li の語中の ɾ > ɾɾ の変化は用言や体言などにも散発的に見られる現象である<sup>5</sup>。語源については『우리말語源辞典』(1997)によると ʌ-[碎]+ɾ [接辞]であるとしているが明確なことは分からない。

#### 参考文献

- 金敏洙編 (1997) 『우리말語源辞典』ソウル：太学社.  
 金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.  
 玄平孝(1985) 『濟州島方言研究資料篇』ソウル：太学社.

<sup>5</sup>用言の例としては 흐르-(流)+ -어 > 흘러, 모르(不知)- + -아 > 몰라 などがある。

# 粉



# 李(すもも)の実\*

朱 林 彬・福 井 玲

## 1 はじめに

韓国の標準語は tʃa-du(자두)であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「花果」に「李(すもも)の実」という項目名で27種記録されている(上: 192-193)。これらは次のように7つのグループに分類することができる。

- (1) o-jat 系 o-ja / o-jat / o-jak / o-ja-dzi
- (2) wε-dzi 系 wε-dzi / wε-dzu / wε-tʃi / u-ε-tʃu / wεt / we-jat
- (3) ε-tʃi 系 ε-tʃi / ε-ε-tʃo / ε-a-tʃi
- (4) oŋ-a 系 oŋ-a / oŋ-ε
- (5) ko-ja 系 ko-ja / ko-jak / kwe / ʔkwe / pʰuŋ-ge
- (6) tʃa-do 系 tʃa-do / tʃa-du
- (7) no:l 系 no:l / no:-ri / nœŋ-i / noŋ-gu

このうち、(2)の wε-dzi 系と(3) ε-tʃi 系は(1)の o-jat 系の第1母音と第2母音が縮約したもので、(4)の oŋ-a 系は o-jat 系の第1母音と第2母音の間に鼻音 ŋ が挿入されたもので、語源的には相互に関係のある語形と考えられる。(5)の ko-ja 系は語頭が k で始まる点を除いては(1)の o-jat 系と似ている。なお、その中で pʰuŋ-ge という語形は独特であるが、後半部の ge が ko-ja 系と関係があるものとしてこれに含めることにする。(6)の tʃa-do 系は漢字語「紫桃」に由来するものである。(7)の no:l 系は以上のいずれとも異なる語形である。

## 2 その他の語形

『標準国語大辞典』、『韓国方言資料集』などにはこれ以外にも多くの語形が見られるが、類型としてはおおむね上の7つのグループのいずれかにまとめられるものが多い。

この他に、小倉進平自身も『朝鮮語方言の研究』において、「李の実」とは別に「李の実(大きいもの)」という項目を立てているが、そこには tʃu-ri, si-tʰœŋ-i という、上の7つとはまったく異なる語形が見られる。

## 3 地理的分布

(1)の o-jat 系は慶尚北道、忠清道、江原道の沿海地域で主に用いられ、咸鏡南道の一部に

---

\* 本稿は朱林彬(2015)の本論の一部(3.5節)に基づき、本書の体裁に合わせて福井玲が加筆修正を行なったものである。

も見られる。

(2)の we-dʒi 系は咸鏡道, 平安道といった北部地域と, 黄海道, 京畿道のほか, 慶尚北道の南部, 全羅南道の海岸沿いに分布している。

(3)の ɛ-tʰi 系は慶尚南道の海岸沿いに見られる。

(4)の oŋ-a 系は忠清北道を中心に, それに隣接する慶尚北道, 全羅北道の一部でも用いられている。

(5)の ko-ja 系は慶尚南北道と江原道の南部に分布している。

(6)の tʃa-do 系は全羅北道の一部と京城に見られる。

(7)の no:l 系は咸鏡道と平安北道という北部地域にのみ見られる。

#### 4 文献上の記録

中世語から近代語にかけての資料には主に 오얏, 오야지, 외얏 という 3 種類の語形が見られる

아마커나 ㅼ 알꺾 북성화 오얏나모 ㄸ려 묻노라 <1482 南明集諺解 上 57b>

李葉 오얏닙 <1489 救急簡易方諺解 6: 29a>

李 오얏 니 <1576 新增類合 上 8b>

블근 오야지 브레 ㄸ마도 츠디 아니호고 (朱李沈不冷) <1481 杜詩諺解 10: 23a>

북상회 블그며 오야지 히며 薔꺾薇밍 감블고믈 <1482 金剛經三家解 1: 23b>

북성화 션 길과 외얏 션 길히 히 비록 오라나 <1481 杜詩諺解 15:15a>

李 외얏 니 <1583 石峰千字文 3b>

このうち 외얏 に関しては表記上の変種が見られる。

李 외안 니 <1575 光州千字文 3b>

외은 리 李 <1781 倭語類解 下 7a>

次に現在の標準語である 자두(자도)に関しては, 19 世紀末になって初めて 자도의 語形が見られる。

자도 紫桃 <1880 韓仏字典 530>

자도 紫桃 <1895 国漢会語 245>

これに関連して, ハングル表記された文献には見当たらないが「紫李」という語形が漢文

で書かれた史料にはいくつか見られる。

上記以外の語形は 20 世紀初頭頃までの文献上には見られないようである。

## 5 考察

この項目は(1)の o-jat 系の語形, 及びそれに語源的に関連すると思われる(2)~(4)のグループの語形を加えると, 方言分布においてほぼ全国的に広がっていると言っても過言ではない。また, 文献上の記録においても 19 世紀末まで o-jat 系の語形しか見られない。それに比べると標準語となっている(6)の tja-do 系の語形は全羅北道の一部と京城に見られるのみで非常に範囲が狭い。また文献上でも 19 世紀末になって初めて見られるようになる。なぜ o-jat 系の語形の勢力が強い中で「紫桃」という漢字語に由来する語形が新たに導入されたのかは明らかではない。

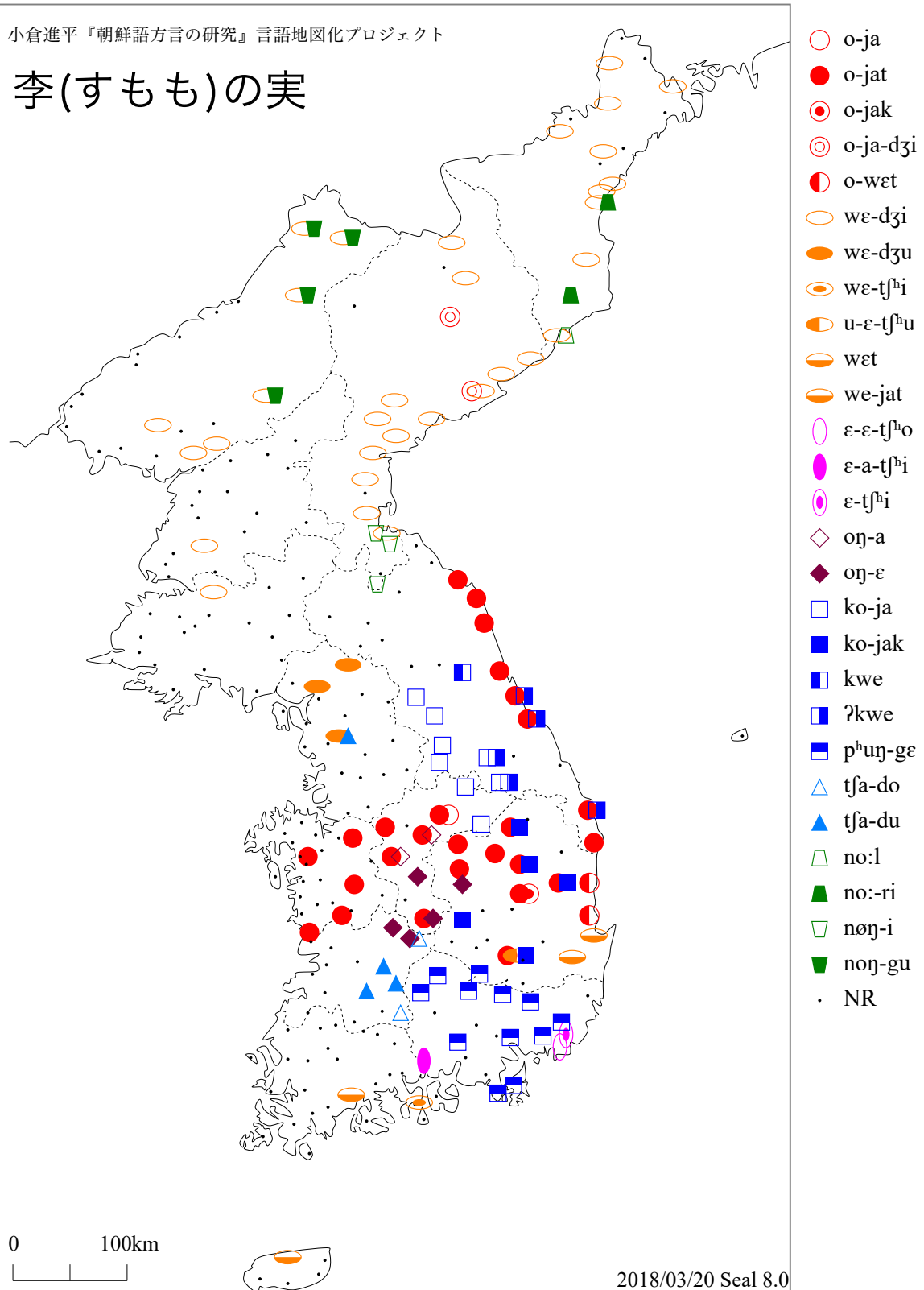
これら以外の語形の由来は今のところ不明のものが多いが, 朱林彬 (2015)によると小倉進平が「李の実(大きいもの)」という別項目で扱った語形のうち tʃu-ri については漢語の「醜李」あるいは「秋季」に由来する可能性がある。

## 参考文献

- 韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987-1995) 『韓国方言資料集』 全9巻. 城南: 韓国精神文化研究院.
- 国立国語研究院 (1999) 『標準国語大辞典』 ソウル: 斗山東亜.
- 崔鶴根 (1978) 『韓国方言辞典』 ソウル: 玄文社.
- 朱林彬 (2015) 『韓国語語彙史研究—小倉進平の方言調査に基づいて—』 2015 年度東京大学人文社会系研究科修士学位論文.



# 李(すもも)の実



# 大根

梁 紅 梅

## 1 はじめに

韓国の標準語は mu であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「菜蔬」に「大根」という項目名で 10 種記録されている(上: 202-203)。

これらは (1) mu-su 系, (2) mu: 系, (3) mut-ku 系, (4) n $\Lambda$ m- $\text{?}$ pi の 4 つのいずれかに分類できる。

### (1) mu-su 系

(1a) mu-su, (1b) mu-si

### (2) mu: 系

(2a) mu:, (2b) mu-i, (2c) mu-ju, (2d) mi-u

### (3) mut-ku 系

(3a) mut-ku, (3b) mut-ki, (3c) mit-ki

### (4) n $\Lambda$ m- $\text{?}$ pi 系

(1)の mu-su 系はさらに、第 2 音節の母音が u であるか i であるかによって(1a), (1b)に分けられる。

(2)の mu: 系は第 1 音節の母音が長母音か短母音かにより(2a)とその他に分けられ、また第 2 音節に母音 i か ju が付いているかにより、また第 1 母音と第 2 母音が入れ替わっているかにより(2b), (2c), (2d)に分けられる。また、『現代韓国方言資料集』に muu の語形も現れることから mu: と muu が共存していた可能性も考えられる。

(3)の mut-ku 系は第 2 音節の母音が u か i かによって(3a), (3b)に分けられ、また第 1 音節の母音が i である(3c)に分けられる。

(4)は以上の語形とはまったく違う語形であって、 $\Lambda$  が入る語形として済州道だけに見られる。

## 2 その他の語形

『韓国方言資料集』では、京畿道篇、江原道篇、忠清南北道、慶尚北道、全羅北道で mu: 以外に muu (무우)の語形も現れる。また江原道篇では、몽우という語形も現れる。

## 3 地理的分布

(1)の mu-su 系の語形は主に江原道の南部地方と忠清南北道、全羅南北道、慶尚南北道に分布している。咸鏡南道には定平の 1 か所だけ見られるが、これは恐らく南部地方から飛び

地的に流入した語かもしれない。(2)の mu:系は忠清南北道, 江原道, 京畿道, 黄海道, 咸鏡南道, 平安南北道に分布していて, 主に半島の中央に集中している。(3)の mut-ku 系は咸鏡南北道, 江原道, 慶尚北道, 忠清北道にあつて, 主に半島の西部地方に分布している。(4)△を伴う nɒm-ʔpi 系は済州道だけに分布する。

なお, 地点によってはこれらの語形が併用されており, 中には特に江原道と忠清北道, 慶尚北道の境にある一部地域では(4)のほかの 3 種類がすべて併用されている地点もある。この場合は新古語の地域間の相互の影響が考えられる。

#### 4 文献上の記録

大根を表す 4 種類の語形の中で最も古い語形は恐らく mu-su 系であるが, この語形は文献には現れてない。ハングル資料の中で一番古い語形は 15 世紀に現れるが, それは ㅁ수系であった。

불휘 ㅁ ㅁ수 곤히니라 <1459 月印釋譜 21: 168b>

ㅁ ㅁ수 불휘를 (蔓菁根) <1466 救急方諺解 上 58>

겨솥 ㅁ수는 밥과 ㅁ이니 (冬菁飯之半) <1481 杜詩諺解 16: 70>

16 世紀になってから ㅁ수から △が脱落した ㅁ우系が現れ始めた。

葡 ㅁ ㅁ우 <1576 新增類合 10b>

나죄 싸브는 ㅁ우와 박만 씹을 ㅁ르미니라 <1586 小学諺解 6: 126>

nɒm-ʔpi 系は文献上には現れない。

#### 5 考察

mu: に関して河野六郎(1979: 156–157)に考察があり, それを参考にするとこの項目に関する語形変化は次のとおりである。

mu: は大きく第 2 音節に s を含んでいるかいないかによって 2 種類に分けることができる。分布状況からもわかるように s を含む形は半島の南部に集中しているが, 朝鮮朝初期の文献にでる z より古い語形である可能性がある。musi は mus-i という主格形に由来するものかもしれない。

s を含んでない形は第 2 音節に k を含んでいるかいないかによって大きく分けることができる。mu:の古い語形を musu に設定した場合, s の弱化により朝鮮朝初期の文献で見られるように s>z の変化が起き, それから muzi> muzwi> muwi> mui あるいは muzu> muwu; muzu> muju> mju> miu のような変化が推定できる。

mutku 系に関しては咸鏡北道でよくおこる k 曲用を挙げることができる。咸鏡北道では

名詞曲用の際によく기, 글, 게が挿入されるが, そのために mus-ki という語形が生まれ, この時の i が主格形であろうと誤って解釈された結果, musk-i から mutki > mutku のような語形が生まれたのかもしれない。

nɒm-ʔpi 系は『韓国方言資料集』の済州道篇にも載っているが, 고훈식(2016)によれば, 「骨のような堅いナムル」という意味で, 나물+ㅼ > 남ㅼになったが, ㅼ > ㅼになったのは同じ発音の単語との意味混同を避けるためであるとされている。

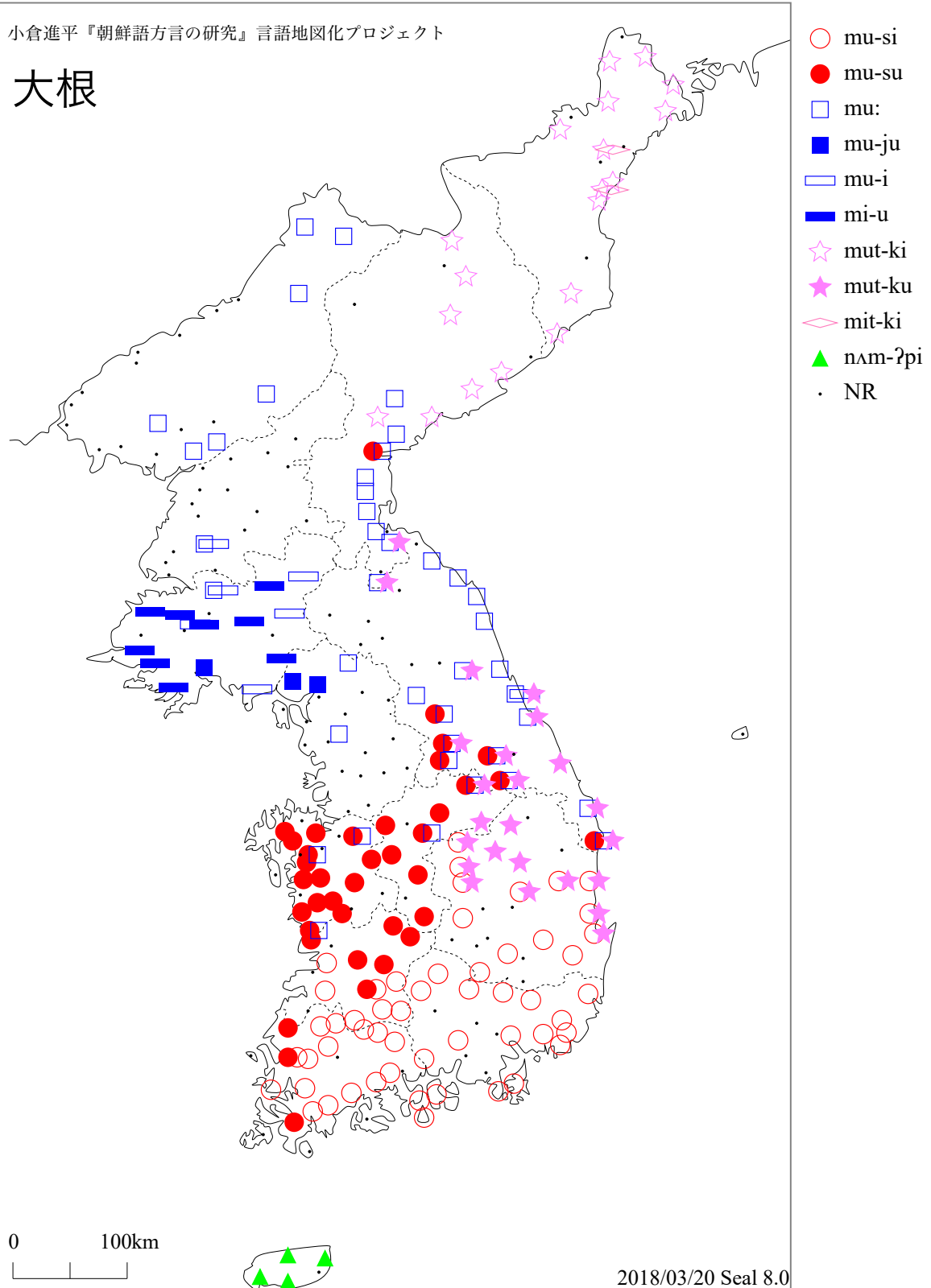
#### 参考文献

河野六郎 (1979) 『河野六郎著作集 1』東京:平凡社.

고훈식 (2016) 『제주도의 어원을 찾아서』제민일보.

韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987-1995) 『韓国方言資料集』全 9 卷. 城南:韓國精神文化研究院.

# 大根



# 蕎麥

岩井亮雄

## 1 はじめに

韓国の標準語は me-mil (메밀) である。これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「菜蔬」に「蕎麥」という項目名で9種の語形が記録される(上: 201-202)。第一音節母音の変種によって次の4種類に分類できる。

### (1) me-mil 系

(1a) me-mil, (1b) me-mul

### (2) mø-mil 系

(2a) mø-mil, (2b) mø-mul, (2c) mø:l

### (3) mɛ-mil 系

(3a) mɛ-mil, (3b) mɛ-mul, (3c) mɛ:l

### (4) mi-mul

以上の語形は、(i) 第一音節母音 (e/ø/ɛ/i), (ii) 第二音節母音 (i/u), (iii) 音節数 (二音節語か、二音節語から mi/mu が脱落して一音節語に縮約されたか) といった観点で分類することができる。

## 2 その他の語形

『韓国言語地図』(2008)にはこの項目はない。『韓国方言辞典』(重版1987)には(1)の変種として me-mi/me-mu:l/me-mu-ul/me:-mul (ハンダルのローマ字転写は小倉進平の方法(下: 13-14)による。以下同様), (3)の変種として mɛ-mil, (4)の変種として mi-mil/mi:-mul/mim-mul, 中世語に由来する mo-mil, その他 fʌŋ-mil/p<sup>h</sup>e-mil/ho-milが見られる。小倉進平のデータには中世語に由来する mo-milが見られないことと対照的である。

小倉進平のデータでは空欄になっている地点のうち、済州島については『済州島方言研究』(1962)に mo-mol/mo-mil/mo-mal という語形が見られる。平安道については『平安方言研究』(1997)に mɛ-mi-ri (平北のみ)/mø-mil (平南のみ)/mɛ-mil/mo-mil という語形が、また平安北道について『平北方言辞典』(1981)に me-mi-ri/mɛ-mil/mo-mil という語形が見られる。

## 3 地理的分布

現在の標準語形にあたる (1a) me-mil は京畿道と黄海道に見られる。(1b) me-mul は全羅道, 慶尚道, 忠清道, 江原道に見られる。

(2a) mø-mil は京畿道, 黄海道, 咸鏡南道に見られる。(2b) mø-mul は京畿道・江原道・咸鏡南道に一地点ずつ比較的近い地域に見られる。(2c) mø:l は咸鏡南道に見られる。これらの地域は単母音 ø が見られるのが特徴である。

(3) のうち, (3a) mɛ-mil / (3c) me:l は咸鏡道に見られる。半広母音 ɛ が見られるのが特徴である。(3b) me-mul は全羅道, 慶尚道, 江原道に見られるが, これらの地域では (1b) の語形が広く見られることからして, e と ɛ の区別がほとんどなくなっていた可能性がある。

(4) mi-mul は慶尚道に見られる。これは (1b) の第一音節での狭母音化 me > mi に起因するものだろう。

詳しくは考察で述べるが, 以上の如き地理的分布は, 第一音節母音の違いや第二音節母音の違いなどのそれぞれの観点から再整理すると, その分布の特徴が捉えやすくなる。

#### 4 文献上の記録

中世語は mo-mil であり, 比較的最近まで用いられている。主な用例は次のとおりである。

모밀 교 (蕎) <1527 訓蒙字会上 6b> <1781 倭語類解 下 4b> <1880 韓仏辞典 245>  
<1908 新訂千字文 17> <1913 部別千字文 22a>

모밀 (蕎麥) <1613 東医宝鑑 一 26a> <1690 訳語類解 下 9a> <1748 同文類解 下 2b> <1778 方言類解 戊部方言 26a> <1790 蒙語類解 下 2b> <1799 濟衆新編 8: 22a> <18-- 広才物譜 穀麻 1b> <18-- 物名考 卷三 (無常類 草) > <1868 医宗損益 35a> <1895 国漢会語 115>  
<1897 韓英辞典>

小倉進平のデータに見られるような語形は, 管見の限りは 19 世紀の文献から見られだす。具体的には, (1a) me-mil / (1b) me-mul / (3a) mɛ-mil を確認することができた。

매밀 十말 五원 <1906 京郷新聞 1>

매물 木麥 蕎麥 <1895 国漢会語 112>

매밀 麥 <1880 韓仏辞典 216>

#### 5 考察

この項目の中世語は mo-mil であるので, (i) mo-mil > mø-mil のような第一音節母音の前舌母音化 (ウムラウト) と, (ii) mo-mil > mo-mul のような第二音節母音での i/u 交替を経たと考えることができる。なお, i/u は朝鮮半島の南北で分布し分けているので, (ii) の変化の方が (i) よりも先に起きたものと推察される。これは, 語頭ではなく第二音節以下のような後部要素の方が音変化を受けやすいということとも合う。第一音節母音 e / ɛ は ø の変種であろう。両唇音の後では ø > e (ㅈ > ㅉ) のような変化を経たという, よく知られた事象と合致する。また mø:l / me:l については, 地理的分布をも考慮に入れると, mø-mil >

mø:l や mɛ-mil > me:l のような mi の脱落とそれに伴う長母音での補償といった変化を経たと思われる。以上をまとめると、次のような変化経路が想定できる。( > は上で述べたような音変化を経たということを表す。)

mo-mil > mo-mul > mɔ-mul > me-mul  
> mɛ-mul  
> mɔ-mil > mɔ:l  
> me-mil  
> mɛ-mil > me:l

発音の地域差は、第一音節母音(言語地図上の記号の色の違い)と第二音節母音(記号の塗りつぶしの有無)のどちらに着目するかによって分布の特徴が異なる。第一音節母音に関しては、(1) e が全羅道, 慶尚道, 忠清道, 京畿道, 江原道, 黄海道を中心に, (2) ø が京畿道, 黄海道, 咸鏡南道を中心に, (3) ɛ が全羅道, 慶尚道, 咸鏡道を中心に, (4) i が慶尚道に見られる。全羅道や慶尚道では e / ɛ が見られるので, 両者がすでに区別されていなかった可能性があるが, 咸鏡道では基本的に ɛ が現れるのが特徴である。次に第二音節母音に注目すると(a) i は京畿道, 黄海道, 咸鏡道を中心に, (b) u は全羅道, 慶尚道, 忠清道, 江原道を中心に分布する。ちょうど朝鮮半島の南北で i / u の対立が見られて興味深い。また, (c) のように mɔ-mil > mɔ:l や mɛ-mil > me:l のような音変化を経た地域は, 咸鏡南道である。

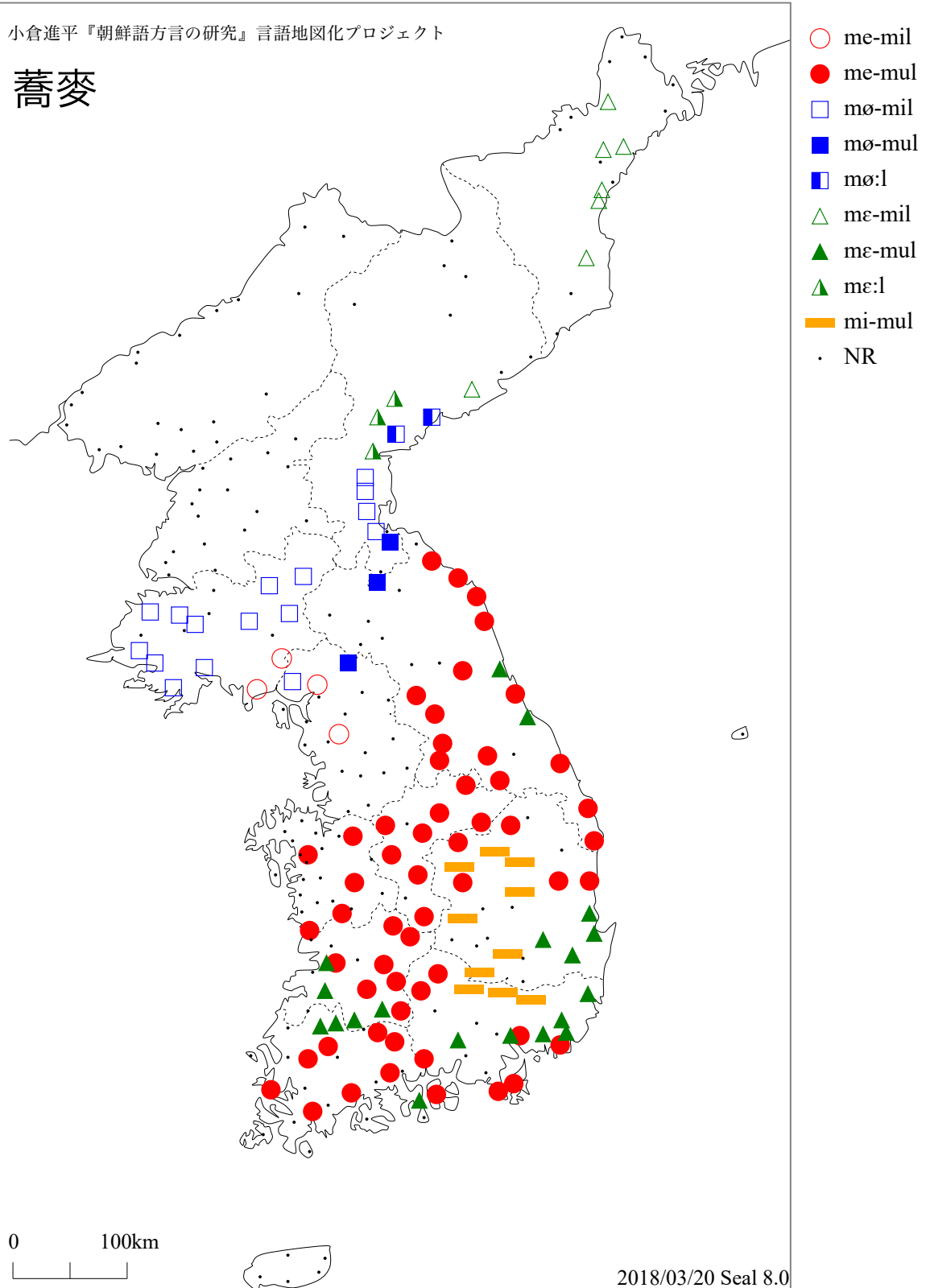
最後に語源に関して附言する。『우리말語源辞典』(1997) では, mo-mil (現代語 me-mil) は moi / mɔ (뫼, 山) + mil (小麦) に由来し, moi-mil / mɔ-mil (뫼밀) > mo-mil (moi の i の脱落) 及び moi-mil / mɔ-mil (뫼밀) > me-mil のような変化を想定している。中世語で山は moih (上声), 麦は milh (去声) である。しかし, 『우리말語源辞典』(1997) の解釈は mo-mil がより古い語形であるという文献上の記録に合致しない。本稿で示した変化経路に従うと考えると, 蕎麦の実は角張っているので, 第一音節は moh (角) に由来する可能性がある。ただし moh は去声, mo-mil の mo は平声であるが, 複合語では去声が平声に交替し得た。また, 先述のとおり mo-mil > mɔ-mil のような前舌母音化(ウムラウト)が生じて, 第一音節が山を意味する moi / mɔ と誤認された可能性がある。

#### 参考文献

- 金英培 (1997) 『平安方言研究』ソウル：太学社。  
金敏洙 (1997) 『우리말語源辞典』ソウル：太学社。  
金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』城南：韓国精神文化研究院。  
玄平孝 (1962) 『济州島方言研究』出版地不明：精研社。  
崔鶴根 (1978, 重版 1987) 『韓国方言辞典』ソウル：明文堂。



# 蕎麥



# 黄瓜(きょうり)

岩井亮雄

## 1 はじめに

韓国の標準語は oi (오이) である。これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「菜蔬」に「黄瓜」という項目名で 15 種の語形が記録される(上: 203–204)。これらの語形は o-i 系と、o-i 系の語頭に mul (水) が付いた mu-rø 系に分類できる。

### (1) o-i 系

(1a) o-i / u-i, (1b) ø / we / e, (1c) wε / ε, (1d) ui (=wi) / i

### (2) mu-rø 系

(2a) mu-rø / mu-rwe / mu-re, (2b) mu-rε, (2c) mu-rui (=mu-rwi) / mu-ri

(1) の o-i 系は, (1a) のような o-i とその第一音節母音の変種, (1b) のような半狭母音の変種, (1c) のような半広母音の変種, (1d) のような狭母音の変種に下位分類できる。

(2) の mu-rø 系は第二音節母音の違いによって下位分類できる。(2a) の第二音節母音は (1b) の母音に, (2b) は (1c) に, (2c) は (1d) に対応する。

なお, (1d) と (2c) の ui は wi と転写する方が適当であると思われる(下: 13–14)。

## 2 その他の語形

『韓国言語地図』(2008) には小倉進平のデータにある語形のほかに, mu-ro-i (물오이) という語形が忠清北道の一地点に見られる。これは (2) mu-rø 系の変種である。『韓国方言辞典』(重版 1987) には, (1) o-i 系の変種として je: / e: / o:-i / ø: / ø-i / wi: / we: / i: / i-i (ハンダルのローマ字転写は小倉進平の方法(下: 13–14)による。以下同様) が, (2) mu-rø 系の変種として mu-rε: / mu-rjo-i / mu:-ri / mu-ri: / mul-lwe / mul-lε / mu-ro-i などがあり, このほかに (2) の前部要素と後部要素が入れ替わった wi-mu-ri という語形が見られる。『韓国方言辞典』(重版 1987) のデータは小倉進平のデータには見られない長母音の語形が見られる点が重要である。この項目の中世語は声調が上声の二重母音(母音の連続)であったとされるからである。

## 3 地理的分布

(1) o-i 系の (1a) は忠清道, 京畿道, 黄海道, 江原道と咸鏡道の道境, 平安道に見られる。(1b) のうち ø は全羅道, 忠清南道, 江原道, 咸鏡南道に, we は济州島, 全羅南道, 慶尚道, 忠清北道, 咸鏡道北部に見られる。(1c) は慶尚道, 咸鏡道, 平安北道に見られる。(1d) は慶尚道にのみ見られるが, これはおそらく狭母音化 e / ε > i によるものであろう。

(2) mu-rø 系は済州島, 慶尚道, 忠清道に, (1) の併用形として分布する。

#### 4 文献上の記録

(1) o-i 系: 現代語の oi (오이) にあたる中世語の語形 (:외, 左側の : は上声を表す) は『杜詩諺解』(1481), 『三綱行実図』(1481), 『金剛經三家解』(1482), 『訓蒙字会』(1527), 『新增類合』(1576) などから見られる。その後, 『類合 (七長寺板)』(1664), 『訳語類解』(1690), 『類合 (霊長寺板)』(1700), 『同文類解』(1748), 『方言類解 (戌部方言)』(1778), 『倭語類解』(1781), 『蒙語類解』(1790), 『済衆新編』(1799), 『広才物譜』(18--), 『医宗附余』(1868), 『韓仏字典』(1880), 『正蒙類語』(1884), 『国漢会語』(1895), 『韓英字典』(1897) などに見られる。主な用例は次のとおりである (: や・は傍点である)。

:외를 심·거 :외를 得·득고 <1482 金剛經三家解 2: 32a>

:외·를 머·거지·라 <15-- 三綱行実図 (東京) 孝 30>

:외 과 (菘) <1527 訓蒙字会 上 7a>

(2) mu-rø 系: 現代語の murø (물외) にあたる語形は, 管見の限り 19 世紀の文献から現れ始めるので, (2) の方が (1) よりも新しい語形と言える。『物名考』(18--) には 물외 (胡瓜) が見られ, ほかに 참외 (甜瓜) や 자외 (王瓜) などの語も見られるが, (1) の語形は単独では見られない。『韓仏字典』(1880) には 물외 (水瓜) が見られ, ほかに 외 (菘) や 참외 (眞瓜) といった語も見られる。

#### 5 考察

まず o-i 系と mu-rø 系の使い分けについて考える。『韓国言語地図』(2008) では, (1a) にあたる語形を使う地域の中には tʰa-mø (참외, 甜瓜) を ø という地域があることからして, o-i を基準に tʰa-mø を派生させた地域と ø (即ち tʰa-mø) を基準に mu-rø を派生させた地域があると述べている。なお, 小倉進平の「眞瓜」(上: 204-205) のデータには tʰa-mø とその母音の変種からなる tʰa-mø 系のみが記録され, o-i や ø/we といった語形はない。

以上の指摘を小倉進平の「黄瓜」と「眞瓜」のデータと照らし合わせると, 前者 (=tʰa-mø と o-i で区別する地域) は主に忠清道と黄海道で, 後者 (=ø と mu-rø で区別する地域) は済州島, 慶尚道, 忠清道である。後者の地域では o-i 系と mu-rø 系が併用して用いられているが, 「眞瓜」には tʰa-mø 系の語形も見られる。ここで, 小倉進平の「眞瓜」のデータは京畿道, 咸鏡道, 平安道が空白地点である。

また o-i 系と mu-rø 系の意味の違いであるが, いずれも胡瓜 (黄瓜) を指すことに違いはなさそうである。韓国語話者によると, どちらも胡瓜だが, mu-rø 系は o-i 系の前に mul (水) を加えることで「水っぽい」や「味が薄い (味が無い)」という意味を強調しているという語感があるという。ついでに, これらの語形に対して tʰa-mø (참외, 甜瓜) は「本物の (眞

の)」や「味がある」という語感があるという。『筆写本古語大辞典』(2010)には「味甜者, 瓜참외也; 不甜者, 黄瓜외也」<蒙牖 食物 19b> というのが見つかるが, これは韓国語話者の語感を表現しているように思われる。『物名考』(18--)には o-i 系の語形はなく胡瓜 (mu-rø) や甜瓜, 王瓜などが見られることから, 他の瓜系 (o-i 系) の植物と区別するために (o-i の前に mul を加えた) mu-rø という語が用いられるようになった可能性も考えられる。

次に標準語の分布について考える。韓国の標準語は o-i (오이) であるが, 小倉進平のデータからは o-i が京畿道を中心にして忠清道, 黄海道, 平安道に主に見られることが分かる。これらの地域は中世語の発音 (母音の連続) を維持する地域である。忠清南道には u-i という語形が見られるが, これは語頭で o-i > u-i のような変化を経たか, (2) や「眞瓜」のような語形の後部要素 (第二音節以下) で o-i > u-i のような変化を経たものであろう。

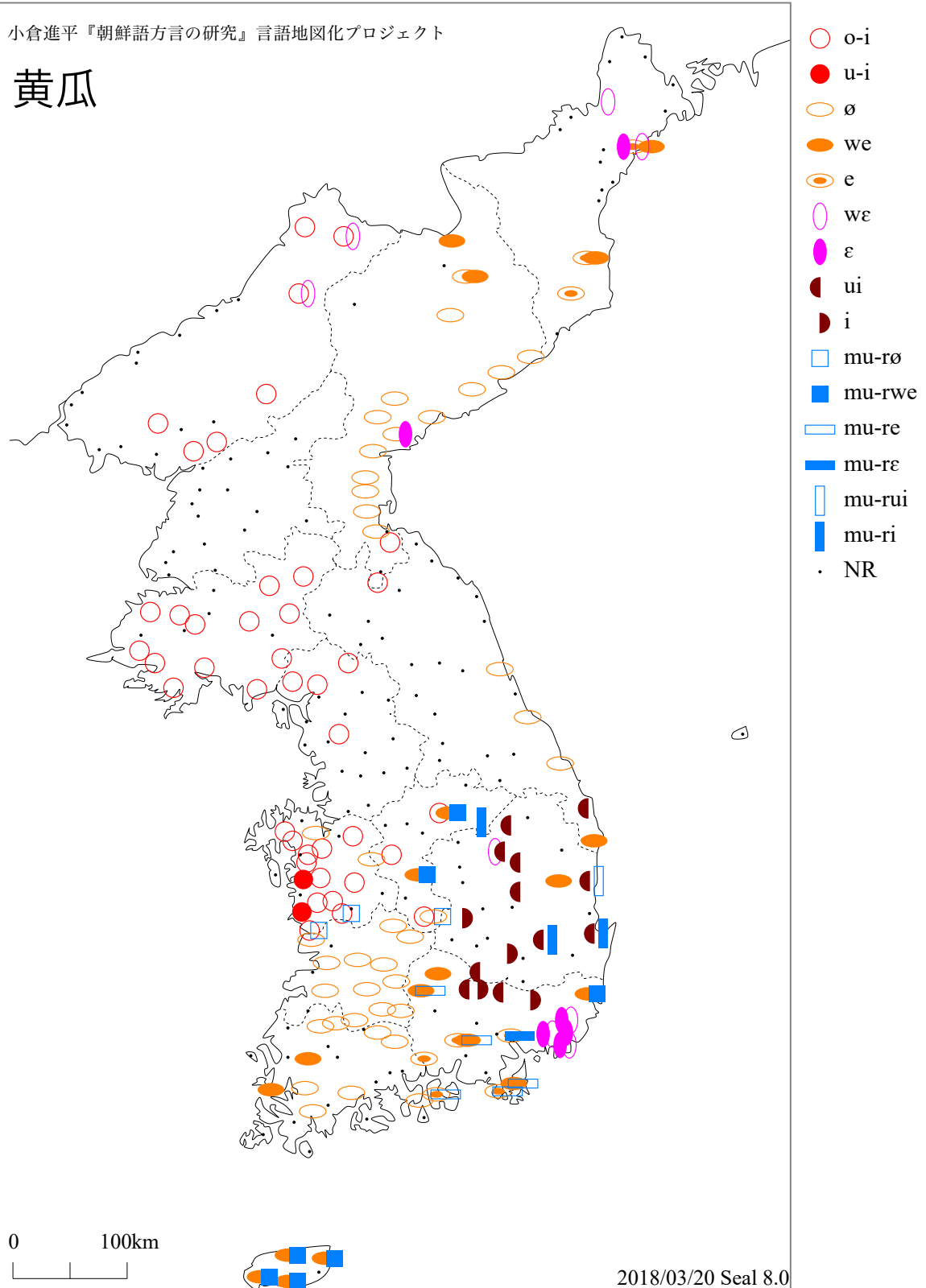
現在の標準語形が用いられない地域では, (1b-d) のような母音の変種, または (2) mu-rø 系が見られる。これらの地域では, 中世語で発音されたとされる上声 [oi] のような母音の連続が維持されず, 単母音ないし二重母音として現れるという特徴がある。おそらく o-i > ø / we / e / we / ε および we / e > ui (=wi) / i のような変化を経たものと思われる。現在の標準語形は中央からこれらの地域へと次第に浸透したものと考えられる。

最後に, 中世語では同音異義語であったとされる「外」(中世語は上声の [oi] で, 現代語では [ø] または [we] と発音される) と「黄瓜」(o-i 系に限る) の発音の地域差を比べる。最も特異な点は「黄瓜」では母音の連続を維持する (現在の標準語形の) 地域が見られるのに対して「外」にはそのような記録はないことである。これは「外」が漢字語で「黄瓜」が固有語であることや, 「外」の方は「~の外」や熟語の後部要素に現れやすいが「黄瓜」はそれよりは単語単独で用いられやすいといった条件の違いなどによるものであろう。実際, 小倉進平のデータでも (2) mu-rø 系では第二音節で o-i という母音は現れていない。「黄瓜」を o-i とする地域のうち, 忠清道, 京畿道, 黄海道などでは「外」は ø であり, 平安道では「外」は we である。これらの地域では「黄瓜」では母音の連続を保存するが「外」では oi > ø や oi > we のような変化を経たことになる。この他の地域では, 済州島では we, 慶尚道では we (we) / e (e) や wi / i, 全羅道, 黄海道, 咸鏡道では ø などが現れるという点で, 「黄瓜」と「外」は共通する。こうした地域では「黄瓜」と「外」で類似した音変化を経たものと考えられるが, 崔鶴根 (重版 1987) には「外」で長母音が現れる地域はないのに対し「黄瓜」では長母音が観察される地域がある。この違いも先述の出現条件の違いを反映した結果であると考えられることができる。

#### 参考文献

- 崔鶴根 (1978, 重版 1987) 『韓国方言辞典』ソウル: 明文堂.  
朴在淵主編 (2010) 『筆写本古語大辞典』(全 7 巻) ソウル: 学古房.

# 黄瓜



# 稲

福井 玲

## 1 はじめに

韓国の標準語は pjo (ㅈ) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「菜蔬」に「稲」という項目名で7種記録されている(上: 206–207)。これらは次のように pjo 系と na-rak 系の2つのグループに分類することができる。

(1) pjo 系 pjo / pe / pø

(2) na-rak 系 na-rak / na-rok / na-ruk / no-rak

なお、小倉進平はこれらのうちで pjo 系の語形について、忠清南道の公州、忠清北道の丹陽で「粃」の意味でも使われること、そして na-rak 系の語形についても全羅南道の谷城、求禮、全羅北道の任實、雲峰、長水、鎮安、忠清南北道の各地、咸鏡南道の新高山でも「粃」の意味でも使われることを注記している。また、na-ruk という語形については京畿道の漣川、江原道の鐵原で「粟を指すものの如し」と注記している。

なお、日本語では「稲」と「粃」がはっきりと区別されるが、韓国語ではもっぱら粃を指す語としては nwi があるものの、これは米の中に混じっているものを指すのが普通であるという点で日本語の「粃」とは異なる。したがって pjo 系あるいは na-rak 系の語形が稲だけでなく粃も表わす地点があるというのは不思議なことではない (cf. Fukui 2016)。

## 2 地理的分布

この項目は特徴的な地理的分布を見せる。まず、(1)の pjo 系のうち、標準語となっている pjo は小倉進平のデータでは黄海道の海岸よりの地域にしか見られない。そして忠清道から江原道以北の大部分の地域では pe が用いられ、pø という語形は黄海道の海岸より2地点のみで用いられている。これに対して(2)の na-rak 系の語形は慶尚道、全羅道の全域と忠清道の多くの地点を中心として分布し、それとはやや離れた江原道の北部、黄海道、京畿道、咸鏡南道の数地点でも用いられている。

以上のような分布は、忠清道から江原道にかけての東西に延びる線を境界にして、半島の南北に分かれていると見ることができる。なお、本稿では扱わないが、この他に穀物に関わる語彙の中で「粟」がやはり南北対立型の分布を見せることが分かっている(北部は tjo 系、南部は so-suk 系の語形が分布する)。

## 3 文献上の記録

(1)の pjo 系については、中世語から現代にかけて pjo という語形が普遍的に見られる。

벼 爲稻 <1446 訓民正音解例本 58>

稻 벼 도 <1527 訓蒙字會 上 7a>

(2)の na-rak 系についてはハングル資料の中では 19 世紀末に至るまで見られず、次の『韓  
仏字典』(1880)の用例が最も古いものと思われる。

나라 穀植 <1880 韓仏字典 268>

ただし、この用例は「穀食」とあることから分かるように必ずしも「米」のみを指すとは  
限らない。これは上で見たように、地域によっては「粟」を指すこともあるという小倉進平  
の注記にも通ずる。

この他に、漢文による記録では、李徳懋(1741-1793)の『寒竹堂涉筆』の「新羅方言」に「羅  
洛」として記録されている(小倉進平『朝鮮語方言の研究』(下: 190-193))。

#### 4 考察

(1)の pjo 系の 3つの語形のうちでは、pjo が最も古いことは文献上から裏付けられると  
ころであり、また母音 jo と e は方言間でしばしば交替を見せるので、地理的分布上 pe のほう  
が優勢であることは理解に難くない。

(2)の na-rak 系の語形のうちで na-rak 以外のものについては、まず na-rok が済州島と慶尚  
道西部の一部、そして江原道の北部に、na-ruk が黄海道、京畿道と江原道の一部、そして no-  
rak が咸鏡南道の一部見られる。これは na-rak の分布領域全体の中では周辺地域に偏ってお  
り、圏論的分布をなしていると見ることが可能である。またこの 3つの語形の相互関係は  
na-ruk は na-rok の第 2 音節の母音が変化したもの、no-rak は na-rok の母音が音韻転換を起  
こしたものと見られるので na-rok が古い語形であると考えられる。それゆえ、(2)の na-rak  
系の語形全体の中では、na-rok が最も古いということになる。また、音変化の自然さを考慮  
に入れると、na-rok > na-rak は同化と説明できるが、逆に na-rak > na-rok の変化は説明しに  
くい。この点でも na-rok の方が古いと考えられる。

ちなみに na-rak 系の語形の語源説にはさまざまなものがあり、小倉進平(1943)は「国」を  
意味する na-rah と関連するものとみている。これに対して、これは一種の民間語源と言わ  
れる説であるが、しばしば「新羅の祿」を意味する「羅祿」に由来すると言われることがあ  
る(例えば、尹廷琦の『東寰録』(1859)、鄭喬の『東言攷略』(1908))。

筆者もこれは民間語源であると考えるが、上で論じたように na-rak と na-rok の関係でい  
えば na-rok の方がより古いという点で、不思議な符号を見せることは付記しておくことに  
する。ちなみに、なぜか稲と米に関しては国・王朝名に関係づける語源俗解が多い(例えば  
王建によって開かれた高麗王朝と関連づける「玉米」、朝鮮の李王家と関連づける「李粿」

など)。

#### 参考文献

小倉進平(1943)「稲と菩薩」『民族学研究』新一ノ七. 675–725. 日本民族学会.

Fukui, Rei (2016) Rice and related words in Korean. *Studies in Asian Geolinguistics* III. 36–41. The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS.

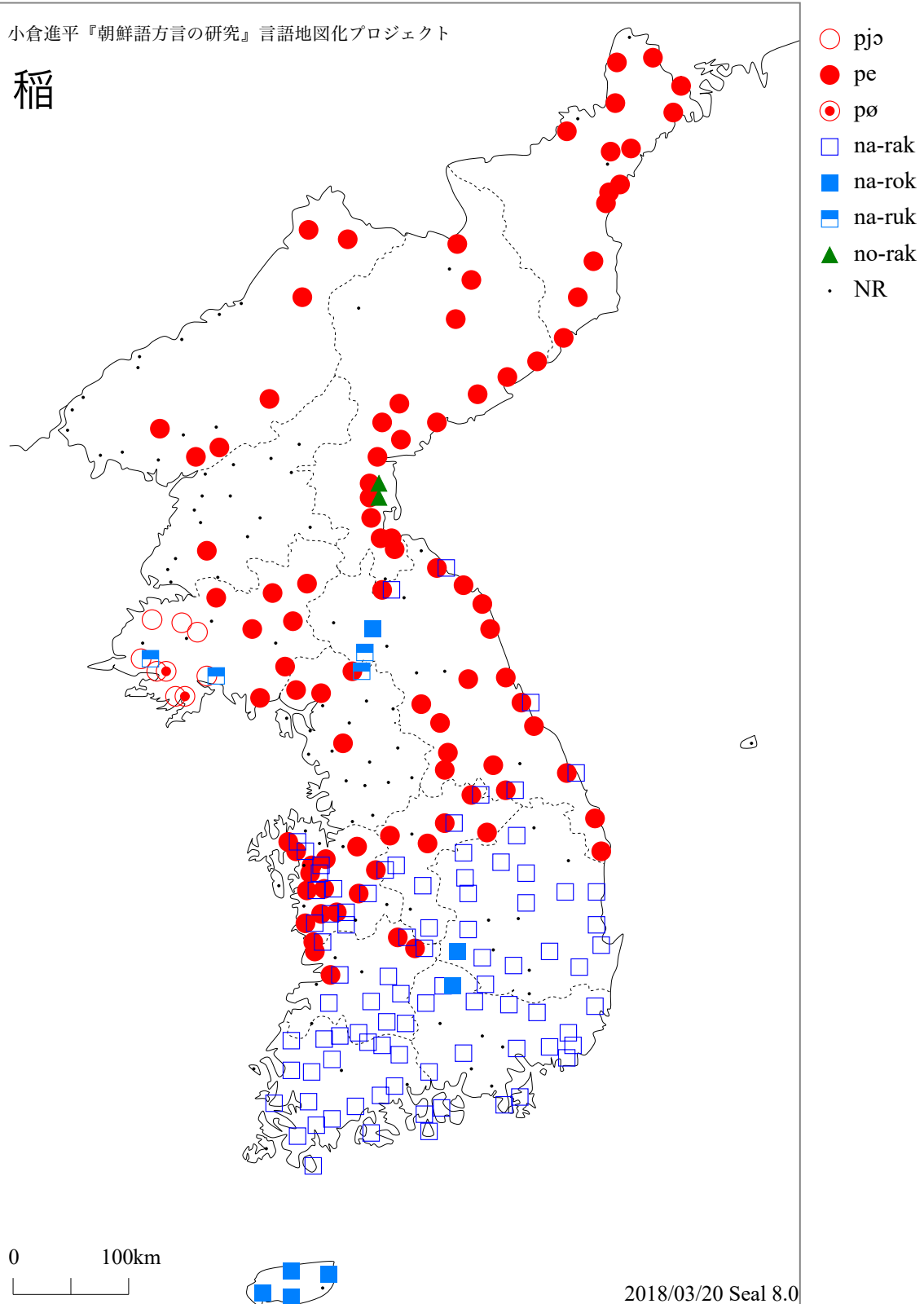
韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987–1995)『韓国方言資料集』全9巻. 城南：韓国精神文化研究院.

国立国語研究院 (1999)『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.

崔鶴根 (1978)『韓国方言辞典』ソウル：玄文社.



# 稲



# 玉蜀黍

福井 玲

## 1 はじめに

韓国の標準語は ok-su-su (옥수수) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「菜蔬」に「玉蜀黍」という項目名で 31 種記録されている(上: 210-212)。これらは次のように 5 つのグループに大別することができ、またその中でいくつかの下位分類ができる。

### (1) kaŋ-neŋ-i 系

(1a) kaŋ-na-mi / kaŋ-ne-mi

(1b) kaŋ-naŋ / kaŋ-naŋ-i / kaŋ-neŋ-i / ?kaŋ-neŋ-i / kaŋ-ne-i / kaŋ-ne / kaŋ-nje / keŋ-ne

### (2) kaŋ-naŋ + suk-ki 系

(2a) kaŋ-naŋ sek-ki / kaŋ-naŋ sik-k<sup>hi</sup> / kaŋ-naŋ suk-ke / kaŋ-naŋ suk-ku / kaŋ-njaŋ suk-ki /  
ka-ne suk-ki / keŋ suk-ki / ke su-gi

(2b) kaŋ-naŋ te-dzuk / kaŋ-naŋ te-t<sup>h</sup>uk

### (3) ok-su-su 系

ok-su-su / ok-su-si / ok-sui / ok-so-si / ok-si-gi / ok-suk-ku / ok-sik-ki / ok-tek-ki

### (4) suk-ki 系

suk-ki / fuk-ki

### (5) taŋ-sui 系

taŋ-sui

なお、この項目は小倉進平自身が『朝鮮語方言の研究』の下巻研究篇(pp. 193-198)で考察を行なって語形の分類をしており、ここでの分類はある程度それに従っているが、小倉進平は上の(1)と(2)をまとめて扱い、4 つのグループに分けている点が異なる。

## 2 地理的分布

(1)の kaŋ-neŋ-i 系は、南北に別れて分布する。北は平安道と咸鏡南道の大部分の地域にこの語形が分布し、南は慶尚道と全羅道の多くの地域にこの語形が分布する。

(2) kaŋ-naŋ + suk-ki 系もやはり南北に別れて分布するが、北は咸鏡北道の一部、南は慶尚道西部と済州島にこれらの語形が分布し、(1)よりは範囲が狭い。

(3)の ok-su-su 系は、京畿道、江原道、忠清道など、中部地域を中心に分布し、南北に分布する(1)、(2)の分布領域を分断している。その他、全羅道の一部と咸鏡北道にも数地点見られる。(4)の suk-ki 系は咸鏡北道の北部に分布し、(5)の taŋ-sui は咸鏡北道で、(4)よりは南の地域とそれに接する咸鏡南道の地域に分布する。

以上の地理的分布を、(4),(5)を A,(2)を B,(1)を C,(3)を D とすると、D を中心として概略次のような周圈的分布をなしていると言える。

北←      →南  
A B C D C B

この分布を、新古関係を反映した周圈論的分布と捉えるならば、(1)の kaŋ-neŋ-i 系や(2)の kaŋ-naŋ + suk-ki 系よりも(3)の ok-su-su 系の方が新しい語形であることになるが、文献上もそう言えるのかどうかを次に見ていくことにする。

### 3 文献上の記録

「玉蜀黍」がいつ朝鮮にもたらされたのかははっきりとしないが、文献上見られるのは18世紀後半からである。ok-su-su 系の語形と kaŋ-neŋ-i 系の語形が見られる。このうち最も早いのは1778年の『方言類積』に見られる 옥수수 と思われる。

玉穂<sup>1</sup> 옥수수 <1778 方言類積 戌部方言 26a>

옥서 玉黍 <1781 倭語類解 下 4b>

玉蜀黍 옥수수 <18-- 広才物譜 穀稷 1a>

kaŋ-neŋ-i 系はこれより遅く、1895年の『国漢会語』が最初の例と思われる。

강남이 玉鬚穗 <1895 国漢会語 11>

したがって、前節で述べたような周圈論的解釈に基づいて ok-su-su 系がより新しいとする解釈は文献上からは支持されないことになる。

### 4 考察

ここで扱った語形のうち、(1)の kaŋ-neŋ-i 系は中国を意味する「江南」という漢字語に由来する。特に(1a)の kaŋ-na-mi という語形はそれをよく保存している。次に(2)の kaŋ-naŋ + suk-ki 系は、(1a)の「江南」に由来する語形のあとに「モロコシ」(수수)を意味する語形を重ねたものである。(4)の suk-ki 系はこの「モロコシ」を表す語形の方言形をそのまま用いて「玉蜀黍」を表すものである。最後に(5)の taŋ-sui は小倉進平(1944)でも述べられているように「モロコシ」を意味する方言形に外来の事物に付ける「唐」を接頭させたものと考えられる。最後になったが(3)の ok-su-su 系は漢語でもそのまま使われる「玉蜀黍」の字音語であ

---

<sup>1</sup> 電子化されたテキストでは「玉林」と誤読されている。

る。

ところで、上で述べたように、分布の上からは ok-su-su 系の語形の方が kaŋ-neŋ-i 系の語形より新しいということになるが、文献上はそれを裏付けることはできなかった。しかし、ok-su-su が正規の漢語であること<sup>2</sup>、「江南」は、それ自体は漢字語であっても、中国でその意味で使われることはないことから考えると、もともとは「江南」というより俗っぽい語形が使われていたところに正規の漢語が新しく登場し、その前からのより俗っぽい語形は文献上記録されることがなかったと解釈すれば、分布上推定される新古関係が維持できるかもしれない。

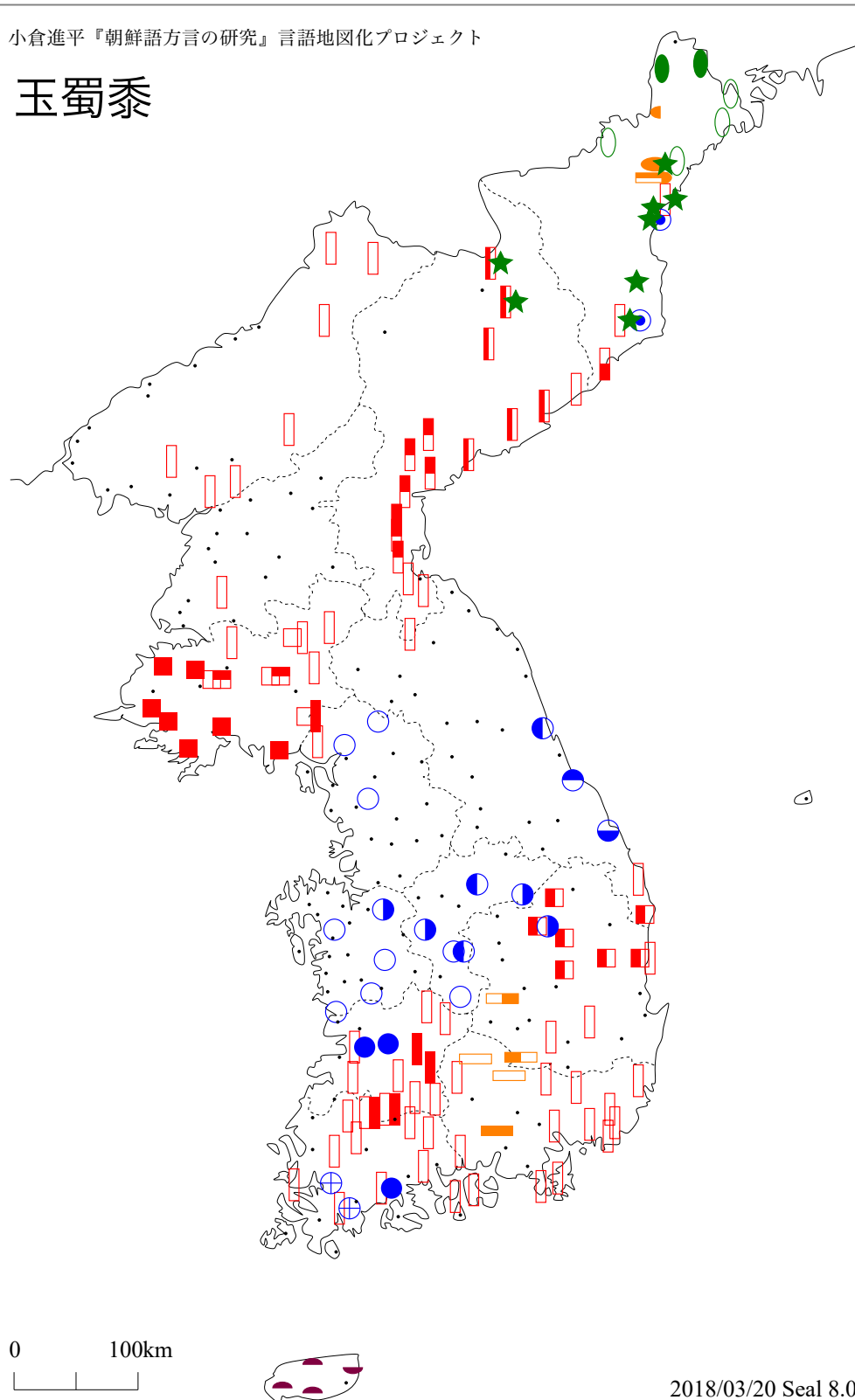
#### 参考文献

小倉進平(1944)「玉蜀黍」『朝鮮語方言の研究』下巻研究篇所収(193-198). 東京：岩波書店.  
朱林彬 (2015)『韓国語語彙史研究—小倉進平の方言調査に基づいて—』2015 年度東京大学  
人文社会系研究科修士学位論文.

---

<sup>2</sup> 但し、非常に文語的な語形である (朱林彬 (2015))。

# 玉蜀黍



- kaŋ-na-mi
- kaŋ-ne-mi
- ▣ kaŋ-naŋ
- ▤ kaŋ-naŋ-i
- ▥ kaŋ-neŋ-i
- ▧ ?kaŋ-neŋ-i
- ▨ kaŋ-ne-i
- ▩ kaŋ-ne
- kaŋ-nje
- keŋ-ne
- ▬ kaŋ-naŋ sek-ki
- ▭ kaŋ-naŋ sik-kʰi
- ▮ kaŋ-naŋ suk-ke
- ▯ kaŋ-naŋ suk-ku
- ▰ kaŋ-njaŋ suk-ki
- ka-ne suk-ki
- ▶ keŋ suk-ki
- ke su-gi
- ▬ kaŋ-naŋ te-dʒuk
- ▬ kaŋ-naŋ te-tʃʰuk
- ok-su-su
- ok-su-si
- ⊙ ok-sui
- ⊕ ok-so-si
- ◐ ok-si-gi
- ◑ ok-suk-ku
- ◒ ok-sik-ki
- ◓ ok-tek-ki
- suk-ki
- fuk-ki
- ★ taŋ-sui
- NR

# 小豆

林 茶 英

## 1 はじめに

韓国語の標準語は p<sup>h</sup>at(팥)である。『朝鮮語方言の研究』(上: 213–214)には 9 種類の語形が載っている。これらの語形は第 1 音節の母音により分類することもできるが、その後に助詞あるいは接尾辞と思われる -i が付くか否かにより分けることもできる。以下の(1)と(2)は『朝鮮語方言の研究』に載っている語形であるが、まず、音節数により、1 音節の語形と 2 音節の語形に分け、さらに第 1 音節の母音の種類により分類したものである。

### (1) p<sup>h</sup>at 系

(1a) p<sup>h</sup>ʌt (1b) p<sup>h</sup>at / p<sup>h</sup>ak (1c) p<sup>h</sup>ot

### (2) p<sup>h</sup>at + -i 系

(2a) p<sup>h</sup>at-tʃ<sup>h</sup>i (2b) p<sup>h</sup>et-ki / p<sup>h</sup>et-k<sup>h</sup>i / p<sup>h</sup>et-tʃ<sup>h</sup>i (2c) p<sup>h</sup>ot-tʃ<sup>h</sup>i

## 2 その他の語形

小倉進平以外の資料では(1)や(2)のほかにもさまざまな語形が確認できるが、(3)は 1 音節の語形であり、(4)は接尾辞の -i が付いた語形である。(5)は p<sup>h</sup>at あるいは k<sup>h</sup>oŋ(豆)に接頭辞が付いた語形である。

### (3) p<sup>h</sup>ot / p<sup>h</sup>it

(4) p<sup>h</sup>a-gi / p<sup>h</sup>at-ki / p<sup>h</sup>e-ʔki / p<sup>h</sup>o-si

(5) tʃan-k<sup>h</sup>oŋ / tʃam-p<sup>h</sup>at

## 3 地理的分布

(1a) p<sup>h</sup>ʌt は済州地域にしか見られない。(1b)の p<sup>h</sup>at は最も広い範囲にかけて分布する語形であるが、全羅南北道、慶尚南北道、忠清南北道、京畿道、江原道、黄海道、咸鏡南北道に見られる。p<sup>h</sup>ak は平安南北道にだけ見られる。(1c)の p<sup>h</sup>ot は全羅南北道及び慶尚南道に分布する。

(2)の語形はすべてが今の北朝鮮の地域にしか見られないのが特徴である。(2a)の p<sup>h</sup>at-tʃ<sup>h</sup>i は咸鏡北道の 2 箇所に見られる。(2b)の p<sup>h</sup>et-ki は黄海道や咸鏡南北道に分布し、p<sup>h</sup>et-k<sup>h</sup>i は咸南の 1 箇所、咸北の 2 箇所に見られる。第 1 音節の終声が k である語形(p<sup>h</sup>ak)が平安南北道にしか分布しないのに、黄海道や咸鏡南北道に p<sup>h</sup>et-ki や p<sup>h</sup>et-k<sup>h</sup>i が見られるのが興味深い。p<sup>h</sup>et-tʃ<sup>h</sup>i は咸北の 1 箇所に見られ、(2c)の p<sup>h</sup>ot-tʃ<sup>h</sup>i も咸北の 2 箇所にしか見られない。

(3a)の p<sup>h</sup>ot は慶尚南道に 1 箇所だけに分布し、p<sup>h</sup>it は済州に見られる。(3b)の p<sup>h</sup>a-gi は平北

や平南の2箇所に見られ、p<sup>h</sup>at-kiは黄海や平南に分布する。p<sup>h</sup>e-ʔkiは咸鏡南北、黄海、平南に分布し、p<sup>h</sup>o-siは全北の2箇所に見られる。(3c)のʃan-k<sup>h</sup>oŋは咸北にだけ分布し、ʃ<sup>h</sup>am-p<sup>h</sup>atは咸南の1箇所にしか見られない。

#### 4 文献上の記録

中世語の小豆を表す語形は𐄀(p<sup>h</sup>ʌc<sup>h</sup>)あるいは𐄁(p<sup>h</sup>ʌsk)である。単独形および属格形は中世語の形態音韻規則によって𐄀になるが、母音で始まる一般の格助詞が付くと、形態音韻論的な語末子音の -c<sup>h</sup>あるいは -skが実現する。『救急方諺解』(1466)にはこの2種類の語形が両方現れる。

𐄀為小豆 <1446 訓民正音解例本 用字例>

𐄀초란 앓고 汁을 ㄷ시 ㅎ야 머그면 <1466 救急方諺解 下 88b>

매 마즌 瘡을 고투되 𐄀글 ㄴ로니 시버 알픈 ㄷ 브티면 <1466 救急方諺解 下 21b>

#### 5 考察

文献上の記録によると、小豆の古い語形は𐄀(p<sup>h</sup>ʌc<sup>h</sup>)あるいは𐄁(p<sup>h</sup>ʌsk)であるが、(1b) p<sup>h</sup>at/p<sup>h</sup>akについては次の通りに解釈することができる。まず、両者の母音はともに古い語形である p<sup>h</sup>ʌc<sup>h</sup> あるいは p<sup>h</sup>ʌsk の母音 ʌ が a に変化した結果であると思われる。語末子音については、p<sup>h</sup>at の場合、小倉進平のデータでは単独形しかないので形態音韻論的な振る舞いは不明であるが、おそらく 𐄀(p<sup>h</sup>ʌc<sup>h</sup>)に由来する語形の単独形であろうと考えられる。一方、p<sup>h</sup>ak の場合、p<sup>h</sup>ʌsk から終声 s が脱落した結果と思われる。(1c) p<sup>h</sup>ot は母音 ʌ が o に変化した結果であろう。

ところで咸鏡道では小豆に接尾辞 -i が付いた語形がよく見られる。(2)の p<sup>h</sup>at-ʃ<sup>h</sup>i は p<sup>h</sup>ʌc<sup>h</sup> に -i が付いたものと考えられるが、あるいは p<sup>h</sup>ʌsk に -i が付き、第2音節が口蓋音化した結果かもしれない。p<sup>h</sup>et-ʃ<sup>h</sup>i の場合、第1音節の母音が第2音節の高母音に影響されてウムラウトを起こしたものと見られる。これらの語形は咸鏡北道にしか見られない。(2)の p<sup>h</sup>et-ki は小豆の古い語形である p<sup>h</sup>ʌsk に -i が付き、第1音節の母音が第2音節の母音によりウムラウトを起こした結果であろう。一方、p<sup>h</sup>et-k<sup>h</sup>i の第2音節の激音は、p<sup>h</sup>et-ʃ<sup>h</sup>i への類推で生じたものと思われる。(2c)の p<sup>h</sup>ot-ʃ<sup>h</sup>i は咸北の2箇所に分布するが、p<sup>h</sup>ot が咸北には全く見られず全羅南北道や慶南にしか見られないのに、p<sup>h</sup>ot に -i が付いた語形が咸北に分布するのが目立つ。

(3c)の ʃan-k<sup>h</sup>oŋ は形容詞の小さい(잘다)と名詞の豆(콩)の合成語と考えられるが、小豆の大きさが大豆より小さいために作られた語形と思われる。ʃ<sup>h</sup>am-p<sup>h</sup>at の ʃ<sup>h</sup>am は「本物」あるいは「質がよいもの」を表す接辞であるが、一般的に ʃ<sup>h</sup>am を取り除いた名詞の方が ʃ<sup>h</sup>am が付いた派生語を意味的に含んでいる場合が多い。鳥 se(새)が雀 ʃ<sup>h</sup>am-se (참새)より上位のカテゴリであり、油 ki-rim(기름)に胡麻油 ʃ<sup>h</sup>am-ki-rim(참기름)が含まれる。したがって、ʃ<sup>h</sup>am-

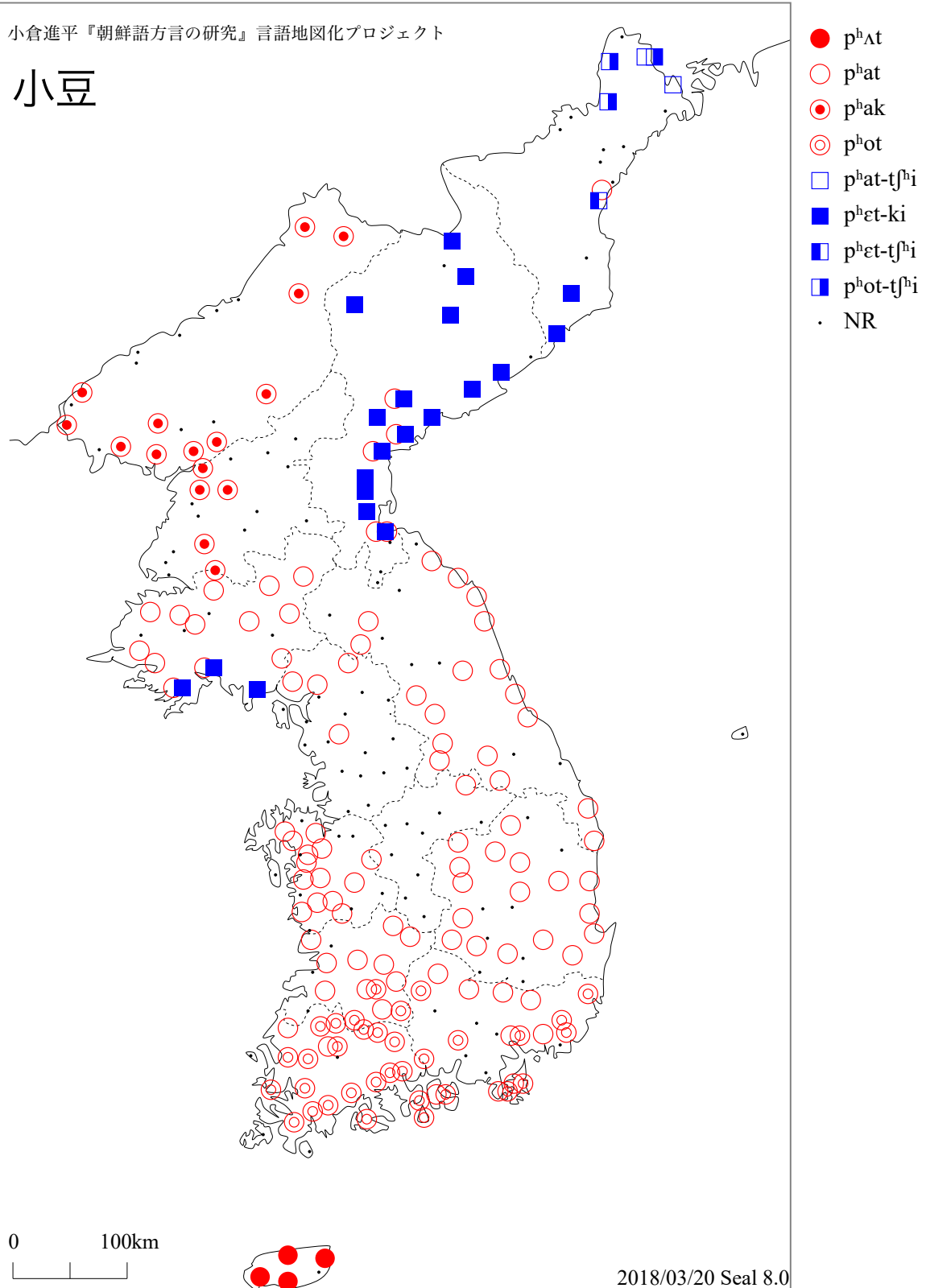
p<sup>h</sup>at の場合, まず p<sup>h</sup>at の意味が t<sup>h</sup>am-p<sup>h</sup>at とは異ならなければならない, 次に t<sup>h</sup>am-p<sup>h</sup>at が p<sup>h</sup>at の 1 種であるのが自然であるが, この語形が小豆の方言として使われるのは興味深い。

#### 参考文献

- 金敏洙編 (1997) 『우리말語源辞典』 ソウル: 太学社.  
金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』 ソウル: 京畿大学校出版局.  
崔鶴根 (1990) 『増補 韓国方言辞典』 ソウル: 明文堂.



# 小豆



# 土

澁谷 秋

## 1 はじめに

韓国の標準語は<sup>ㅎ</sup>であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「金石」に「土」という項目名で10種記録されている(上: 223-224)。

これらの語形は母音が<sup>ɪ</sup>のものと、それ以外のものに大きく分けることができる。

### (1) <sup>ɪ</sup>系

(1a) hik / hil

(1b) hil-gi / hi-rik

### (2) <sup>ɪ</sup>以外のもの

(2a) hak / hal-gi

(2b) hək / həl

(2c) hulk

(2d) hək

一音節で実現する語形は(1a) hik, hil, (2a) hak, (2b) hək / həl, (2c) hulk, (2d) həkがある。終声が k で実現するものがほとんどで、l で実現するものが(1a) hil, (2b) həl, の二つであり、終声の l と k のどちらも発音されるのは (2c) hulk だけである。二音節で実現する語形には、(1b) hi-rik と接尾辞 <sup>ɪ</sup> が結びついた(1b) hil-gi, (2b) hal-gi とがある。母音のバリエーションは <sup>ɪ</sup> / ɔ / a / ʌ / u があるが、どの語形も標準語<sup>ㅎ</sup>の変種と考えられる。

## 2 その他の語形

これ以外の語形として『韓国方言資料集』(1989)には<sup>흙</sup>と(흙+ㄱ=)が見られる。しかし、これらは<sup>ㅎ</sup>に助詞(이/을/에다)が後続した際の発音を反映して表記したものであり、単独で発音されるときには<sup>흙</sup>, <sup>흙</sup>で実現する。

また、長母音で記録されている地域もある。いずれも京畿道で、坡州では xi:g-i, 驪州, 平澤, 安城では xi:k が見られる。

## 3 地理的分布

(1) の<sup>ɪ</sup>系は朝鮮半島全域に広く分布する。(1b) の hil-gi は咸鏡道全域でみられ、hi-rik は慶尚南道南海の1地点のみでみられる。

(2a) の hak は黄海道黄州, 平安南道の平壤の2地点で、hal-gi は咸鏡北道の會寧と鐘城

の2地点でみられる。(2b) の hək と həl は慶尚道の4地点でみられるが、『韓国方言資料集』(1989)の慶尚道のデータには母音が ɔ で報告される地域はない。なお、中世語の母音 ‘・’ [ʌ] (いわゆる「アレア」)が ɔ に変化するのは、他の語の場合でも見られることがある(ᄃ다>허다など)。(2c) hulk は平安北道と咸鏡北道の一部地域で見られ、(2d) hʌk は濟州島でのみ見られる語形である。

#### 4 文献上の記録

最も古い語形は『積譜詳節』(1447)に記録される ㅎ である。『積譜詳節』(1447), 『月印積譜』(1459), 『楞嚴經諺解』(1462), 『翻譯老乞大』(1517), 『新增類合』(1576), 『家礼諺解』(1632)など数多くの文献に見られる。

世界는 ㅍ티 아니ᄃ야 ㅎ과 돌과 ㅍ과 더러븐 거시 마득ᄃ고 <1447 積譜詳節 20:37a>  
드로미 업스면 반ᄃ기 ㅎ과 ㅎ과 本來 다른 因이 업스니 <1462 楞嚴經諺解 3:89a>

アレア [ʌ] が独自の音価を失うことに伴って 17 世紀以降は ㅎ の用例数が増え、18 世紀以降は ㅎ が優勢となる。

도한은 남원부 사름이라 아비 죽거늘 ㅎ글 저서 무덤 밍글고 <1617 東国新統三綱行  
実図孝子図 2:39b>  
우희 ㅎ 덩이 ㅎ이 썬러더 ㄴ려와 禮拜ᄃ는 거시여 <1765 朴通事新釋諺解 1:39b>  
그 ㅼ는 ㅎ이 하슈 가온ᄃ진 ㅎ을 ㅍ셔 ㅼ기 어려운즉 <1883 易言諺解 4:16b>

#### 5 考察

ㅎ はアレア [ʌ] の音変化に伴って母音が変化するが、その様相は他の語とは異なる。アレアは 16 世紀から音が変化し始め、まず第 2 音節以降で i に合流し、第 1 音節のアレアは 17 世紀に入って音が変化し始め、18 世紀後半には a に合流することがよく知られている。しかし ㅎ の変化は例外的で ʌ > i に変化する。李基文 (1961; 1988: 210) では語頭の音節でアレアが他の母音に変化した最初の例は『小学諺解』(1588)とする。

明道先生이 날이 못도록 단정히 안자 겨심애 ㅎ글로 밍글 사름 글ᄃ시니 밍 사름  
ᄃ접ㅎ애 <1588 小学諺解 6:122a>

hʌk がアレアの音変化に伴って第一音節のアレアの本来の変化である ʌ > a となった \*hʌk が想定され、(2a)の hak, hal-gi は終声が k で実現する、または接尾辞 i がつくことによって 2 音節語となる。この変化とは別に ʌ > i に変化した hiik は 17 世紀以降用例が増えて現代語においても地域によって終声が l / k で実現する違いはあるものの最も広く使われている

る。またこれに接尾辞 i が結びついた(1b) hil-gi もある。また, hilk の母音が円唇化することで(2c) hulk が生じたものと考えられる。ただし, hulk は小倉進平の調査で咸鏡北道と平安北道で見られる語形とされるが, 『咸北方言辞典』(1986), 『平北方言辞典』(1981)を確認するとこれらの辞典に記載される語形のなかに母音が u のものは見られないため, hilk (小倉進平の表記だと hũlk (ũ, 上点つきの u) の誤記の可能性が高いといえる。hi-rik はよくわからない。二音節語だったものが中世語以前の段階で二音節目が脱落した特殊な語形成の結果なのだろうか。古形の可能性も考えられるが, この語形は 1 地点でしか見られないため詳しいことはよくわからない。この変化をまとめると以下のような歴史的変化が想定される:

halk > \*halk > hak > hal-gi  
> hilk > hik / hil > hil-gi  
> \*holk > hok / hol

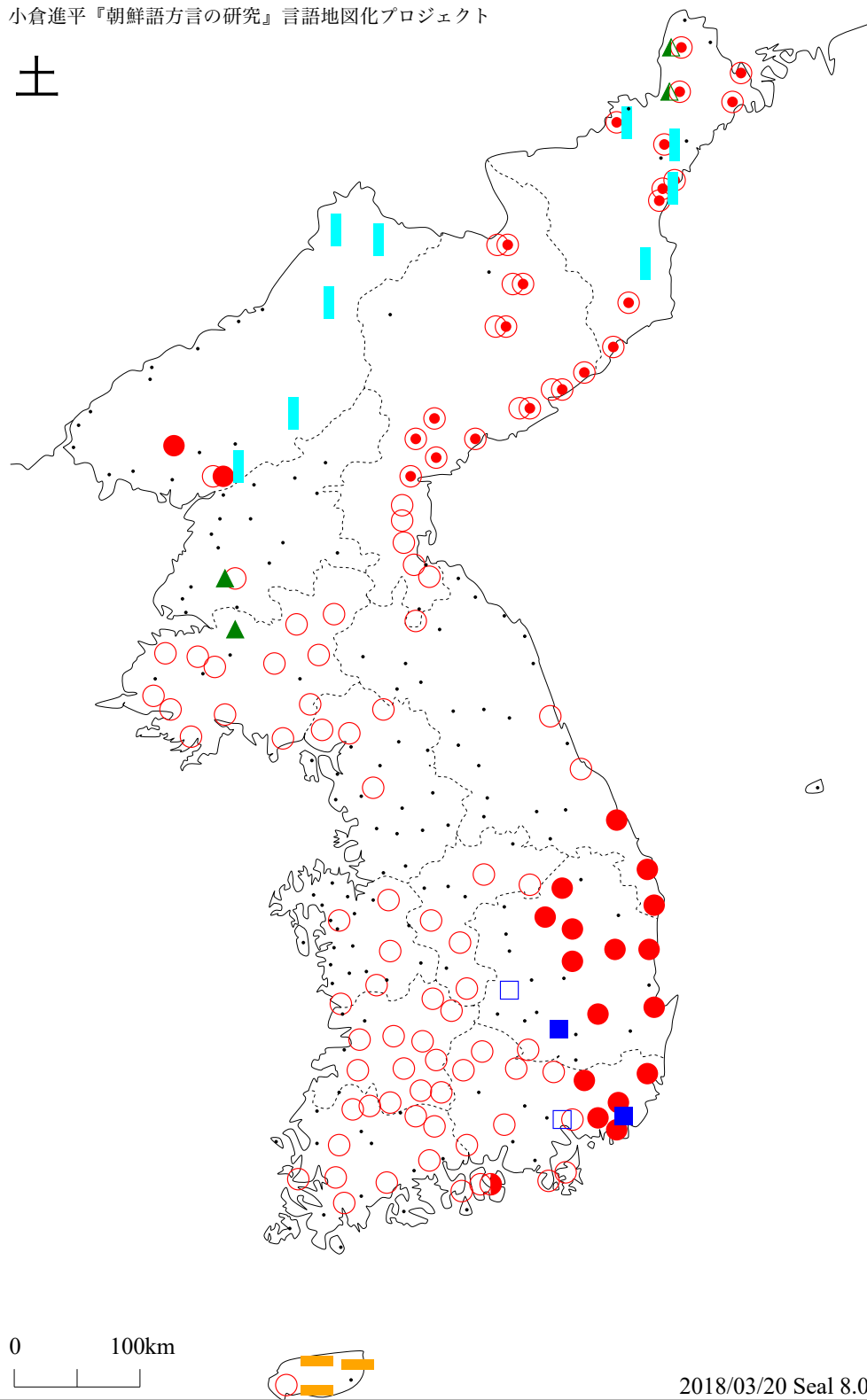
語源に関しては未詳。

#### 参考文献

- 国立国語研究院(1999)『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.  
金泰均編著 (1986)『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局  
金履浹編著 (1981)『平北方言辞典』城南：韓国精神文化研究院  
李基文(1961;1988)『国語史概説』ソウル：太学社.  
劉昌惇(1964)『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部.  
韓国精神文化研究院語文研究室編(1987-1995)『韓国方言資料集 1-8』韓国精神文化研究院.  
한글학회(1991)『우리말 큰사전』ソウル：語文閣.

小倉進平『朝鮮語方言の研究』言語地図化プロジェクト

±



# 鋏

梁 紅 梅

## 1 はじめに

韓国の標準語 ka-wi であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「器具」に「鋏」という項目名で 13 種記録されている(上: 225-226)。これらは (1) ka-se 系, (2) ka-wi 系, (3) kaŋ-a 系, (4) ?ka-se 系の 4 つのいずれかに分類できる。

### (1) ka-se 系

(1a) ka-se / ka-si-ge, (1b) ka-se

### (2) ka-wi 系<sup>1</sup>

(2a) ka-u / ka-ui (=ka-wi), (2b) ka-we / ka-we

### (3) kaŋ-a 系

kaŋ-a / kaŋ-ε / kaŋ-u / kaŋ-e

### (4) ?ka-se 系

(4a) ?ka-se, (4b) ?kak-ke

ka-wi は s が入るか入らないかによって大きく 2 種類に分けられるが、ここではもっと細かく 4 種類に分けることにする。

(1)の ka-se 系はさらに(1a)のような第 1 母音が a ではじまるもの、(1b)のように ʌ ではじまるものに分けられる。

(2)の ka-wi 系は母音が u であるか半母音の w であるかのいずれかによって、(2a), (2b)の 2 つに分けられる。(2b)の ε と表記された地域は実は e / ε の区別が存在しない地域である可能性が高い。

(3)の kaŋ-a 系は第 2 音節の母音が a / ε / u / e と 4 種類が見られる。(4)の ?ka-se 系は 1 音節が濃音であり、第 2 音節に s が入るか入らないかによって(3a), (3b)に分けられる。

## 2 その他の語形

小倉進平のデータでは 13 種類の語形に分けられているが、河野六郎では 17 種類に分けられ、そのほかに ka-e (忠北清州と平北江界), ka-ε (平南徳川と慶南蔚山), ka-o (忠南公州, 論山, 全南靈光), kaŋ-we (平南漢川), ka-se-gi (慶南金海), ka-si (慶南蔚山)が見られる。

## 3 地理的分布

<sup>1</sup> 小倉進平は ka-ui と表記しているが、これは彼の表記原則によれば本来は ka-wi であるべきものであり、以下では「～系」と総称するときは ka-wi 系と表記する。

(1)の ka-se 系の語形は京畿道, 忠清南北道, 江原道, 全羅南北道(濟州島), 慶尚南北道, 咸鏡南北道の幅広い地域に逆 L 型のように分布している。その中で第 1 音節が ʌ になっているのは濟州島だけである。

(2)の ka-wi 系は黄海道, 京畿道と慶尚南道の一部と全羅道に散在している。京畿道と慶尚道の一部地域では ka-se 系と併用している。

(3)の kaŋ-a 系は主に平安南道と平安北道に分布している。ŋ が入る語形は主に平安道にだけ分布しているが, その中で厚昌だけが ka-se 系と併用している。

(4)の \*ka-se 系は江原道に散在していて, ka-se 系を併用しているところもある。

#### 4 文献上の記録

最も古い資料としては 12 世紀頃の『鷄林類事』に「剪刀曰割子蓋」という項目がある。

剪刀曰割子蓋 <12 世紀頃 鷄林類事 >

ハンゲル資料としては一番古いものは『杜詩諺解』(1481)に見られる ㄹ애 という語形で, z のあとに有声軟口蓋(または声門)摩擦音が現れる貴重な例である(李基文(1990))。16 世紀以降はそれが失われて 마애 という語形が一般的になる。

치운 젓 오슬 곧마다 ㄹ애와 자과로 지소플 뵈아느니 <1481 杜詩諺解 10: 33b>

세젓 형은 마애오 三哥是剪子 <1517 頃 翻譯朴通事 39b>

마애 전(剪) <1527 訓蒙字會 中 7b>

17 世紀からは 마애 形と 가의 形が現れ始めた。

마애 일백 즈르 (剪子一百把) <1670 老乞大諺解 下 62>

마애를 버리혀 <17 世紀 癸丑日記 216 >

가의 剪子 <1690 訳語類解 下 15b>

가의 剪子 <1748 同文類解 下 17b>

#### 5 考察

ka-wi の音韻変化をさぐるためには先に一番古い記録として残されている『鷄林類事』での「割子蓋」という語形の正しい音を確立しなければならない。河野六郎(1945, 1979: 239–244)ではその音韻分析を詳しく述べているが, 具体的にみると次のとおりである。a) 第 1 音節の母音は朝鮮朝初期の文献に基づいて ʌ であった。b) 第 2 音節の子音は慶尚道方言の ka-si-ge によって s であった。c) また第 3 音節にはこの割子蓋によって g が古くから含まれていて, その母音は ai であり, 二重母音で一音節をなしていると考えられる。要するにはこ

の割子蓋の音価は ka-si-gai であったとする。

地図上の分布からみると、慶尚道で k<sub>Λ</sub>-si-ge が ka-se の地域に囲まれているが、それは ka-se が新しく生まれた語形であることを表す。また慶尚道方言では k<sub>Λ</sub>-si-ge は「右道訛」として蔑視されたこともあり、ka-se が明らかに新語であったことを表す。それによって ka-se は k<sub>Λ</sub>-si-gai > k<sub>Λ</sub>-si-ai > k<sub>Λ</sub>-sjai<sup>2</sup> > k<sub>Λ</sub>-fai > ka-se の変化を経たものとしている。

k<sub>Λ</sub>-fai は中央では k<sub>Λ</sub>-zai すなわち 마쵸 となった。また『訳語類解』では 가외 となっているがこの k<sub>Λ</sub>-ai > ka-<sub>Λ</sub>i の変化は第 1 音節の母音と第 2 音節の母音との音韻転換であるとしている。河野六郎による以上の変化をまとめると次のようになる(河野六郎(1945, 1979: 241))。

k<sub>Λ</sub>-si-gai > \*k<sub>Λ</sub>-si-ai > \*k<sub>Λ</sub>-sjai > \*k<sub>Λ</sub>-fai > k<sub>Λ</sub>-zai > \*ka-<sub>3</sub>Λi > ka-<sub>Λ</sub>i > ka-ui > ka-wi

これに対して李基文(1990)は『杜詩諺解』に見られる 쵸애 という語形の発音は [k<sub>Λ</sub>zɥai] と考え、それをもとに『鷄林類事』の「割子蓋」を \*k<sub>Λ</sub>zgai と見る点で異なっている。

再び小倉進平のデータに戻ると、河野六郎(1945, 1979)によれば、(1)の ka-se 系は古語の k<sub>Λ</sub>-si-gai から第 2 音節の子音が 3 になる変化が起きる前の段階のものである。(2)の ka-wi 系は ka-we / ka-we は ka-<sub>3</sub>Λi の 3 が 3w であったとすると、その後 ka-<sub>3</sub>wΛi が 3 を落して ka-wΛi > ka-oi / ka-ui > ka-o > ka-u という変化を辿ったと考えられる(河野六郎(1945, 1979: 241))。

(3)の η を含む語形は平安道にのみ見られるが、η の介入は hiatus を避けるための手段であって特に有声子音の脱落に際してよく起きる。これらはすべて ka-<sub>3</sub>Λi に遡ることができるが、kaη-a は 3 を落とし、kaη-u は ka-<sub>Λ</sub>i > ka-oi > kaη-u になったもので、kaη-e と kaη-ε は ka-<sub>Λ</sub>i > ka-ai > kaη-ai になって Umlaut を起こしたものである(河野六郎(1945, 1979: 241))。

(4)の ?ka-se 系は河野六郎の言語データでは見られない語形であるが、『韓国方言資料集』の江原道篇でも ?ka-se, ?kak-ke の語形が記録されている。これは恐らく動詞の ?kak- からの影響であろうと考えられる。?ka-se は恐らく ka-se と動詞の ?kak- が混じり合った語形で ?kak-ke は恐らく動詞の ?kak- に動詞の名詞化によく付く語尾 -ke が付いた語形であると考えられる。

## 参考文献

河野六郎 (1945) 朝鮮語方言学試攷一「鋏」語考一『京城帝国大学文学会論纂』11. 東都書籍京城支店. (河野六郎(1979)所収)

河野六郎 (1979) 『河野六郎著作集 1』東京：平凡社.

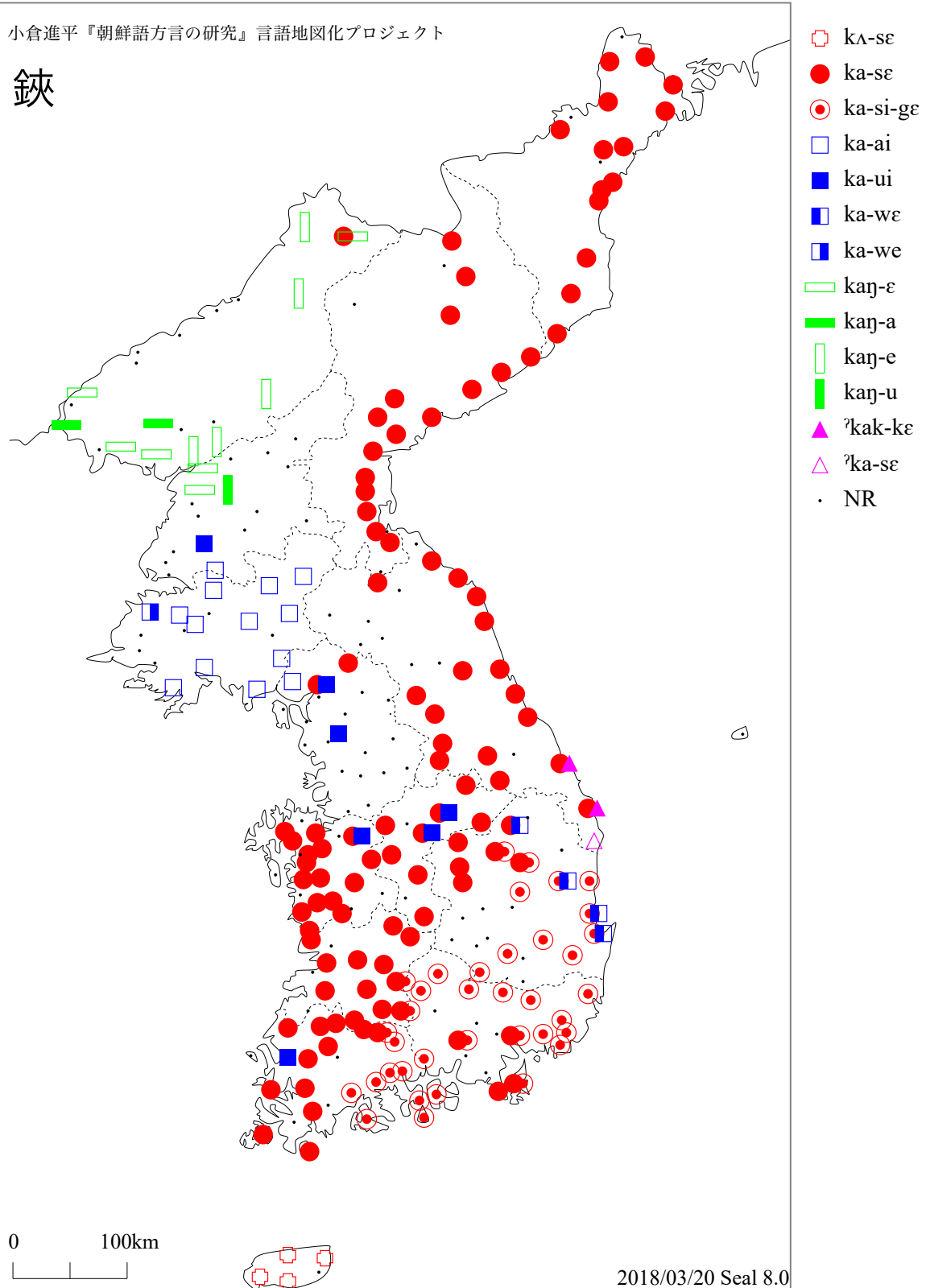
李基文 (1990) 『国語音韻史研究』ソウル：塔出版社.

韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987-1995) 『韓国方言資料集』全 9 卷. 城南：韓国精神文化研究院.

<sup>2</sup> 河野六郎の原文では k<sub>Λ</sub>-sjai の第 2 音節の j は i の下にアーチの補助記号を付けて表しているが、ここでは便宜上 j で代用する。同様に u の下にアーチを付けた記号も w で代用する。



# 鋏



# 馬槽

國分 翼

## 1 はじめに

韓国の標準語は ku-ju (구유) であり、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「器具」に「馬槽」という項目名で 23 種記録されている (上: 226–227)。これらの語形は大きく分けて(1) ku-juŋ 系, (2) ku-si 系, (3) -tʰoŋ 系の 3 つに分類できる。

### (1) ku-juŋ 系

(1a) ku-juŋ / kui-juŋ / kui-jɔŋ

(1b) kuŋ / kuŋ-i / kuiŋ / kui-i / kui-iŋ / kui

(1c) kwəŋ / kwe / kwəŋ-i / kwəŋ

### (2) ku-si 系

(2a) ku-su / ku-suŋ / kui-suŋ / ki-suŋ

(2b) ku-soŋ (2c) ku-si

### (3) -tʰoŋ 系

(3a) sə-tʰoŋ/swe-tʰoŋ (3b) pap-tʰoŋ (3c) tʰuk-tʰoŋ

(1) ku-juŋ 系は語根に /s/ を保持していないタイプの語形で、標準語の ku-ju に最も近い形である。ただし、ku-ju という語形自体は記録されていなかった。(1) ku-juŋ 系は 3 つのグループに下位分類できる。(1a)は第二音節に半母音 /j/ が現れるタイプ、(1b)は語根に半母音 /j/ が現れないタイプ、(1c)は語根に半母音 /j/ を保持しない語形のうち、第一音節に半母音 /w/ が現れるタイプである。

(2) ku-si 系は語根の第二音節の初声に /s/ を持つ語形である。このタイプの語形は、第二音節の母音の違いによって、(2a), (2b), (2c)に分類できる。

(3) -tʰoŋ 系は第二音節に tʰoŋ を持つ語形である。この tʰoŋ の部分は漢字語の「筒」または「桶」に由来するものであると思われる<sup>1</sup>。よってこれらは合成語となっており、前部の形態素の意味によって三つに分類される。

## 2 その他の語形

この項目では、済州における語形が記録されていないが、『표준어로 찾아보는 제주어 사전』(2014), 『済州島方言研究 資料編』(1985)によれば, 구시という語形が用いられる

<sup>1</sup> 『標準国語大辞典』(1999)によれば, 밥통の통には漢字の「桶」があてられる。また, 죽통は漢字語の「竹筒」に由来するものとしており, 後出の小倉進平の解釈とは異なる。

ようである。また、『제주말 큰사전』(2007)によれば, 구시의他に출통<sup>2</sup>という語形も紹介されている。

また, 京畿道のデータも不十分であったが, 『韓国方言資料集 京畿道編』(1995)によれば, 最も多くの地点で確認されたのは kuyuŋ (金浦, 始興, 楊平, 華城, 驪州, 安城) であった。また, 標準語と同じ kuyu が平澤でのみ確認された。その他, kuyəŋ (利村, 龍仁), küŋ (漣川, 加平) などの語形が確認された。

河野六郎 (1945: 60-74) では, 구유의方言形について, 小倉進平のデータよりも多い 34 項目を挙げて紹介している。そのうち, 小倉進平のデータで紹介されなかったものとしては, kusuŋi (平北厚昌), kuseŋi (平南陽徳) kyi (黄海道西部), kyŋi (平北鴨緑江下流域), kwŋi (平南祥原, 慶北興海・慶州), kweŋi (平安南道), kyjəŋ (黄海道延安・新溪), kyəŋ (黄海道金川・遂安, 京畿道議政府・広州), kyiŋ (黄海道金川・瑞興・黄州, 京畿道楊平・加平), kyŋ (京畿道加平), kyjuŋ (京畿道長湍), kyuŋ (江原道鉄原), kyəŋ (黄海道瑞興), kjoŋ (黄海道黄州), keuŋ (京畿道広州), kuju (京城, 忠南洪城) があった。

### 3 地理的分布

(1) ku-juŋ 系のうち, (1a)に属する語形は京畿道を中心に, 江原道中部, 忠清北道, 黄海道に見られる。(1b)に属する語形は平安道と黄海道北部, 慶尚北道と江原道の江陵・三陟に見られる。(1c)に属する語形は主に黄海道地域に分布し, 平安南道の平壤, 京畿道の漣川にも見られる。

(2) ku-si 系のうち, (2a)に属する語形は咸鏡南道から襄陽以北の江原道にかけての地域と忠清南道, 全羅北道全州と群山にも見られる。(2b) ku-soŋ は咸鏡南道德原の一地点のみで観察された。(2c) ku-si は定平以北の咸鏡道と全羅道, 慶尚南道, 慶尚北道の慶州, 高靈, 金泉, 尚州, 忠清北道の報恩, 永同に分布している。

(3) -tʰoŋ 系の語形のうち, 広範囲に分布しているのは(3c) ʃuk-tʰoŋ であり, 主に慶尚北道を中心として, 忠清北道の丹陽・提川, 慶尚南道の巨済に分布している。また, 京畿道の開城にも飛地的に分布している。その他, (3a) sə-tʰoŋ/swe-tʰoŋ はそれぞれ江原道の蔚珍, 平海に分布し, (3b) pap-tʰoŋ は全羅北道の井邑に分布している。

### 4 文献上の記録

馬槽にあたる中世語の語形としては구△が現れた。15世紀の用例が1例存在し, 16世紀にいくつかの用例がある。

구△예 주서 <1482 南明集諺解 下 63b>

물 물 머기논 돌구△ 잇느니라 <1517 翻譯老乞大 上 31b>

<sup>2</sup> 主に귀덕と운평という地域で用いられるようである。

내 앓가 이 구시 안해 두 드렛 물 기러 잇다 <1517 翻譯老乞大 上 35a>  
아히들히 흙의 구시에 마뜨기 여물 주고 줌 드리 <1517 翻譯朴通事 21b>  
가히 일씩기 남모디 혼 구시에 밥 주어 <1518 二倫行実図 玉山 28a>  
물구시 <1527 訓蒙字會 中 10a>

また、近代語に入ると구유の用例が存在する。そのうち最も早いのは萬曆 41 年(1613)の内賜記をもつ奎章閣版『訓蒙字會』と思われる。

물구유(馬槽) <1613 奎章閣版 訓蒙字會 中 12>  
구유 력(櫪) <1613 奎章閣版 訓蒙字會 中 19>

近代語の用例として、もう一つ注目すべきは、『朴通事諺解』に登場する귀유である。

귀유에 마득이여 <1677 朴通事諺解 上 21a>

この귀유は、第一音節が kui-と現れる語形につながるものであると言える。  
なお、20 世紀の文献であるが、구용という語形が用いられているものがあつた。

여러말틈에 셋겨 구용이를 구용통에다 틀어박고 쏘이며 <1912 飛行船 3>

## 5 考察

ku-ju の語源については未詳であるが、満洲語の huju [xudʒu] との関連が指摘される(小倉進平 1944, 河野六郎 1945)。

語源が同じである(1), (2)の語形のうち、(2) ku-si 系は文献上で現れた  $\Delta/z/$  が  $/s/$  で現れており、最も古いタイプの語形である。その中でも、文献及び分布状況から考慮すると、ku-si が最古の形であると考えられ、ku-su は第二音節の母音の交代を経た形である。i > u の交替については不明であるが、河野六郎(1945)は、kusi を  $\sqrt{\text{kus-}}$  の主格形であるとして、その他の曲用形が kusu- という形を取ることから、 $/u/$  を取る形が多いために単独形としても  $/u/$  を取る形、即ち kusu が用いられるようになったと考えている。つまり、ku-su はこの kusu の第二音節が円唇化したことで生じたと考えられる。また、ku-sun は ku-su に接尾辞 -un が付いた形と考えられる。ku-son は ku-sun の第二音節で  $/u/ > /o/$  の交替が起こったものと考えることが出来るが、この語形が現れる地点の周辺が全て ku-su 地域であることは疑問に残る。また、ki-sun, kui-sun は共に kui-juŋ と同じ地域に分布しているため、混交によるものと考えられる。

(1) ku-juŋ 系のうち、(1a)に属する語形は ku-si 系から  $/s/ > /z/$  の弱化を経て、これが消滅した形である。文献から、半母音  $/j/$  は  $/z/$  が消滅する前に添加されたと分かる。即ち、ku-su

> \*ku-zu > ku-zju > ku-ju という変化を想定できる。ただし、小倉進平のデータには ku-ju という語形は存在せず、最も近い語形は ku-jun̄j であるが、これは ku-ju に接尾辞 -un̄j が付いたものであると考えられる。河野六郎(1945)はこの ku-jun̄j という語形が ku-sun̄j からの変化であるとしているが、文献上に ku-zun̄j ないし ku-zjun̄j という語形は現れないため、ku-jun̄j の接尾辞 -un̄j は z の弱化の後に結合した可能性も考えられる。kui-jun̄j, kui-jɔ̄n̄j は第一音節が /j/ の影響で Umlaut した形である。kui-jɔ̄n̄j という語形については、河野六郎(1945)の説を参考に、√kus- に接尾辞 -ɔ̄n̄j の結合した \*ku-sɔ̄n̄j から、\*ku-zɔ̄n̄j > ku-jɔ̄n̄j > kui-jɔ̄n̄j というような変化を想定できる。

(1b)に属する語形のうち、kui-in̄j と kuin̄j については、kweŋ から変化したという説がある(河野六郎 1945)が、/e/ > /i/ の変化は /u/ の半母音化以前の変化ではないかと思われる。そうすると、\*ku-eŋ > ku-in̄j が推定でき、ここから Umlaut を経て kui-in̄j となり、さらに /i/ の脱落を経ることで kuin̄j という語形になったと考えられる。kuŋ について、河野六郎(1945)では、ku-sun̄j > \*ku-zun̄j > \*ku-un̄j > kuŋ という変化を経たと述べているが、文献上に現れる ku-zju という語形を考慮すると、ku-jun̄j から半母音 /j/ の脱落を経て成立した語形であると想定できる。kui は ku-si > ku-zi > kui という変化を経たものであり、kuŋ-i は kui に hiatus 回避の目的で /ŋ/ が添加された形と考えられる。kui-i については、後述する kweŋ-i の変遷過程で現れる \*ku-eŋ-i の /e/ が狭母音化した kwiŋ-i から /ŋ/ の脱落を経たものであると思われる。

(1c)に属する語形のうち、kwɔ̄n̄j という語形については、前述の \*ku-sɔ̄n̄j から \*ku-zɔ̄n̄j > \*ku-ɔ̄n̄j > kwɔ̄n̄j という変化を経たものだと考えられる。kweŋ は kwɔ̄n̄j から /ɔ/ が前舌母音化したものと考えられる。さらに /ŋ/ が脱落したものが kwe である。kweŋ-i という語形について、河野六郎(1945: 66, 69)では、kuseŋi という語形を√kus-+eŋi と分析した上で、kweŋi という語形は接尾辞 -eŋi が結合してから /s/ が /z/ を経て消失し、さらに /u/ が半母音化して生じた語形であると考えている。しかし、この接尾辞 -eŋi は元々-ɔ̄n̄j だったものが前舌母音化したものと考えられる。すると、√kus- に -eŋi が直接結合したとは言い切れないだろう。即ち、kweŋ-i という語形については、\*ku-sɔ̄n̄j-i > \*ku-seŋ-i > \*ku-zeŋ-i > \*ku-eŋ-i > kweŋ-i > kweŋ-i という変化が想定される。

(3) -tʰoŋ 系について、それぞれの語源は sɔ̄-tʰoŋ, swe-tʰoŋ が「牛の飼桶」、pap-tʰoŋ が「飯桶」、ʃuk-tʰoŋ が「粥桶」と紹介されている。前述の通り、その中でも ʃuk-tʰoŋ が慶尚北道に集中的に分布しているが、これは語源を同じくする(1),(2)が全国的に分布している中で特徴的である。

#### 参考文献

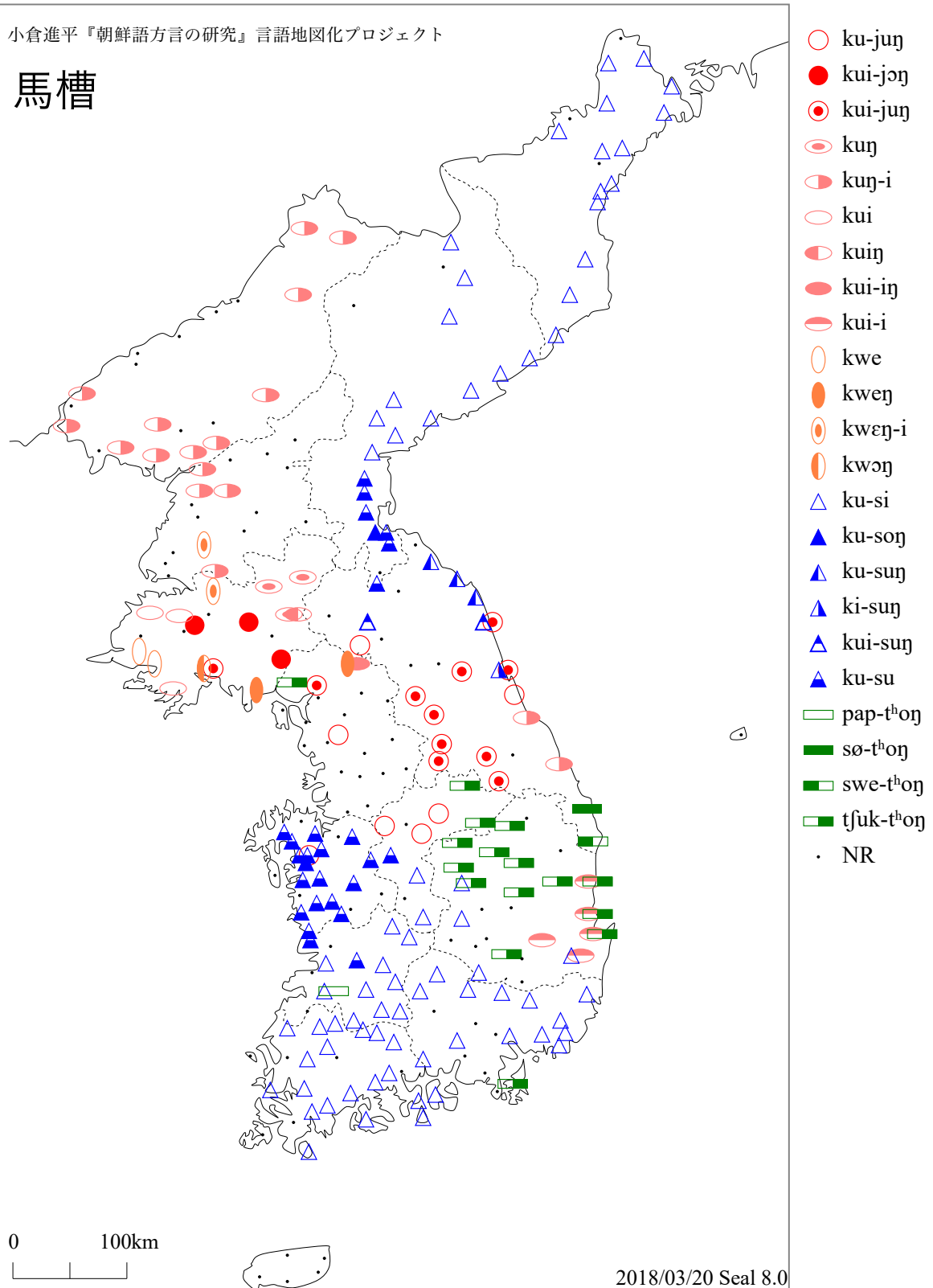
- 河野六郎(1945)『朝鮮方言学試攷—缺語考』京城: 東都書籍京城支店。  
 国立国語研究院(1999)『標準国語大辞典』ソウル: 斗山東亜。  
 송상조(2007)『제주말 큰사전』서울: 한국문화사。

韓國精神文化研究院語文研究室編(1995) 『韓國方言資料集 1: 京畿道編』城南: 韓國精神文化研究院.

玄平孝(1985) 『濟州島方言研究 資料編』ソウル: 太學社.

현평효, 강영봉(2014) 『표준어로 찾아보는 제주어 사전』제주: 도서출판 각.

# 馬槽



# 俎

福井 玲

## 1 はじめに

韓国の標準語は to-ma (도마) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「器具」に「俎」という項目名で 10 種記録されている (上: 234-235)。

これらは (1) to-ma 系, (2) k<sup>h</sup>al-p<sup>h</sup>an 系, (3) k<sup>h</sup>al t<sup>h</sup>o-mak 系の 3 つのいずれかに分類できる。このうち, (3) の k<sup>h</sup>al t<sup>h</sup>o-mak 系は(1)と(2)の混淆した語形と考えられる。

### (1) to-ma 系

(1a) to-ma / to-mɛ / tom-bɛ, (1b) to-mak / to-mɛ-gi / tom-bɛ-gi / t<sup>h</sup>o-mɛ-gi

### (2) k<sup>h</sup>al-p<sup>h</sup>an 系

### (3) k<sup>h</sup>al t<sup>h</sup>o-mak 系

k<sup>h</sup>al t<sup>h</sup>o-mak / k<sup>h</sup>al-t<sup>h</sup>o-mɛ-gi

(1b)は(1a)の to-ma 系語形の末尾に -k が付き, 場合によってはさらにそのあとに接尾辞の -i が付いた語形である。(2)は(1)とはまったく異なる語形であり, (3)は k<sup>h</sup>al 「刀」に(1b)の to-mak 系が結合した語形である。

## 2 地理的分布

(1)の to-ma 系のうち, (1a)の to-ma は京畿道, 忠清南道を中心とし, わずかに全羅道にも見られる。次に同じく(1a)の to-mɛ は最も分布範囲が広く, 咸鏡南道と慶尚道と全羅道のほぼ全域, そして忠清北道に見られる。(1a) の tom-bɛ は済州島にだけ見られる。

(1b)の to-mak は京畿道の北部に見られ, それにさらに -i の付いた語形は平安道, 咸鏡南道南部, 黄海道などに見られる。このうち, 黄海道北部と平安南道南部および江原道には語頭が有気音化した t<sup>h</sup>o-mɛ-gi が見られる。

(2)の k<sup>h</sup>al-p<sup>h</sup>an 系はあまり多くないが, 忠清南道南部に 1 地点, 黄海道に 1 地点見られる。

(3)の k<sup>h</sup>al-t<sup>h</sup>o-mak 系は, 黄海道の中西部に多く分布し, また, 忠清南道にも 1 地点見られる。

## 3 文献上の記録

15 世紀以降, 도마 (LH)の形のみが見られる。

도마애 올이니 누른 柑子 | 므겍고 누른 柑子 | 므겍고 <1481 杜詩諺解 10: 38a>  
「登俎黄柑重」



도마에서 디니 <1481 杜詩諺解 16: 61a>

「落礎」(礎=きぬた(砧) cf. 砧板 zhēnbǎn: 漢語南部方言で「まな板」を指す!)

机 도마 궤 <1527 訓蒙字會 中 6a>

几 도마 궤 <1576 新增類合 上 24b>

切板 도마 按板 도마 <1690 諺語類解 下 15a>

他の語形は文献上には見えない。なお, 도마と語源的に繋がりがあると考えられる「切れ端」の意味の도막と토막は 18 世紀末の文献から散見されるようになる。

木頭銼 토막 <1748 同文類解 下 44b>

木頭墩 나모토막 <1790 蒙語類解補 34a>

디렁이를 무엇으로 쓴어 그 두 도막을 축축히 싸 속에 못어 <1896 獨立新聞>

#### 4 考察

語源については도막, 토막との関連が考えられる。金敏洙編 (1997: 258) 『우리말語源辞典』では, 次のように述べている。

語源: √도막[片]. 変化: 도마 (杜詩諺解 16:60-61)> 도마. ※‘도마’はある物を刃物で切れ端にしたり, または‘도마’自体が木の切れ端で作られるのでこのような名称ができたと考えられる。どちらが正しいにしても‘도마’の語源は‘도막’と関連づけられるものと思われる。民間語源: 刀版(東言攷略 44: 俎を‘도마’というのは刀版であって, 刀で肉を切る版である.) (筆者訳)

なお, ついでながら同辞典で도마뱀「蜥蜴」についても触れられている。

「蜥蜴」‘도마뱀’は尻尾の部分が切れ切れになるのでこのような名称が付けられたものと考えられる。(筆者訳)

本項目で現れるさまざまな語形には, つぎのような音変化と接辞の付加が起きたと考えられる。

ウムラウト \*to-ma-gi > to-mɛ-gi

接尾辞の付加+単母音化 to-ma > to-ma-i > to-me

---

<sup>1</sup> 2014 年度の「韓国朝鮮語語彙史」の授業での朱林彬氏の指摘による。同氏によると, 東北部では「菜板」, 北京官話, 中原官話では「案板」が使われ, 西南官話, 吳語, 湘語, 閩南語で「砧板」が使われるという。

激音化 to-mak > t<sup>h</sup>omak (> t<sup>h</sup>o-ma-gi > t<sup>h</sup>o-mɛ-gi)

語中鼻音の破裂音付加 to-mɛ > tom-bɛ, to-mɛ-gi > tom-bɛ-gi

これらのうち, k<sup>h</sup>al (칼) 「刃物」を伴った語形では, 必ず激音化したものが現れるのは, k<sup>h</sup>al の語頭子音による遠隔同化が考えられる。またそれが基になって, k<sup>h</sup>al が付かない単独の形にまで激音を含むものが現れるようになったのであろう。

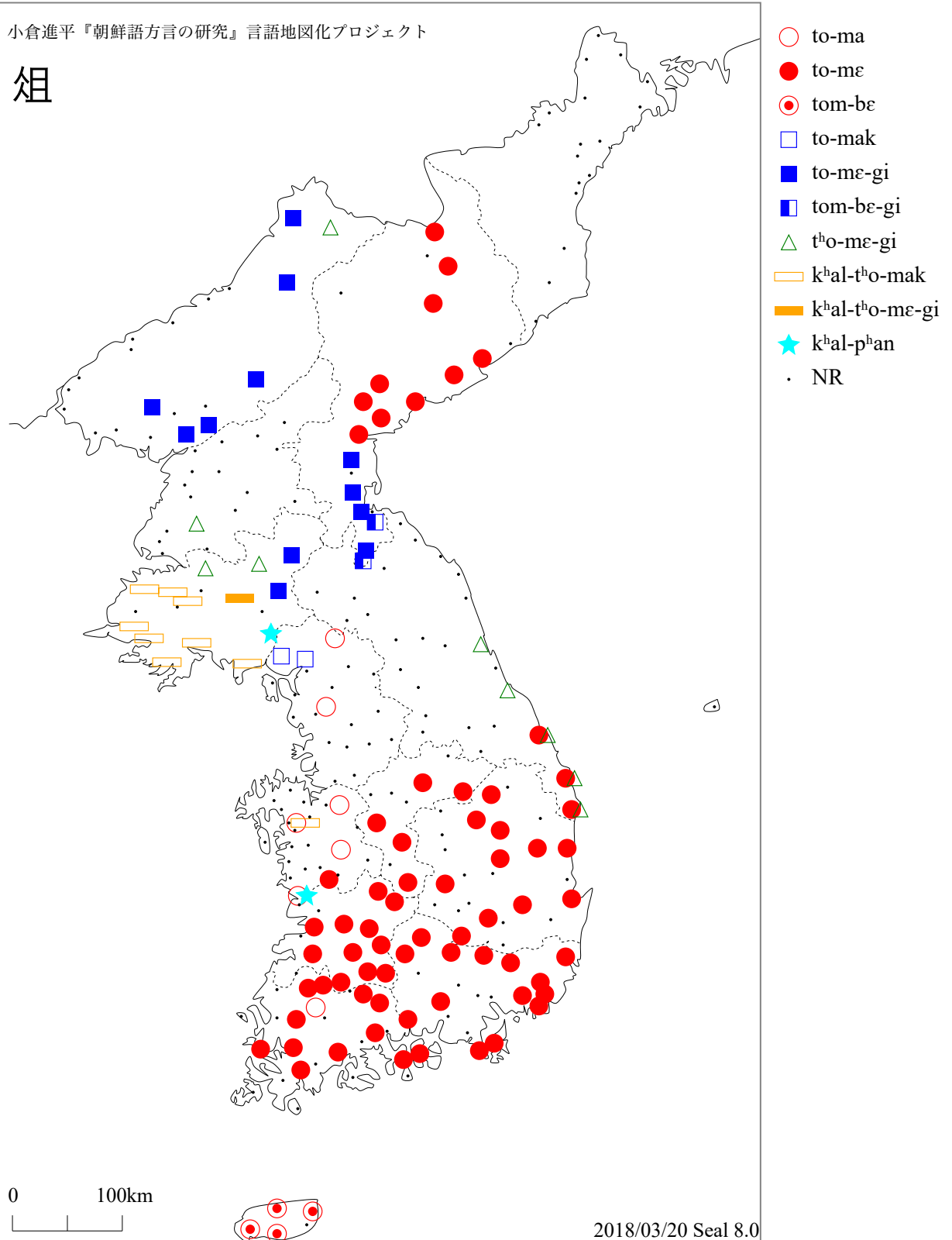
また, 濟州島と咸鏡南道で見られる -m->-mb- という変化は, 一般音声学的にはあり得る変化であるが, 韓国語の諸方言に見られる音変化の類型としては他に類似した例はさほど見られない。

最後に, to-ma を含まない(2) の k<sup>h</sup>al-p<sup>h</sup>an という語形は漢語の「菜板」「案板」「砧板」などといった語形の間接的な影響でできたものかもしれない。

#### 参考文献

金敏洙編 (1997) 『우리말語源辞典』ソウル：太学社.

# 俎



# 盥

福井 玲

## 1 はじめに

韓国の標準語は  $t\epsilon$ -ja(대야) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「器具」に「盥」という項目名で19種記録されている(上: 236–237)。項目名の直後に「真鍮・鉄・ブリキ製などの」という注が記されている。

語形は大きく  $t\epsilon$ -ja 系と so-rɛ 系の2つに分かれる。 $t\epsilon$ -ja 系はさらに、1音節の  $t\epsilon$  系, 2音節の  $t\epsilon$ -ja 系, 2音節で末尾に鼻子音を伴う  $t\epsilon$ -jaŋ 系, 2音節で第一音節末に鼻子音が入る  $t\epsilon\eta$ -ɛ 系の4つに分けられる。

### (1) $t\epsilon$ -ja 系

(1a)  $t\epsilon$  /  ${}^?t\epsilon$

(1b)  $t\epsilon$ -ja /  ${}^?t\epsilon$ -ja /  $t\epsilon$ -jɔ /  ${}^?t\epsilon$ -jɔ /  $t\epsilon$ -wa /  ${}^?t\epsilon$ -wa /  $t\epsilon$ -u /  ${}^?t\epsilon$ -u

(1c)  $t\epsilon$ -jaŋ /  $t\epsilon$ -jɔŋ /  $t\epsilon$ -waŋ

(1d)  $t\epsilon\eta$ -ɛ /  ${}^?t\epsilon\eta$ -ɛ /  $t\epsilon\eta$ -i,

### (2) so-rɛ 系

so-rɛ / so-rɛ-i / so-rɛ-ŋi

## 2 その他の語形

崔鶴根(1978)には以上の他に,  $\text{낯때}$ ,  $\text{다라}$ ,  $\text{다래}$ ,  $\text{대애}$ ,  $\text{대이}$ ,  $\text{대하}$ ,  $\text{수대}$ ,  $\text{양푸이}$ などの語形が見られる。

## 3 地理的分布

(1)の  $t\epsilon$ -ja 系の語形は半島全体に分布する。その中で(1a)の1音節の語形は主に慶尚道と平安道に分布するが, 江原道, 全羅南道, 京畿道の海岸沿いにも見られる。(1b)の形は京畿道, 忠清道を中心とし, 部分的に江原道, 全羅道, 慶尚道にも見られる。その中でも, 第2音節が u のものは, 主に全羅南道に分布するが, 黄海道にも1地点見られる。またこのグループには, 第2音節の母音が a のものと ɔ のものが存在するが, 後者は京畿道北部と忠清北道南部に1地点見られる。(1c)の末尾に鼻音が付いた形は全羅北道と隣接する全羅南道北部に分布する。(1d)の語中に鼻音が入った形は, 咸鏡南北道と, それに隣接する平安北道に見られる。以上のような変種は総じて各地域ごとに比較的まとまって分布し, 地域的な特徴が現れやすい項目であると言える。

(2)の so-rɛ 系は, 咸鏡道, 平安道, 黄海道という北部地域にのみ見られる。しかし, 咸鏡道の多くを占める so-rɛ 専用地域を除く, 平安道と黄海道では  $t\epsilon$ -ja 系の語形が併用されてい

る地点が多い。

なお、『標準国語大辞典』では so-re は「te-ja の方言（済州，咸鏡）」としている。しかし，咸鏡道にはこの語形が見られるが，小倉進平のデータでは済州島には te-ja 系の te-jɔŋ しか見られない。また，玄平孝（1962, 1985）にも済州島でこの形は見られないようである。

#### 4 文献上の記録

15 世紀には，다야(LH)の形のみが見られ，16 世紀以降には대야と表記される語形が見られるようになる。但し 19 世紀でも다야の形も残っている。

다야 爲匣 <1446 訓民正音解例本 58>

盥 다야 우 <1527 訓蒙字会 中 10a>

匣 대야 차 匣 귀대야 이 <1527 訓蒙字会 中 7a>

다야 盥鑰器 <1880 韓仏字典 448>

なお，母音ɪが二重母音だった中世語では다야と대야の違いは，2つの音節の間のjを表記上どのように捉えるかという程度の違いで，さほど大きな発音上の違いがあったわけではないものと思われる。

一方，so-re 系については，中世語では소라(HH)の形が見られる。

구리 소라에 프레 글혀 시그며 (銅盆中熱水) <1466 救急方諺解 下 91a>

아기를 소라 프레 노하든 (着孩兒盆子水裏放着) <1517 翻譯朴通事 56a>

기름 마뜨기 다몬 소라를 마뜨쳐 널오되 <1569 七大万法 22a>

この소라는漢文の「盆」にあてられることが多く，その点で「盥」，「匣」などにあてられる다야とは意味的に違いがあるように思われる。

#### 5 考察

『標準国語大辞典』には대야の項目の中で，上にも引用した『訓民正音解例本』の用例をあげて，漢語の「大匣」から来たとしている。しかし「匣」の音(yí, 韓이, 日イ)はja(야)とはかなり異なるので，この説の妥当性は筆者には分からない。

金敏洙編(1997: 243)では，語源について不明としながらも「‘대야’の語源はしばしば日本語の tarai(盥)にあてることがあるが，‘대야’は15世紀の文献にすでに現れることから見て，むしろ日本で我々の国語を借用したのではないかと考えられる」と述べているが，日本語のタライ(盥)は古くはタラヒで，‘대야’以上に古くから用いられており，語源も「手(夕)洗ヒ」であることが明らかなので，この説は成り立たない。

#### 参考文献

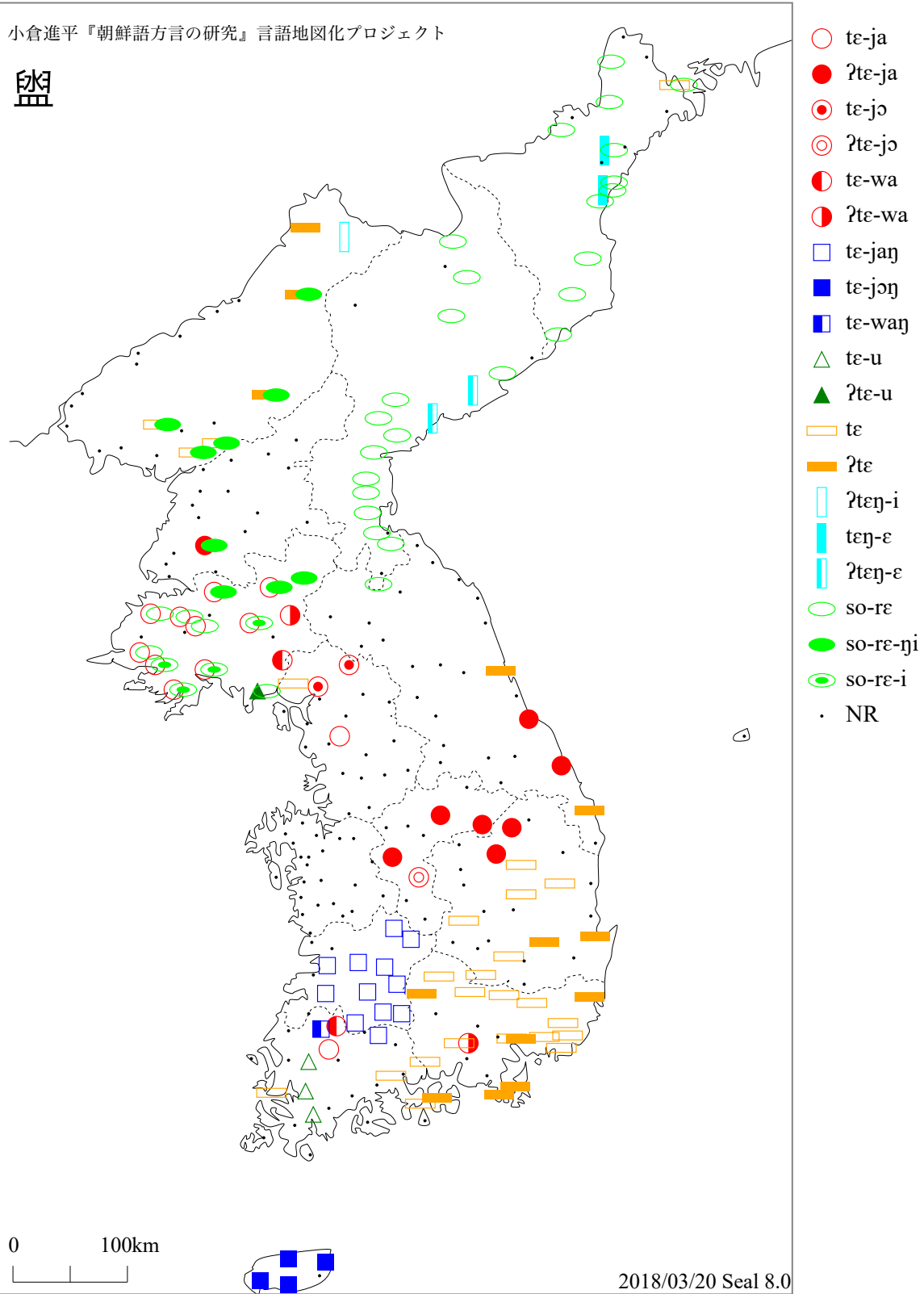
金敏洙編 (1997) 『우리말語源辞典』 ソウル：太学社.

玄平孝 (1962, 修正版 1985) 『济州島方言研究』(資料篇・論考篇) ソウル：二友出版社.

国立国語研究院 (1999) 『標準国語大辞典』 ソウル：斗山東亜.

崔鶴根 (1978) 『韓国方言辞典』 ソウル：玄文社.

水



- te-ja
- ʔte-ja
- ◉ te-jo
- ◉ ʔte-jo
- ◐ te-wa
- ◐ ʔte-wa
- te-jaj
- te-joj
- te-waj
- △ te-u
- ▲ ʔte-u
- ▭ te
- ▭ ʔte
- ▭ ʔteŋ-i
- ▭ teŋ-ε
- ▭ ʔteŋ-ε
- so-re
- so-re-ŋi
- ◉ so-re-i
- NR

# 鏡

福井玲

## 1 はじめに

韓国の標準語は *ko-ul* (거울) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「器具」に「鏡」という項目名で 21 種記録されており(上: 230–231), 語形の種類は多いが、これらは (1) *ko-ul* 系, (2) *sek-kjɔŋ* 系, (3) *men-gjɔŋ* 系の 3 つのいずれかに分類できる。このうち, (1) の *ko-ul* 系は中世語の段階から見られる固有語であり, (2) の *sek-kjɔŋ* 系と (3) の *men-gjɔŋ* 系はそれぞれ「石鏡」, 「面鏡」に基づく漢語に由来するものと考えられる。

### (1) *ko-ul* 系

(1a) *ko-ul* / *ke-ul* / *ki-ul*, (1b) *kjo-ul*, (1c) *keŋ-ul* / *kjɔŋ-ul*

### (2) *sek-kjɔŋ* 系

(2a) *sek-kjɔŋ* / *sek-kɔŋ* / *sek-keŋ* / *sek-kaŋ* / *sek-kaŋ* / *sek-kɔŋ*, (2b) *sik-kjɔŋ* / *sik-kɔŋ*

### (3) *men-gjɔŋ* 系

(3a) *men-gjɔŋ* / *men-gɔŋ* / *mɛn-gɔŋ* / *men-geŋ* / *meŋ-gjɔŋ*, (3b) *min-gjɔŋ* / *min-gɔŋ*

(1) の *ko-ul* 系はさらに, (1a) のような第 1 音節の母音の違いによる変種, (1b) のように第 1 音節の母音の前に半母音 *j* が加わったもの, (1c) のように母音間に鼻音 *ŋ* が加わったものの 3 種類に分けることができる。

(2) の *sek-kjɔŋ* 系は, 第 1 音節の母音が *e* (あるいは  $\epsilon$ ) であるか *i* であるかのいずれかによって, (2a), (2b) の 2 つに分けられる。(2a) の第 2 音節の母音は *jo/o/e/a/o* と多様である。なお, 第 1 音節の母音が *e* であるか  $\epsilon$  であるかについては,  $\epsilon$  と表記された地域は実は *e/e* の区別が存在しない地域である可能性が高いので, 重要視しなかった。

(3) の *men-gjɔŋ* 系も同様に第 1 音節の母音が *e* (あるいは  $\epsilon$ ) であるか *i* であるかのいずれかによって, (3a), (3b) の 2 つに分けた。第 2 音節の母音は *jo/o/e* と 3 種類が見られるが, (2) の場合のように *a/o* は現れない。

## 2 その他の語形

地図からわかるように, この項目では平安道の全域と咸鏡北道が調査されていない。平安道に関しては, 『平北方言辞典』(1981) によると *거울*, *쇠경*, *세경*(색경)などの語形が見られる。咸鏡北道に関しては, 『咸北方言辞典』(1986)によると *거울*, *계울*, *면경*, *색경*, *세경*, *셋경*, *색경*などの語形が見られる。

## 3 地理的分布

(1) の *ko-ul* 系の語形は咸鏡道から済州島に至るまで全国的に分布している。(2)の *sek-*



kjɔŋ 系も比較的広い範囲に分布しており、特に黄海道は全域この語形になっている。これに対して(3)の men-gjɔŋ 系の語形は慶尚道を中心とする南部地域に限定されている。

なお、地点によってはこれらの語形が併用されているおり、中には濟州島の2地点のように3種類がすべて併用されている地点もある。そのような場合にはおそらく意味上の使い分けがあったのかもしれない。

#### 4 文献上の記録

鏡を表わす3種類の語形の中で最も古いものは ko-ul 系で、中世語の早い時期には 거우루 という語形で現れる。

그 각시 그 거우를 아스니 그 새 아니 우니라 <1447 積譜詳節 24:20b>

鏡은 거우워라 <1459 月印積譜 4:13b>

그 누는 두루 보디 오직 거우루 곧하야 各別흔 곁히요미 업거든 <1461 楞嚴經諺解 3:100b>

この他、中世語では15世紀末から16世紀にかけて第3音節の母音が変化した 거우로 という形も見られる。

늘거 브료미란 불근 거우로애 아노니 <1481 杜詩諺解 21:41b>

鏡 거우로 경 鑑 거우로 감 <1527 訓蒙字會 中 7b>

また、15世紀末から上のような語形と並行して第3音節の母音を落とした 거울 という形も散わずかに見られるようになる。

蜀八 넘그미 이 거우를 가져셔 주그니를 보내야 빈 피해 두니라 <1481 杜詩諺解 3:72b>

거울 불 사르미 모로매 제 낙치 고오며 <1522 法集別行録 32b>

(2) の sek-kjɔŋ 系は19世紀から見られる。ハングル資料の中で最も古い用例は19世紀初めに作られたと推定される『広財物譜』と思われ、『예수聖教全書』(1882)、『韓仏字典』(1880)、『士民必知』(1889)、『韓英字典』(1897)など各種の文献に見られる。

石鏡 석경 眼鏡 안경 <18--広財物譜: 器用 2b>

석경 石鏡 <1880 韓仏字典 397>

뎡고 횡치 못하논 자 사름이 석경에 낫출 봄 갓트니 <1887 예수聖教全書: ヤコブ書 1:23>

最後の例は、新約聖書の日本語訳では「御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています」(新共同訳)となっている。

(3) の men-gjɔŋ 系も19世紀から見られるが、sek-kjɔŋ 系よりも遅く、19世紀末の『韓仏

字典』(1880), 『聖教撮要』(1882), 『国漢會話』(1895), 『韓英字典』(1897)などから見られるようになる。

면경 面鏡 <1880 韓僂字典 233>

또 면병의 형상을 비록 눈화 크고 적은 일씩 조각을 만든다도 성태는 만만코 능히 눈호지 못하니 미 조각에 다 오주의 전신이 계신지라 대략 면경에 비컨대 온 거울을 빚최는 자 | 거울 속에 온전한 듯출 보고 만일 거울을 가져 눈화 대쇼 빅 조각을 만든다도 곳 빅 조각 속에 각각 온전한 듯치 되느니 <1882 聖教撮要 32b>

この2つ目の用例は、거울と면경がともに使われている点で興味深い。この文はキリスト教の聖体拝領/聖餐式で使われるパン(면병麵餅)に関する説明である。「また、麵餅の形をたとえ分けて大小百個の切れ端にしても、聖体は満ち満ちていて分けることはできず、それぞれの切れ端にすべて吾主の全身がいらっしゃるので、おおよそ「面鏡」に例えるなら、鏡全体に映る者は鏡の中に完全な顔を見て、もし鏡を分けて大小百個の破片にしても、各破片の中のそれぞれに完全な顔が見えるので……」と訳せるが、ここでは最初に「面鏡」に例えながら、具体的にものが映っている部分を指すときには거울を使っているように思われる。

## 5 考察

これら3種類の語形の中で文献上もっとも古くから見られるのは(1)の ko-ul 系である。地理的な分布の上では、全国的に分布しているので、この語形が古くから全域で使われてきたのは確かであろう。あとの2つの語形、すなわち「石鏡」と「面鏡」に対応する語形はそれより後の時代に広まったものと考えられる。この2つのうちでは、「石鏡」の方がより広く分布しているので、こちらの方がより古く、「面鏡」はさらに後の時代に南部地域で発生した語形と考えられる。一般名称としての ko-ul 系は維持しながらも、「手鏡」のように、より具体的な事物としての名称がそれと並行して用いられるようになったのかもしれない。

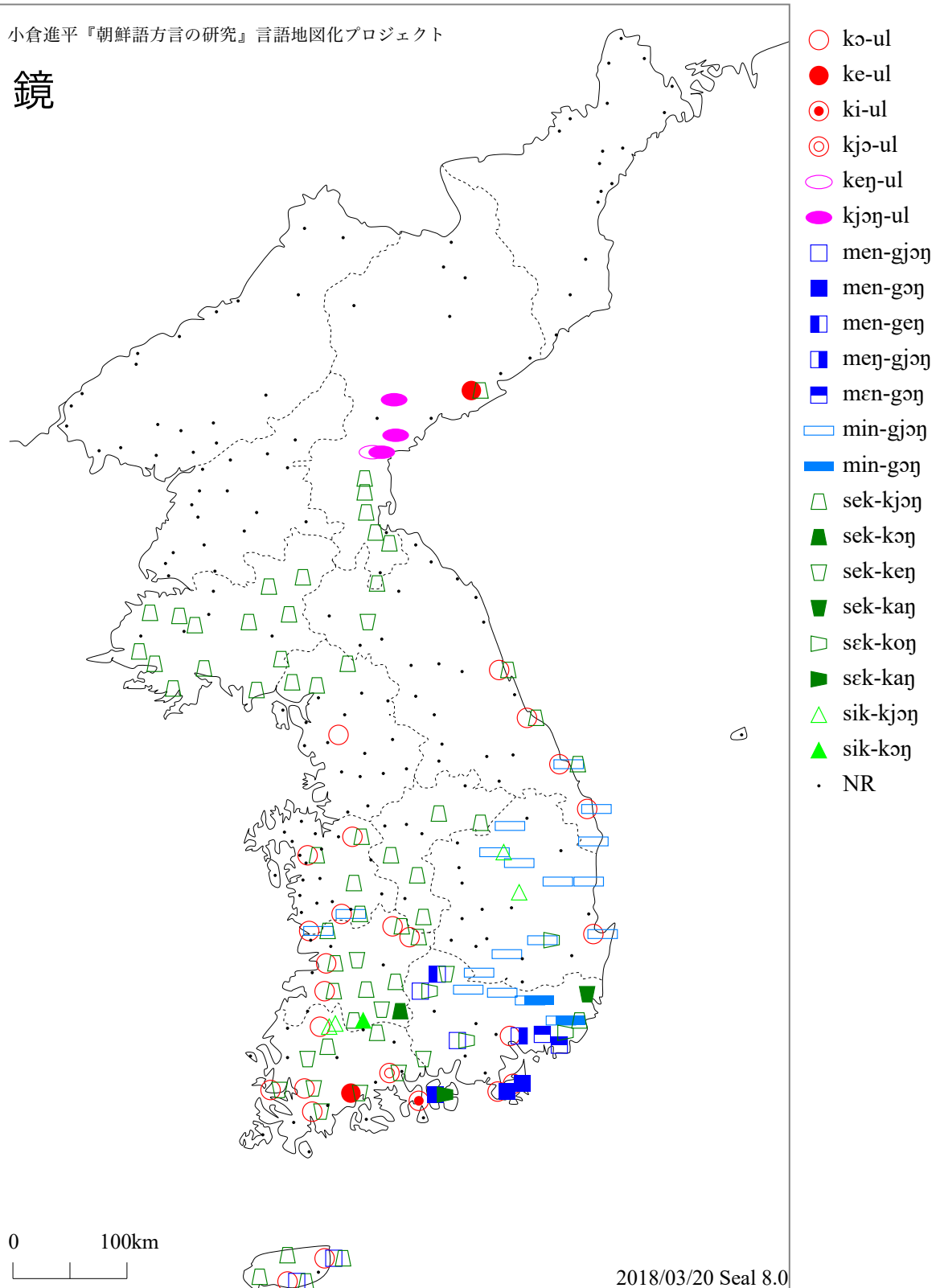
ところで「石鏡」と「面鏡」は、それぞれ本来は sok-kjɔŋ(あるいはより古くは sjɔk-kjɔŋ), mjɔŋ-kjɔŋ のはずであるが、小倉進平のデータにはこのどちらも見られず第1音節の母音が, jɔ > e と変化した語形しか見られない。

なお, ko-ul 系の語源についてはいくつか説があり, 金敏洙編(1997:55)によると, 中世語の ko-sir-, ko-u- 「逆らう, 対敵する」と関係するという説, 語形を 걸+울と分析して걸을 구리(銅)と同じ語源をもつと考える説などがあるが, 確実なことはよく分からない。

## 参考文献

- 金敏洙編(1997)『우리말語源辞典』ソウル:太学社.  
金履浹編著(1981)『平北方言辞典』韓国精神文化研究院.  
金泰均編著(1986)『咸北方言辞典』ソウル:京畿大学校出版局.

# 鏡



# 熨斗 (ひのし)

福井 玲

## 1 はじめに

韓国の標準語は ta-ri-mi (다리미) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「器具」に「熨斗」という項目名で 19 種記録されている (上: 232-233)。

これらは (1) ta-ri-mi 系, (2) ta-ri-bi 系, (3) ta-ro-ri 系の 3 つのいずれかに分類できる。

### (1) ta-ri-mi 系

ta-ri-mi / tɛ-ri-mi / tɛ-ru-mi

### (2) ta-ri-bi 系

ta-ri-bi / ta-rɛ-bi / tɛ-ri-bi / tɛ-rɛ-bi / te-ru-bi / tal-bi

### (3) ta-ro-ri 系

(3a) ta-ro-ri / tɛ-ru-ri / ta-ri-ul

(3b) tɛ-ri-wɔ-ni / tɛ-rjɔ-ni / tɛ-rjɔn

(3c) ta-ri-we / ta-ru-we / ta-re-i / tɛ-ru

(1) の ta-ri-mi 系は、語末音節に -mi を含むもの、(2) は語末音節に -bi を含むものである。(3) はやや複雑であるが、(3a) は語末音節に -ri あるいは -l を含むもの、(3b) は -ni あるいは -n を含むもので、(3c) はそのいずれも含まないものである。(3b) に含まれる n はおそらく (3a) に含まれる r が転じたものと思われる。

## 2 その他の語形

小倉進平のデータには平安道のデータが抜けているが、金履浹編著 (1981: 165) 『平北方言辞典』によると平安北道では, 대리미, 대림(中部以西地域) という形が使われる。一方, 咸鏡北道については, 金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』に主に (3) に挙げた語形と類似の語形が多く使われている。

## 3 地理的分布

(1) の ta-ri-mi 系は, 黄海道, 京畿道, 忠清道, 江原道, 全羅北道, 咸鏡南道の南部地域などに幅広く分布する。2 で述べたように, 地図で空白となっている平安道も ta-ri-mi 系の地域と考えられる。(2) の ta-ri-bi 系は慶尚道を中心として, その周辺地域 (全羅道, 江原道) にも及んでいるが, 明らかに他の (1) に比べると分布領域は限定的である。(3) の各語形は咸鏡道, 濟州島, 全羅南道という, 半島の南北端に主に分布し, その他に黄海道と京畿道の境界付近にも若干分布する。

#### 4 文献上の記録

ハングル資料以前の中世語資料としては『郷薬救急方』に「多里甫伊, 多里甫里」という語形が見られる。ハングル資料の初期には다리우리という形が使われていた。

熨斗 多里甫伊 多里甫里 <13世紀 郷薬救急方>

썸 나디 아니커든 다리우리에 불 다마 두 녀 넵을 띄야 덩게 햅야

<1489 救急簡簡易方 1:58a>

熨 다리우리 <1527 訓蒙字會中 7b>

17世紀以降は, 다리우리の他に, 다리오리という形が現れる。

熨斗 다리오리 火斗 다리오리 運斗 다리오리 <1690 訳語類解下 15b>

現代語の ta-ri-mi 系や ta-ri-bi 系の語形は 19世紀末になるまで見られない。

다리미 불에 담비불 붓치면 무안 보느니라 <1898 協成會會報 3>

なお, 関連語として, 動詞다리- (アイロンをかける, 火のしをあてる) は中世語においても다리-の形で使われていた。

가힌 디를 다려 푸케 햅야 <1481 杜詩諺解 25: 50a>

#### 5 考察

咸鏡道や濟州島, 全羅南道に見られる(3)の ta-ro-ri 形の語形は, ハングル資料に見られると다리우리, 다리오리という形の名残と考えられる。

その一方で, これらの形より古い『郷薬救急方』の「多里甫伊, 多里甫里」という語形からは, もともと ta-ri- のあとに両唇音を含む語形が含まれていたことが想像できる。その点を考慮に入れると主に慶尚道に見られる(2)の ta-ri-bi 系の語形は次のような変化の結果生じたものかもしれない。

ta-ri-bu-ri > ta-ri-bui > ta-ri-bi

中世語の다리우리という語形は ta-ri-bu-ri という語形の両唇音が(両唇摩擦音を経て)脱落した形と推定できる。

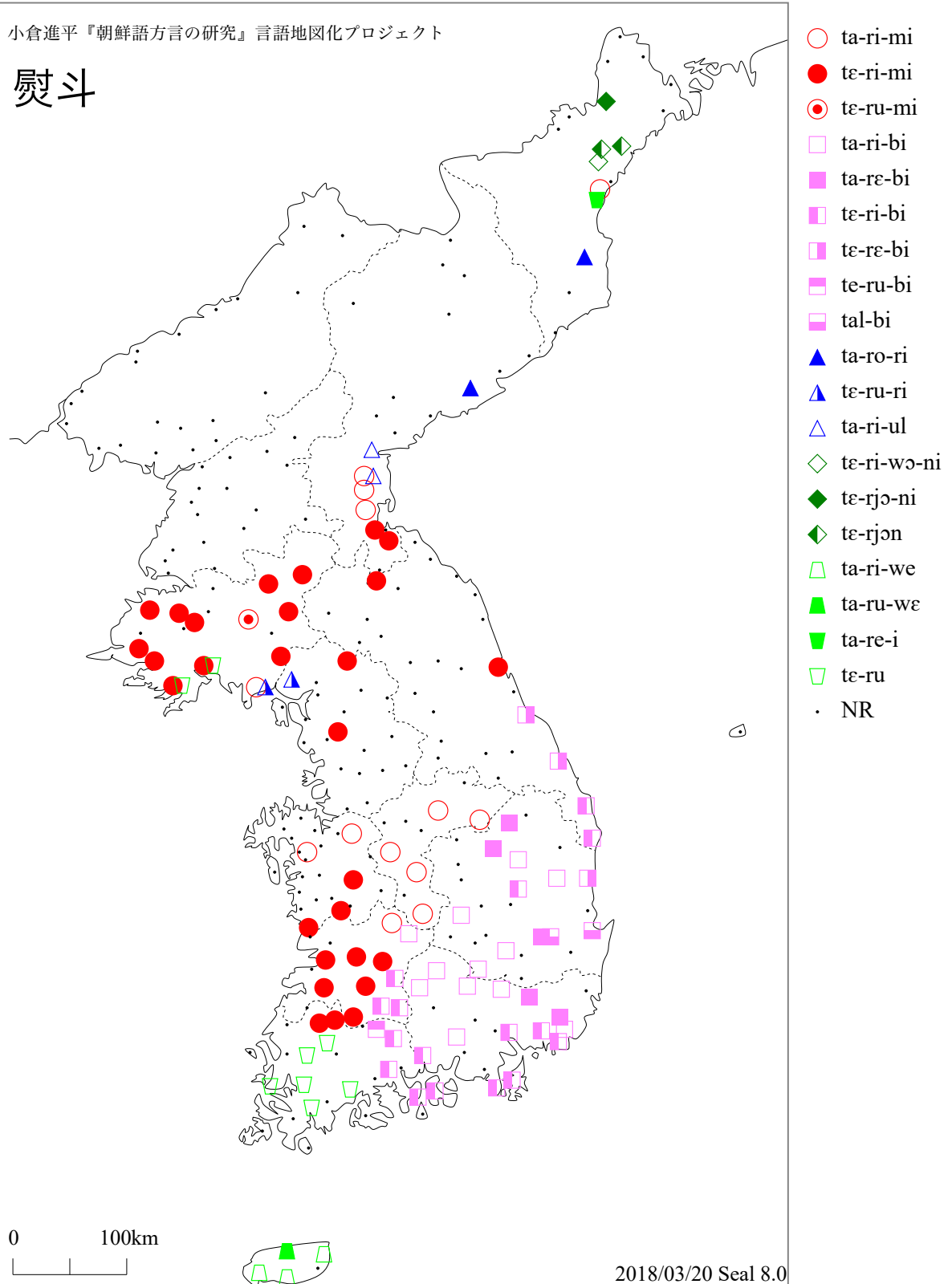
残された課題は, 今日の標準語にもなっている ta-ri-mi 系がどのように成立したかという

ことになるが、まず、これは地理的分布の点からは比較的半島の中央部に分布して、辺境には分布していないということを考慮に入れると、他のグループよりも新しい語形であるという可能性がある。一方、音声的に一番近い語形は(2)の ta-ri-bi 系であるが、-b->-m- という変化は韓国語では一般的に見られる音変化ではない。従って、他の要因による何らかの個別的变化を想定しなければならないが、ta-ri-bi 系の語形をモデルにしつつ、動詞 ta-ri-の名詞形(ta-rim)として再分析して新たにできた語形ではないだろうか。

#### 参考文献

- 金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』韓国精神文化研究院.  
金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.

# 熨斗



# 猫

福井玲

## 1 はじめに

韓国の標準語は ko-jaŋ-i (고양이) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「走獸」に「猫」という項目名で 39 種記録されている (上: 283–284)。

この項目は『鷄林類事』に「猫曰鬼尼」、『高麗史』に「高伊者方言猫也」と記録されていることから中世語以前の古い語形が推定できるので、多くの研究者に注目されてきた。その中で、李秉根(2004: 105–132)に「고양이(猫)의 語彙史」という詳細な先行研究があるので、そこで行なわれている分類を参考にして、これらを大きく (1) ko-neŋ-i 系, (2) ko-i 系, (3) ko-jaŋ-i 系, (4) その他の 4 つに分類し、その中をさらにいくつかの下位分類した。

### (1) ko-neŋ-i 系

(1a) ko-neŋ-i / ko-ne-gi / ʔko-ne-gi / ko-ne

(1b) ko-nje / ko-njeŋ-i

(1c) kwe-neŋ-i / kwe-neŋ-i / kwe-ne-gi / ke-ne-gi / ke-neŋ-i

(1d) ko-dʒeŋ-i / kə-de-gi / kə-de-gi / kwe-de-gi / ke-seŋ-i

### (2) ko-i 系

ko-i / kə / kui

### (3) ko-jaŋ-i 系

(3a) ko-jaŋ / ko-jaŋ-i / ko-jeŋ-i / ko-je / ko-ε / koŋ-je

(3b) kweŋ-i / koŋ-i / kweŋ-i / kwe-i / kwe / ke-eŋ-i / keŋ-i / kwaŋ-i / kwaŋ-dʒi / kui-eŋ-i / kui-eŋ-i

### (4) その他

(4a) eŋ-gu / ε-oŋ-gu

(4b) sal-tʃiŋ-i (sic)

4 つに分類する点は李秉根(2004: 121)と同じであるが、順番と名称は若干変更した。

(1)は基本的に語中の n を維持する語形である。但し、(1d)のように n 以外の子音が出てくる場合もここにまとめた。(1b)は n のあとに半母音 j を伴うものである。また、(1c)は第 1 音節の母音 o が変化を起こしているものである。

(2)の ko-i 系は、n は持たないが、接尾辞は付いていないと思われる短い形である。kui は小倉進平の転写の原則では kwi となるはずのものである。

(3)の ko-jaŋ-i 系は -aŋi のような接尾辞が付いた形である。(3b)は第 1 音節の母音 o が変化を起こしているものである。kui-eŋ-i なども小倉進平の転写の原則では kwi-eŋ-i となるはずのものである。



(4)の「その他」のうち(4a)は擬声語に由来するもの、(4b)はそれ以外であるが、(4b)の sal-tʃiŋ-i はおそらく sal-ʔtʃiŋ-i の誤植であろうと思われる。小倉進平の転写の原則によれば、もし第2音節の頭子音が平音であれば有声音で書かれるはずであり、そうになっていないのは濃音を記録しようとしたが声門閉鎖音の記号が落ちてしまったと解釈できるからである。

## 2 その他の語形

上の4つに大分類した語形のさらなる変種は多くの資料に見られるが、語彙的にまったく異なる語形としては、20世紀初頭の資料に 납이 の形も見える。

朝鮮光文会が編纂し1915年に刊行した『新字典』には「猫[묘] 捕鼠獸 괴 ○ 납이 ○ 고양이 [詩] 有一有虎 (蕭)」という記述があり、괴, 고양이 と並んで 납이 という語形が見られるが、これは小倉進平が記録していないものである。

## 3 地理的分布

(1)の ko-neŋ-i 系の語形は咸鏡道、平安北道、江原道、慶尚道、中西北道と済州島に分布する。大きくみると半島の北から、済州島に至るまで東海岸沿いを中心に分布していることが分かる。また、(1d)の n の代わりに他の子音を持つものは慶尚南道から全羅南道の海岸沿いに分布している。

次に(2)の ko-i 系は、全羅南道海岸部と、黄海道の海岸沿いと忠清南道に1地点、慶尚北道の榮州に1地点見られる。

(3)の ko-jaŋ-i 系は、平安道、咸鏡道、黄海道、京畿道、忠清道と、慶尚道と全羅道の内陸寄りの地点に多く分布している。(4)のその他の語形はいずれも慶尚南道の海岸沿いに見られる。

## 4 文献上の記録

まず、中世語のハングル資料以前の記録は冒頭でも紹介したように次の2つである。

猫曰 鬼尼 <12世紀 鷄林類事>

高伊者方言猫也 <15世紀 高麗史>

『鷄林類事』の「鬼尼」は、ko-ni のような発音を、『高麗史』の「高伊」は ko-i のような発音を表わすものと考えられている。

次に中世語では 괴(上声) という語形が最も広く見られる。

猫 괴 묘 <1527 訓蒙字会 上 10a>

近代語も全般的に中世語と同じで、19世紀後半以降から、現在の標準語と同じ 고양이 が

見える。しかし、李秉根 (2004: 113-114)で指摘されているように, 고양이소 (人前でよく見せかけること, 「猫かぶり」) の形で, すでに『訳語類解』(1690)に見えることから, 実際には고양이의形も文献上の登場時期より古くから使われていた可能性がある。

猫喫齋 고양이소 <1690 訳語類解 下 51b>

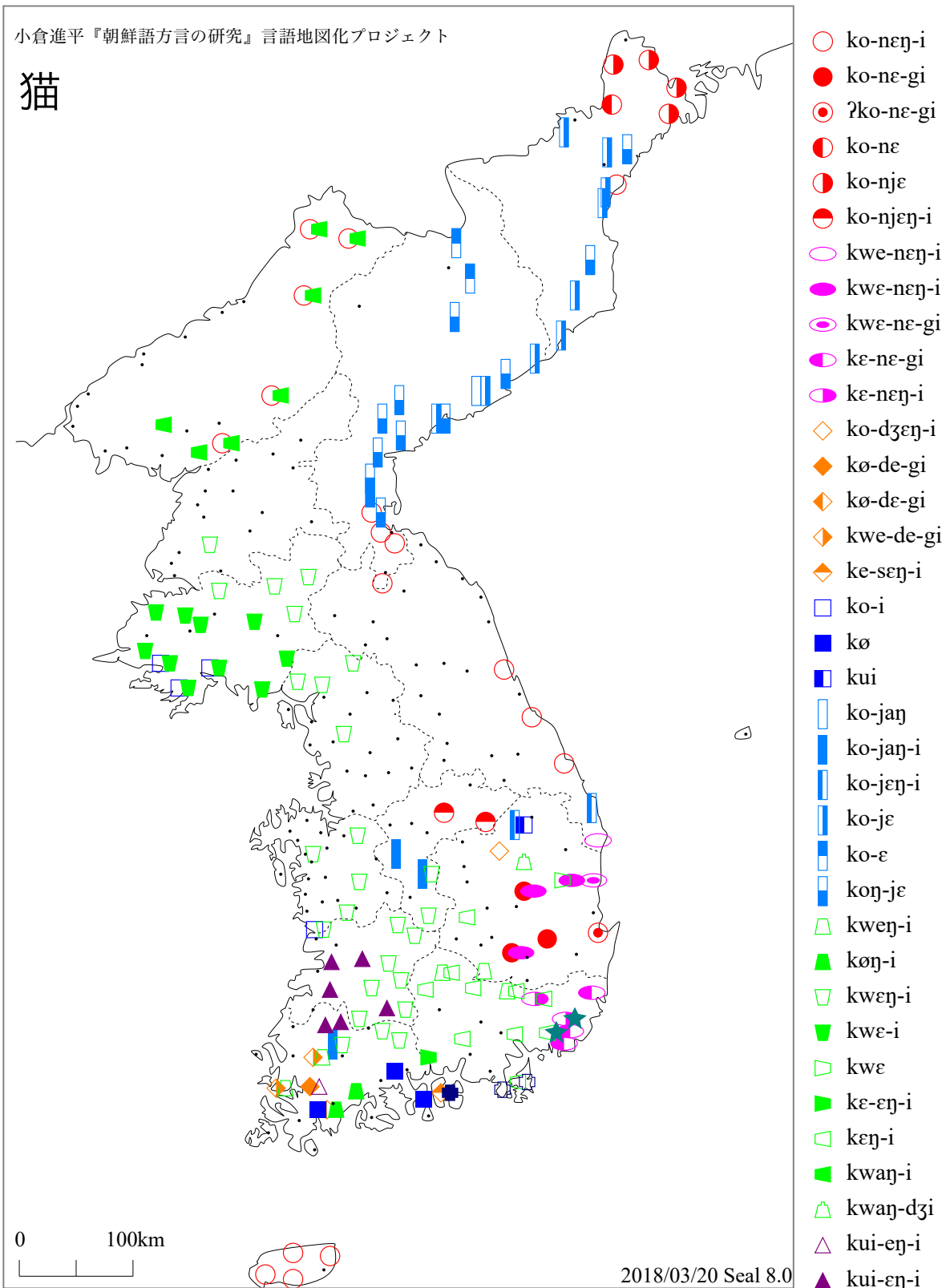
## 5 考察

李秉根 (2004)によれば, 一般的に i で終わる名詞に接尾辞 -aji が付く場合, 語幹の i が脱落するのが原則で, それによれば「猫」を表わす語形の中で, koi+ -aji という結合の場合には kojaji ではなく, kwaji となり, さらに kwəŋ-i となることが想定されるが, これらの語形は実際に(3b)の中に見られるものである。しかし, 実際には kojaji という語形も存在し, 上の『訳語類解』の例から分かるように古くからあったとすれば, もう 1 つ別の説明が必要になる, としている。そして, koi ではなく koj という二重母音の段階であれば接尾辞 -aji が付いたときに母音衝突を避けるために j が脱落しなかったという説明が可能であるとしている。なお, この説明では(1b)のように一部の地域に存在する-nj-を含んだ語形の説明に困るが (上の原則から koni+ -aji は konjaji ではなく, konaji になるはずのため), この場合にはすでにその周辺地域存在していた kojaji という語形の類推によるものとしている。

## 参考文献

- 朝鮮光文会編 (1915) 『新字典』京城: 新文館.  
李秉根 (2004) 『어휘사』ソウル: 太学社.

# 猫



- ko-nɛŋ-i
- ko-nɛ-gi
- ◉ ʔko-nɛ-gi
- ◐ ko-nɛ
- ◑ ko-njɛ
- ◒ ko-njɛŋ-i
- ◓ kwe-nɛŋ-i
- ◔ kwe-nɛŋ-i
- ◕ kwe-nɛ-gi
- ◖ kɛ-nɛ-gi
- ◗ kɛ-nɛŋ-i
- ◘ ko-dʒɛŋ-i
- ◙ kɔ-de-gi
- ◚ kɔ-de-gi
- ◛ kwe-de-gi
- ◜ ke-sɛŋ-i
- ◝ ko-i
- ◞ kɔ
- ◟ kui
- ◠ ko-jaŋ
- ◡ ko-jaŋ-i
- ◢ ko-jɛŋ-i
- ◣ ko-jɛ
- ◤ ko-ɛ
- ◥ koŋ-jɛ
- kweŋ-i
- ◧ kɔŋ-i
- ◨ kweŋ-i
- ◩ kwe-i
- ◪ kwe
- ◫ kɛ-ɛŋ-i
- ◬ kɛŋ-i
- ◭ kwanŋ-i
- ◮ kwanŋ-dʒi
- ◯ kui-ɛŋ-i
- ◰ kui-ɛŋ-i
- ◱ ɛŋ-gu
- ◲ ɛ-oŋ-gu
- ★ sal-tʃiŋ-i
- NR

# 亀

金玉雪

## 1 はじめに

韓国の標準語は ko-buk (거북)<sup>1</sup> であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「走獸」に「亀」という項目名で4種記録されている(上: 285-286)。これらの語形は、第二音節によって大きく3つのグループに分けることができる。

- (1) ko-buk / ko-bu-gi
- (2) ko-bok
- (3) ko-bok

## 2 その他の語形

『韓国言語地図』にはこの項目は含まれていないが、崔鶴根(1990), 『咸北方言辞典』や『Daum 高麗大國語辞典』には、これら以外にも多様な語形が見られる。

崔鶴根(1990)には、小倉のデータ以外にも次のような12種の語形が見られる。まず、小倉のデータと関連性がある語形から見ると、(1)の ko-buk と関係する 거북기, 거부기:, 거부이, 거북기, 거비기, (2)の ko-bok と関係する 거보기が見られる。次に、慶尚北道の倭館1地点では 거불 という独特な語形が見られる。その他に、慶尚南道には 남생이<sup>2</sup> の方言である 남새이(昌原), 나막시이(固城), 나무시이(宜寧)など3種の語形が1地点ずつ、全羅南道には 자라<sup>3</sup> とその変種である 자래가 3地点ずつ見られるが、それぞれ「イシガメ科」, 「スッポン科」のように、「カメ科」と全く違う「科」に入るため一緒に扱うのは困難である。これらを除くと、崔鶴根(1990)では、小倉のデータより語形が7種多いことになる。

また、『咸北方言辞典』には 거뵈기가, 『Daum 高麗大國語辞典』には 거뵈이(全羅北道), 거북이 と 거뵈이(全羅南道), 거뵈이(忠清北道), 거북(济州島)が見られ、合わせてさらに6種の語形が見られる。

以上、小倉のデータに見えない語形を合計すると、崔鶴根(1990)には7種、『咸北方言辞典』には1種、『Daum 高麗大國語辞典』5種で、都合13種が存在する。

## 3 地理的分布

(1)の ko-buk は平安北道と平安南道を除き、全国的に幅広く分布し、ko-bu-gi は主に平安北道、黄海道の大部分の地域と江原道の南部に分布するほか、平安南道の平壤1地点、咸

1 거북(亀): カメ科に属する爬虫類の総称である。(崔鶴根 1990)

2 남생이(石亀/イシガメ): イシガメ科の1種で、亀と似ているが小さく、背中は濃い茶色の甲羅になっており、四肢にはそれぞれ五つの足の指があるが、足の指の間に水掻きがある。[남생 <解例 用字>] (『標準国語大辞典』1999)

3 자라(鼈/スッポン): スッポン科の1種で、体の長さは30cm程度、亀と似ているが甲羅の中央線部分だけ固く、他の部分は柔らかい皮膚で覆われており、粒状の突起や隆起した列がある。[<자라<자래 <月印釈譜>] (『標準国語大辞典』1999)

鏡南道に 6 地点，京畿道の開城と漣川の 2 地点，忠清南道の洪城と天安の 2 地点で見られる。(2)の kɔ-bok は，全羅南道の潭陽 1 地点しか見られない。

(3)の kɔ-bok は，全羅北道の南原と淳昌の 2 地点，全羅南道の大部分の地域で集中的に見られる。

これらの語形の分布は崔鶴根（1990）の調査とほぼ一致しているが，崔鶴根（1990）の調査には(1)の kɔ-buk よりその変種である kɔ-bu-gi のほうが圧倒的で，済州島を除き最も幅広く全国的に分布し，(2)の kɔ-bok は全羅南道に光陽と順天の 2 地点にも見られる。

なお，小倉のデータに見えない 13 種の語形について地域別に見ると，次のようになっている。<sup>4</sup>

- (1) 咸鏡北道— 거뵈기(城津，鶴城，吉州，明川，慶源) (2) 忠清北道— 거뵈이  
(3) 全羅北道— 거북기(茂朱)，거부이(全州)，거뵈기(南原)，거뵈기(朗山); 거뵈이  
(4) 全羅南道— 거보기(順天，麗水); 거뵈이, 거뵈이  
(5) 慶尚北道— 거불(倭館) (6) 慶尚南道— 거부기: (馬山) (7) 済州島— 거북

#### 4 文献上の記録

kɔ-buk の古い語形は거북である。『李朝語辭典』や古語の電子化資料を調べると，15 世紀には거북とその曲用形である거부비(主格形)，거부뵈(属格形)，거부불(対格形)などが『積譜詳節』(1447)を始め，『楞嚴經諺解』(1461)，『法華經諺解』(1463)などの重要な文献で幅広く見られる。若干の用例を下に示す。

흔 눈 가진 거뵈과 흔 구무 가진 남기 잇느니 그 거부비 나뭇 굶글 어더사 줌디 아니  
헝건마를 <1447 積譜詳節 21:40a>

거부뵈 터리와 툃기 썬 곧거니 엇데 着디 아니헝료 <1461 楞嚴經諺解 1:74a>

나눈 먼 거뵈 곧고 부터는 뜬 나뭇 구무 곧헝시니 <1465 法華經諺解 下 3-2:95b>

고래와 거부불 타 가고져 헝는 뜬디 잇노라 <1481 杜詩諺解 8:58b>

しかし，16 世紀には数が急に減ってしまい，「거뵈불/거부불，거뵈비러라」などの語末子音の二重表記も現れる。

kɔ-buk と kɔ-bok は 17 世紀から現れ始め，18 世紀には kɔ-bok のほうが中心になって，kɔ-buk のほうが見当たらなくなるが，19 世紀からは kɔ-buk のほうが逆転しほぼ同じぐらい現れ，20 世紀に入ると，kɔ-bok はわずか 1 例が見られ，kɔ-buk のほうが安定している。いくつか代表的な用例をあげると次のようになる。

고래와 거부글 타 가고져 헝는 뜬디 잇노라 <1632 杜詩諺解 重刊本 8:58b>

烏龜 거북 <1690 諷語類解下 38a> , <1748 同文類解 下 41b>

고기 잡는 사람이 흔 흰 거북을 낙갓거늘 <1758 種徳新編 上 5a>

<sup>4</sup> 括弧の中に表す地名は，咸鏡北道は『咸鏡方言辭典』から，その他は崔鶴根（1990）から抜粋したものである。下線を引いた語形は『Daum 高麗大國語辭典』から抜粋したものである。

이 거북이 아홉 소리 가진 신물이니 <1852 太上感應篇 5:48a >  
사슴과 거북과 악어와 <1889 土民必知 106 >  
거북의 발노 그 돌을 맞춥스며 <1906 京郷宝鑑 1:337 >

また、「亀 거북 구」<192- 訓蒙排韻 19b>のように、거북の用例が一つ見られる。しかし、それ以外の語形は、文献上では見当たらない。

## 5 考察

ko-buk の語源について、金敏洙 (1997) では、「語源未詳で、「거북>거북」の変化を経たが、それは「b-b>b-k」のように異化現象の一つである」と解釈している。ほかに、民間では「거북」の段階を考慮せずに、「귀북(龜卜)」や「거북(去北)」、「거북(居卜)」から変化したという説も見られる。

なお、文献上の記録からこれらの変化過程を整理すると、この語形は古くから第 1 音節が ko で、主な変化は第 2 音節で現れている。まず、15 世紀に幅広く現れる 거북から異化現象を経て、17 世紀に 거북と 거북に変化し、거북は 18 世紀にはもう見られなくなる。次に、거북と 거북 2 種の語形を中心に 20 世紀まで競争しつつ共存する。最初は 거북のほうが優勢を示したが、段々 ㅏ>ㅑ の変化によって逆転し、最後は 거북のほうが優勢になる。また、20 世紀に第 2 音節の母音が ㅑ>ㅓ と変化した 거북が見られ、現在も 濟州島方言に残っている。

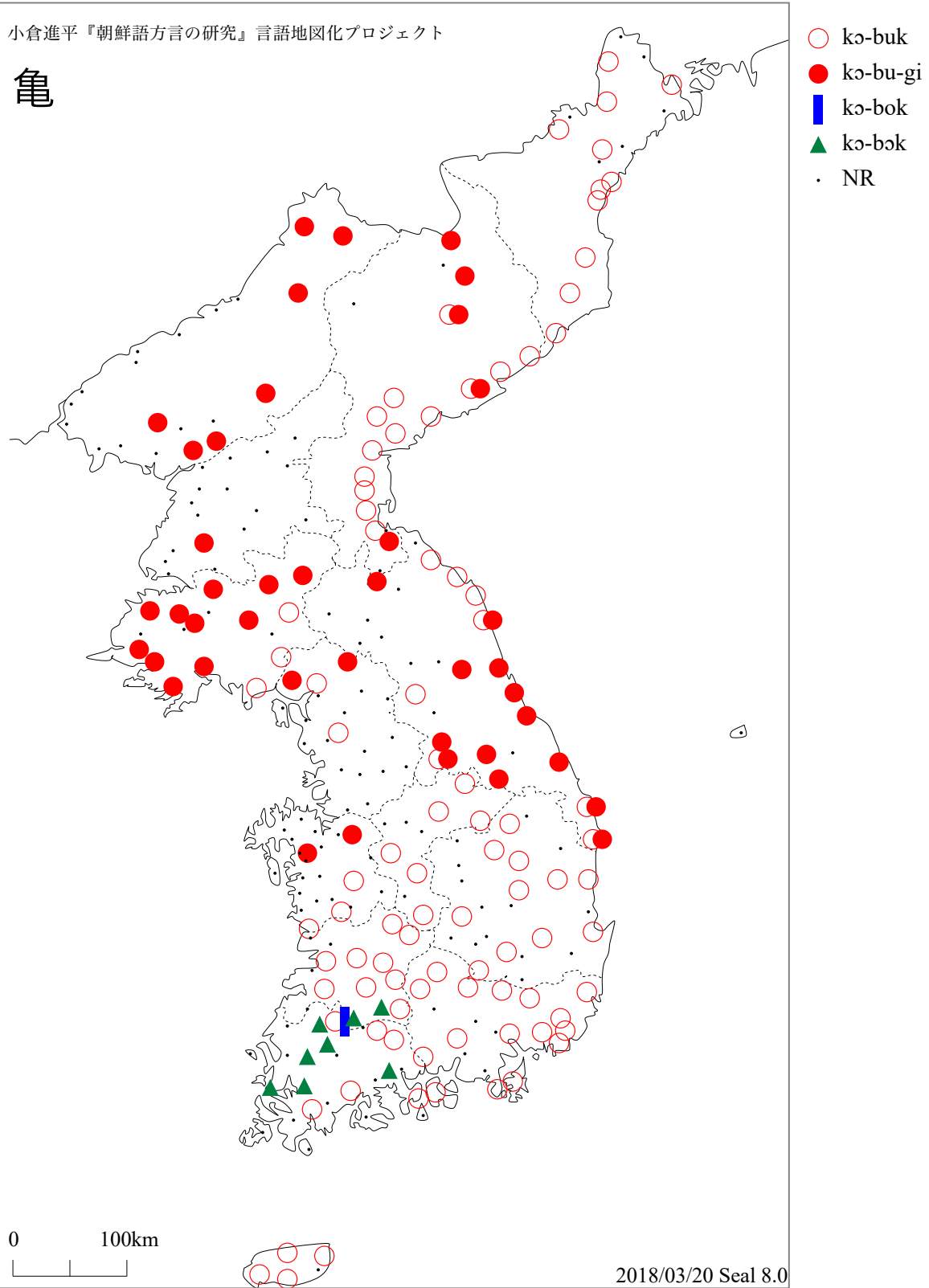
続いて、現在見られるすべての語形を連結して見ると、まず、거북と 거북に接尾辞-이が付いてそれぞれ 거북-이と 거북-이になり、その中で 거북-이의第 2 音節のㅑがウムラウトを経てㅓになって 거북-이が現れ、また 거북-이의第 2 音節のㅑが脱落してㅓだけ残って 거북-이になる。ほかに、거북は 거북から順行同化したものと見られる。即ち、거북の第 2 音節の陽母音ㅑが第 1 音節ㅓの影響で同じくㅓに変化したのである。

最後に、거북は崔鶴根 (1990) で 1 地点しか見られず、どのような変化を経たか説明しにくい。

## 参考文献

- 金敏洙編 (1997) 『우리말語源辞典』 太学社.  
金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』 韓国精神文化研究院.  
金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』 京畿大学校出版局.  
国立国語研究院 (1999) 『標準国語大辞典』 斗山東亜.  
Daum 『高麗大國語辞典』 <http://dic.daum.net/>  
Naver 『国語辞典 (方言)』 <http://krdic.naver.com/>  
劉昌惇 (1964) 『李朝語辞典』 延世大学校出版部.  
李基文 (1998) 『(新訂版) 国語史概説』 太学社.  
崔鶴根 (1990) 『増補 韓国方言辞典』 明文堂.

# 亀



# 鮎

國分 翼

## 1 はじめに

韓国語の標準語は in-o (은어), in-gu-o (은구어), in-dʒo-o (은조어) の3通りの語形が認められる。これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「水族」に「鮎」という項目名で12種記録されている(上: 311)。これらは(1) in-o 系, (2) me-gi 系, (3) その他に分類できる。(1) in-o 系は漢字語「銀魚」に由来する語形である一方, (2) me-gi 系は本来「ナマズ」の意味で用いられる固有語に由来する。

### (1) in-o 系

(1a) in-o / in-e / in-ε / in-a / in-i, (1b) in-gwa / in-gwaŋ, (1c) in-ɔk, (1d) in-o

### (2) me-gi 系

me-gi / me-sa-gu

### (3) その他

jɔn-ε

(1) in-o 系は(1a)のような第二音節の母音の違いによる変種, (1b)のような第二音節が -gwa/-gwaŋ で現れるもの, (1c)のような第二音節に終声 /k/ が添加されたもの, (1d)のような第一音節に /i/ が現れるものの4種類に分けられる。

(2) me-gi 系は me-gi と me-sa-gu の2種類の語形が現れた。

(3) その他には, jɔn-ε という1種類がある。この jɔn-ε は「鮎」を表す jɔn-o (연어) の変種である。

## 2 その他の語形

この項目では, 新興以北の咸鏡道地域と江原道の大部分の地域について調査がされていない。咸鏡道で用いられる語形について, 『咸北方言辞典』(1986)によると, 도루묵<sup>1</sup>, 은어, 은예などの語形が見られる。

## 3 地理的分布

(1) in-o 系は黄海道北部と平安道を除く全域に分布している。その中でも, in-o が最も広く分布しているが, 咸鏡南道では in-gwaŋ という語形のみが現れた。また, in-gwa が黄海道金川にのみ現れた。

---

<sup>1</sup> 本来, 「ハタハタ」の意味で用いられる固有語である。この地域では, 海水魚である「ハタハタ」と淡水魚である「鮎」を区別せずと呼ぶようである。



一方、(2) me-gi 系は黄海道北部と平安道に現れた。そのうち、me-gi が現れたのは黄海道黄州と平安南道平壤のみであり、それ以外の地点では me-sa-gu のみが現れた。

(3) その他に分類された jon-ε は慶尚南道蔚山と浦項に現れた。

#### 4 文献上の記録

은어という語形は中世語の資料には見当たらなかったが、은구어（銀口魚）という語形は中世語の資料にも見受けられた。

두 떡기 은구어 각 스믈콤 호고 동휘 호나식 보내시닝이다 <16世紀 順天金氏諺簡 64: 2>

자바나나 은구어나 있다 므슴 속저리 이시리 <16世紀 順天金氏諺簡 81: 3>

17世紀末の『訳語類解』にも、은구어は現れるが、은어は現れない。

秋生魚 은구어 <1690 訳語類解下 37b><sup>2</sup>

一方、은어という語形が文献上に現れるのは18世紀以降であるが、17世紀末には은에という語形が登場する。

은에 강능은 불셔 나셔 관계의 쓴다 호오니 <1697 李東標歌 31>

銀魚 은어 <1778 方言類積 亥部方言 19a>

박쥬포져 도라오니 수척 은어 낙가내니 송강 로어 비길네라 <19世紀 남원고사>

既に紹介した通り、은에는은어의方言形である。即ち、은어という語形は17世紀末には存在していた可能性が考えられる。

#### 5 考察

文献上の記録から、은구어の方が은어よりも古くから使われていたと考えることができる。小倉進平によって記録された方言形のうち、この은구어に最も近い形で現れる語形としては、主に咸鏡南道で現れた in-gwan と黄海道金川で現れた in-gwa があり、これらが最も古い語形であると考えられる。

また、(1) in-ɔ 系では第二音節が /i, e, ε, ɔ, a/ で現れる語形があった。/ɔ/ > /e/ の変化については、接尾辞 -i の添加を経て、単母音化したものであると考えることができ、慶尚北道で現れた /e/ はこの地域で /e/ との区別がないために現れたものだと説明できる。/i/ が現

---

<sup>2</sup> 漢字としてあてられている「秋生魚」は中国語で「アユ」という意味である。

れたものは /e/ からの狭母音化による変化である。/a/ で現れる語形については説明が難しいが、この形が現れた地域では、他の項目でも「魚」の漢字音である /ɔ/ が /a/ に交替して現れる。よって in-a についてもこれと同様の変化を経たものだと言える。前述の in-gwa についても、「魚」の漢字音が /a/ で現れる地域に近い分布を示していることから、in-gua>in-gwa という変化を経たと推測できる。in-gwan はこれに接尾辞 -an が添加されたものと考えられる。また、慶尚南道金海に in-ɔk という語形が現れるが、これは in-ɔ に接尾辞 -ɔk が付いた可能性がある。ただし、別種の魚類を扱った項目には、漢字音 /ɔ/ の直後に /k/ が付いた語形は存在していない点では特殊である。なお、慶尚南道釜山と済州島の西帰に現れる in-ɔ は第一音節の /i/ が前舌母音化した結果、/i/ で現れたものであると思われる。

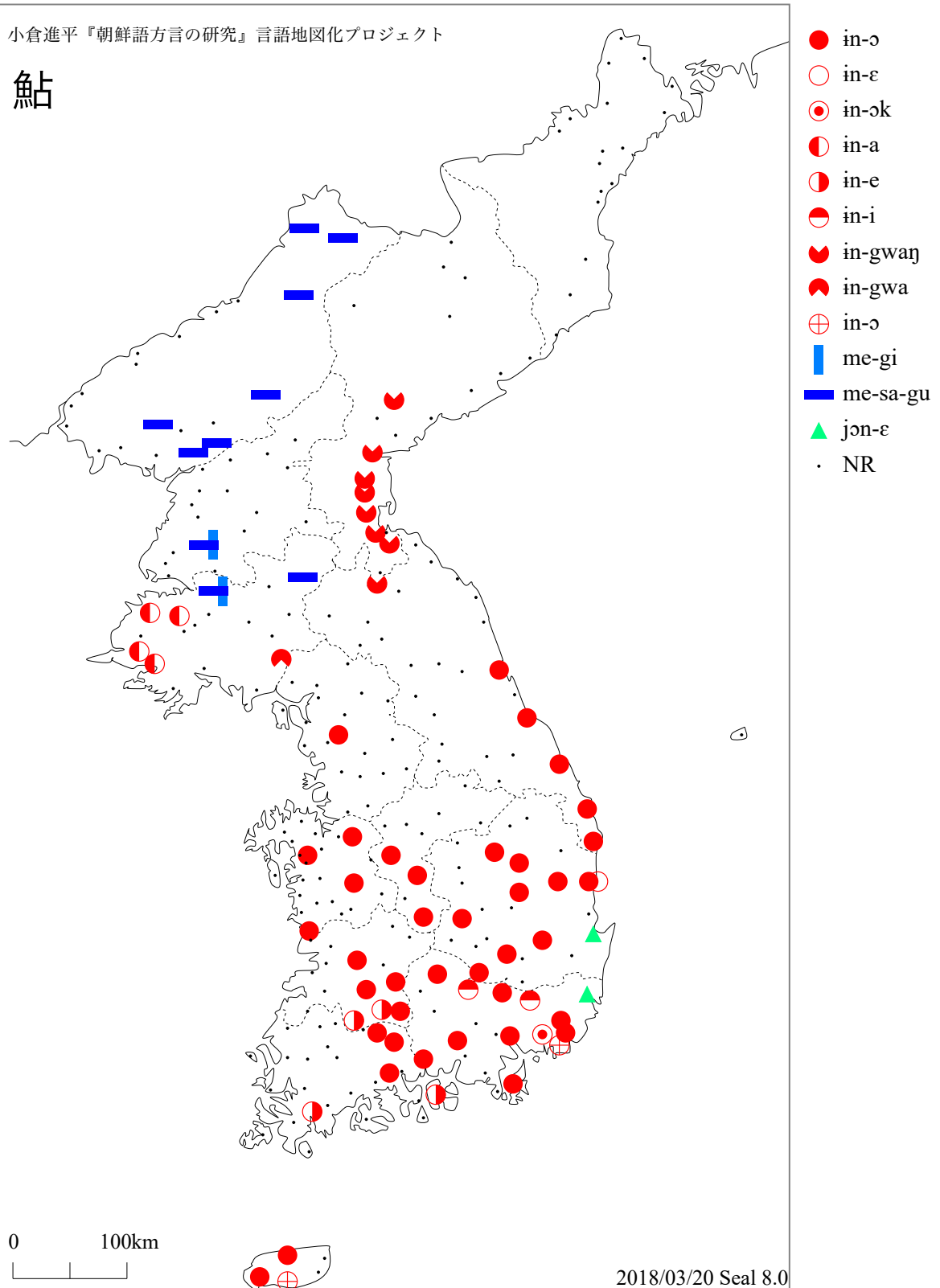
(1) in-ɔ 系が比較的広範囲な分布を見せている一方で、西北地域では(2) me-gi 系の語形のみが現れ、(1) in-ɔ 系は全く現れなかった。前述の通り、me-gi (메기) は元々「ナマズ」と言う意味であり、これがこの地域では「アユ」という意味としても使われるということである。ところで、日本語で「アユ」という意味を表す「鮎」という漢字は元々「ナマズ」という意味でのみ用いられるものであり、中国語でも同様に用いられるということは、me-gi (메기) の意味が拡大されたことと関係があるかもしれない。

また、jon-e は慶尚南道の海沿いの地域に現れている。この語形については、「アユ」が「サケ」と同じ回遊魚であるために、区別をせずに呼んでいる可能性がある。

#### 参考文献

金泰均編著(1986)『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局。

# 鮎



# 木

梁 紅 梅

## 1 はじめに

韓国の標準語は na-mu (나무) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「草木」に「木」という項目名で12種類記録されている(上: 333-334)。

これらは (1) na-mu 系, (2) naŋ 系, (3) mu-tʰu 系の3つのいずれかに分類できる。このうち, (1)の na-mu 系と(2)の naŋ 系は固有語からそれぞれ違う変化を辿ったものであり, (3)の mu-tʰu 系は山人参採取業者の隠語だと書かれているが, 恐らく中国語の「木頭」(mùtóu)に由来する言葉であると推測される。

### (1) nam 系

(1a) na-mu / nam

### (2) naŋ 系

(2a) naŋ / naŋ-i, (2b) naŋ-ge / naŋ-gu / naŋ-gi, (2c) naŋ-gi / naŋ-kʰi, (2d) neŋ-gi / neŋ-i

### (3) mu-tʰu 系

(3a) mu-tʰu, (3b) mu-tʰui

(1)の nam 系は第二音節の母音の有無による変種がある。

(2)の naŋ 系は語中に -ŋ が現れるもので, 第2音節に -g / -k が付くかによって(2a)とその他のものに分かれ, また(2b)は第2音節の母音として ε / u / i が付くものであり, (2c)は第2音節の母音が -i で現れるもので, (2d)は第1音節の母音が -e で始まるものである。

(3)は(1)と(2)とはまったく異なる語形であり, 第2音節の母音に -i が付くかによって(3a)と(3b)に分けられる。

## 2 その他の語形

na-mu はほとんど他の語形が見られないが, 但し複合語として『韓国方言資料集 慶尚北道篇』で떡갈나무(1.523-1)の欄に떡참낭개, 낭개의語形が見られ, また(1.524-1)상수리나무の欄にも속시리낭개의語形が見られる。

## 3 地理的分布

(1)の nam 系は全羅道, 慶尚道, 忠清道, 京畿道, 黄海道, 咸鏡南道の地域に幅広く分布する。(2)の naŋ 系は nam 系と比べると咸鏡北道から済州道までのほとんど全国的に分布している。(3)の mu-tʰu 系は平安北道と咸鏡南道の限られた地域にしか見られない。

なお, nam 系と naŋ 系は多くの地点で併用されており, 中には平北と咸南のように3種類

すべて併用されている地点もある。

また、第2音節に -i が付く語形は咸鏡道と慶尚道に主に分布している。

#### 4 文献上の記録

木を表す3種類の語形の中で最も古いものは nam 系で、高麗語の時代にすでに nam で始まる語形が見られる。

ハングル資料以前の中世語資料としては12世紀の『鷄林類事』と15世紀の『朝鮮館訳語』にこの語形が見られる。

木曰南記 <鷄林類事 12世紀>

樹 那莫 暑 <朝鮮館訳語 15世紀>

姜信沆(1980)では「南記」を nam-ki, 「那莫」を na-m̄ / na-mo として再構している。

ハングル資料の初期には出現位置によって 나모 / 남ㅏ と交替する形で使われていた。

남ㅓ란 내 모기 두어 <1447 積譜詳節 26>

불휘 기픈 남근 브르매 아니 밀씨 <1445 龍飛御天歌 2>

숯바울 닐굽과 이븐 나모와 <1445 龍飛御天歌 89>

나모と남ㅏが交代形として使われているが、『鷄林類事』の「南記」nam-kiからもわかるように남ㅏに含まれるkは古い要素を残しているものと考えられる。

次に naŋ 系は17世紀に見え始める。

서근 낭글 代호고 <1632 杜詩諺解重刊 13: 6>

mu-tʰu / mu-tʰu-i 系は文献資料ではまだ見つかっていないが、現代の中国の延辺方言では切った木を mu-tʰi と呼んでいて、人の足が太いときに mu-tʰi に比喻したり、感情が鈍い人を比喻したりするときに使われている。

#### 5 考察

na-mu という固有語の化石として現代語に残っている言葉は、namak-sin をあげることができる。河野六郎(1979)の解釈によると、朝鮮朝初期の文献に na-mo, nam-g の形が共存していたが、namak-sin の例からすると第2音節に -k が含まれていて、この -k / -g を含んでいるのがより古い形で、na-mo は -mg の -g を脱落したものである。その痕跡として、咸鏡

南道安邊の例を挙げることができる。naŋgu (単独形); naŋ-g-i (主格形); naŋ-g ul (賓格形) がそれであるが、これらの語形から容易に nam-g $\Lambda$ , nam-gi, nam-g $\Lambda$ l を推定することができる。単独形の nam-g $\Lambda$  は -g の脱落を経て、nam $\Lambda$  となって、これがまた na-mo > na-mu の変化を経て現代語になったと考えられる。

naŋ-g で始まる形も固有語の nam-g $\Lambda$  から >naŋ-gi >naŋ-gu という変化を辿ったと考えられる。

naŋ-gi の形は主格助詞 -i が付いた形であり、neŋ-gi 形は第 1 音節の母音が Umlaut による変化を起こしたものである。

以上をまとめてみると次のようである。

nam-g $\Lambda$  > na-m $\Lambda$  > na-mo > na-mu  
> naŋ-gi > naŋ-gu  
> naŋ-gi > neŋ-gi

mu-t<sup>h</sup>u / mu-t<sup>h</sup>ui 系は中国の延辺地方では切った木を指すのだが、発音からみると恐らく中国語の「木頭」(mùtóu)の影響だと考えられる。この語形は山人参採取業者の隠語とされているが、『朝鮮語方言の研究』(下:287)において「かれらが入山するに当っては…(中略)…普通の朝鮮語を使用することは、人参の自生する靈域をけがし、人参の収穫を減少せしめるといふ一種の信仰に基くものである」と説明されている。

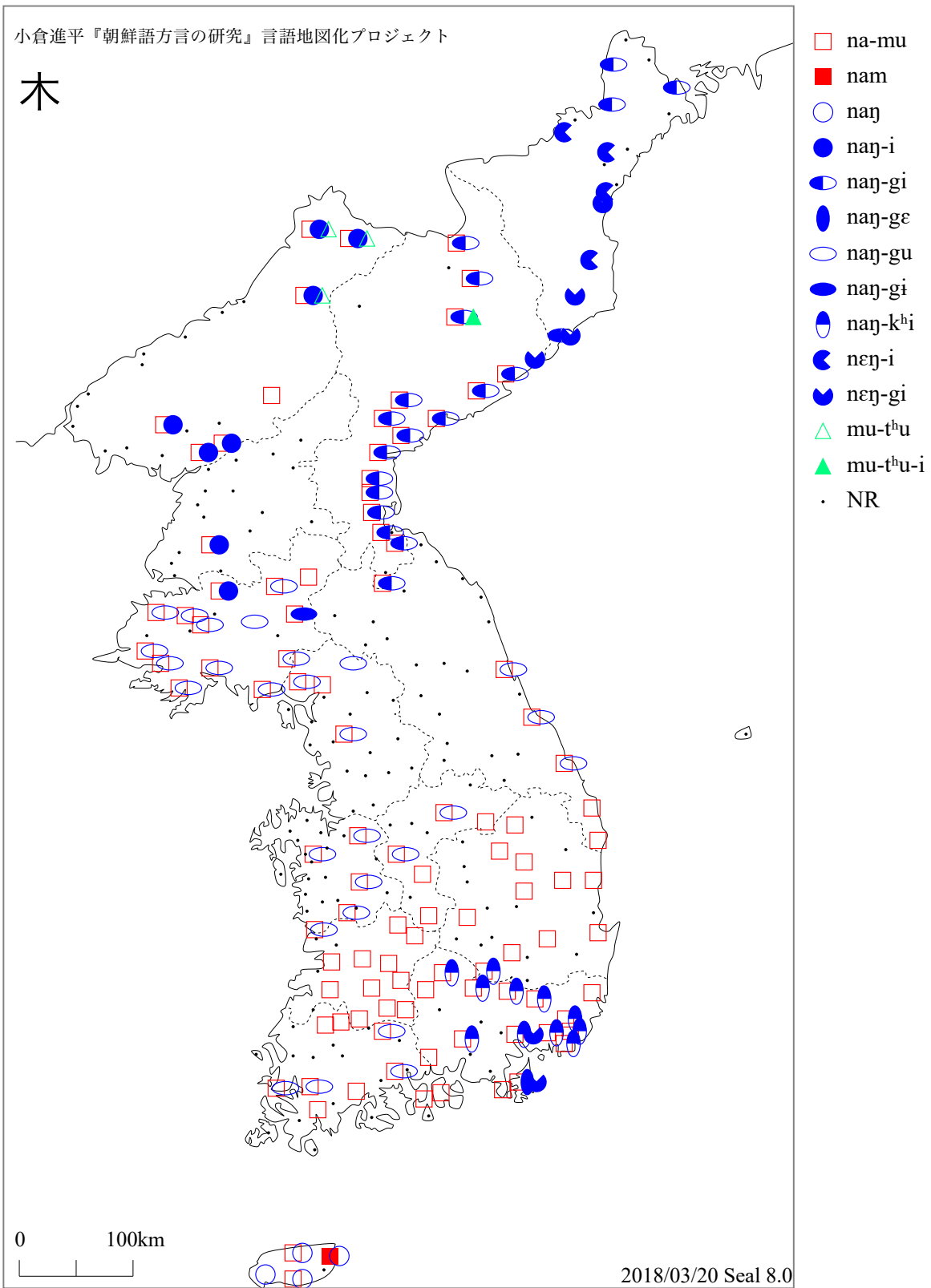
#### 参考文献

河野六郎 (1979) 『河野六郎著作集 1』東京：平凡社。

姜信沆 (1980) 『鷄林類事「高麗方言」研究』成均館大学校出版社。

韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987-1995) 『韓国方言資料集』全 9 巻。城南：韓國精神文化研究院。

# 木



# 尖れるさま

岩井亮雄

## 1 はじめに

小倉進平の記録には濃音の表記に誤植があると思われる。

韓国の標準語は  ${}^?pjo-dʒok$  (翌奇) である。これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「副詞」に「尖れるさま」という項目名で 22 種の語形が記録される (上: 486-487)。

### (1) ${}^?pjo-dʒok$ 系

(1a)  ${}^?pjo-dʒok / {}^?pjo-dʒuk$ , (1b)  ${}^?po-dʒok / {}^?po-dʒuk$ , (1c)  ${}^?pø-dʒok / {}^?pø-dʒuk$ , (1d)  ${}^?pe-dʒok$

(1e)  ${}^?pe-dʒok / {}^?pe-dʒuk$

### (2) ${}^?po-{}^?tʃok$ 系

(2a)  $po-{}^?tʃok$  (sic), (2b)  $pø-{}^?tʃok$  (sic), (2c)  ${}^?pe-{}^?tʃok / {}^?pe-{}^?tʃuk$ , (2d)  ${}^?pe-{}^?tʃok / {}^?pe-{}^?tʃuk$

(2e)  ${}^?pit-{}^?tʃok / {}^?pit-{}^?tʃuk$

### (3) ${}^?tʃot-{}^?pit$ 系

${}^?tʃot-{}^?pit / {}^?tʃot-{}^?pik / {}^?tʃoŋ-{}^?pit / {}^?tʃet-{}^?pit / {}^?tʃoŋ-gut$

(1)  ${}^?pjo-dʒok$  系は第一音節母音で下位分類できる。第二音節母音で  $o / u$  の交替を見せる。

(2)  ${}^?po-{}^?tʃok$  系は第一音節母音で下位分類できる。第二音節母音で  $o / u$  の交替を見せる。ここで、(2a)  $po-{}^?tʃok$  (sic) と (2b)  $pø-{}^?tʃok$  (sic) はそれぞれ  ${}^?po-{}^?tʃok$  と  ${}^?pø-{}^?tʃok$  の誤植である可能性が高い。これらは済州島や全羅道に分布するが、『済州島方言研究』(1962) や『韓国方言資料集』(1987 全羅北道編, 1991 全羅南道編) には決して平音の語形が現れない (即ち濃音の語形である) からである。以下、これらは濃音の語形であると見て、議論を進める。

(3)  ${}^?tʃot-{}^?pit$  系は、(2e) の前部要素と後部要素が交替したものと、その変種から成る。

## 2 その他の語形

『韓国言語地図』(2008) にはこの項目はない。小倉進平のデータで空白の咸鏡北道には『咸北方言辞典』(1986) に  ${}^?pjo-dʒok / {}^?pjo-dʒuk / {}^?pø-dʒuk / {}^?pe-dʒuk / {}^?pe-dʒuk$  (ハングルのローマ字転写は小倉進平の方法 (下: 13-14) による) という語形が見られる。

## 3 地理的分布

(1)  ${}^?pjo-dʒok$  系は、忠清南道、京畿道、江原道、黄海道、咸鏡道、平安道に分布する。(2)  ${}^?po-{}^?tʃok$  系は、済州島、全羅道、慶尚道、忠清道に分布する。(3)  ${}^?tʃot-{}^?pit$  系は、全羅南道と慶尚南道に見られる。朝鮮半島の南北で語形が (1) と (2-3) で分かれるのが特徴である。

(1a) は京畿道と黄海道に見られる。これらの地域が、現在の標準語形を使っている地域で



ある。(1b) は咸鏡南道と平安北道に見られる。(1c) は咸鏡南道や平安道に見られる。(1d) は忠清南道と江原道に見られる。(1e) は咸鏡南道に見られる。これらの語形のうち、第二音節母音が o の語形は忠清南道、江原道、黄海道、咸鏡南道、平安道に主に見られ、u の語形は京畿道、黄海道、咸鏡南道に主に見られる。黄海道と咸鏡南道には o/u の両方が見られる。

(2a) は濟州島に見られる。(2b) は全羅道に見られる。(2c) は全羅道、忠清道、江原道に見られる。(2d) と (2e) は慶尚道に見られる。これらの語形の第二音節母音は基本的には o であるが、慶尚道には o/u が交替した語形が見られる。

(3) は全羅南道や慶尚南道の一部の地域に見られる。

#### 4 文献上の記録

(1a) に関して、<sup>?</sup>pjo-dʒjok (ㅈ족) は『韓仏字典』(1880), 『韓英字典』(1897), 『大韓毎日新報』(1904), 『京郷新聞』(1906, 1907) などに、<sup>?</sup>pjo-dʒok (ㅈ족) は『広才物譜』(18--), 『易言諺解』(1883), 『国漢会語』(1895), 『新訂尋常小学』(1896), 『韓英字典』(1897), 『神学月報』(1903), 『大韓毎日新報』(1904), 『宝鑑(京郷新聞)』(1910) などに見られる。

ㅈ족ㅎ다 (尖) <1880 韓仏字典 338> <1897 韓英字典>

ㅈ족ㅎ다 (尖) <18-- 広才物譜 物性 2b> <1895 国漢会語 150> <1897 韓英字典>

(1b) に関して、<sup>?</sup>po-dʒjok (ㅈ족) は『朴通事諺解』(1677), 『伍倫全備諺解』(1721), 『朴通事新積諺解』(1765), 『倭語類解』(1781), 『独立新聞』(1896) などに見られ、<sup>?</sup>po-dʒok (ㅈ족) は『太上感応篇図説諺解』(1852) に、<sup>?</sup>po-dʒjuk (ㅈ족) は『蚕桑輯要』(1886) に見られる。

ㅈ족ㅎ 씨 <1677 朴通事諺解 上 35a>

ㅈ족ㅎ 칼 <1852 太上感応篇図説諺解 4: 58b>

ㅈ족ㅎ고 잔 거슨 <1886 蚕桑輯要 14b>

(1c-e) は確認できず、その他、<sup>?</sup>pi-dʒjuk (ㅈ족) が『韓英字典』(1897) に見られる。

(2) に関して、<sup>?</sup>pet-ʔtʃjuk (ㅈ족) /<sup>?</sup>pit-ʔtʃjuk (ㅈ족) が『韓英字典』(1897) に見られるが、これら以外の語形は確認することができなかった。

(3) のような語形は確認することができなかった。

なお、この項目にあたる古語には、<sup>?</sup>po-rot (ㅈ로) に由来する語もある。

머리 ㅈ로ㅎ 將軍은 (銳頭將軍) <1481 杜詩諺解 5: 35b>

머리 ㅈ로ㅎ 男兒 | (銳頭兒) <1632 重刊杜詩諺解 2: 69a>

ㅈ로ㅎ 봉 (尖峰) <1690 訳語類解 上 6a>

## 5 考察

文献上の記録から、現在の標準語形 (1a)  ${}^?pjo-dʒok$  より (1b)  ${}^?po-dʒok$  のような語形の方が古い語形であることが分かる。これは (1a) が京畿道と黄海道という中央に分布し、(1b) がそれより北の咸鏡南道や平安北道に分布するという地理的分布と一致する。附言すると、(1a) の周圏に (1b-e) 及び (2-3) が分布するので、(1a) が新しく、この他の語形がより古いことが示唆される。これは、(1a) 以外の語形が現れる地域に母音に関する種々の変種が分布するのに対し、(1a) が現れる京畿道と黄海道ではそういうことはないということとも相通ずる。よって、 ${}^?po-dʒok$  を始点に、 ${}^?po > {}^?pø$  のような前舌母音化 (ウムラウト)、両唇音後の  ${}^?pø > {}^?pe$  のような母音の変化、第二音節以下での  $o > u$  の変化などから、(1b-e) 及び (2) に関する次のような変化経路が想定できる。( > は上述の如き音変化を表す。)

$$\begin{array}{l}
 {}^?po-dʒok > {}^?po-dʒuk > ( > {}^?pø-dʒuk > {}^?pe-dʒuk) \\
 > {}^?pø-dʒok > {}^?pø-dʒuk > ( > {}^?pe-dʒuk) \\
 > {}^?pe-dʒok \\
 > {}^?pe-dʒok > {}^?pe-dʒuk \\
 > {}^?po-{}^?tʃok > {}^?pø-{}^?tʃok > {}^?pe-{}^?tʃok > {}^?pe-{}^?tʃuk \\
 > {}^?pit-{}^?tʃok > {}^?pit-{}^?tʃuk \\
 > {}^?pe-{}^?tʃok > {}^?pe-{}^?tʃuk
 \end{array}$$

すると、(1a) に関して、 ${}^?pjo-dʒok$  ( >  ${}^?pjo-dʒuk$  ) の由来が問題になるが、 ${}^?po-dʒok \rightarrow {}^?pjo-dʒok$  (j 添加) または  ${}^?pø-dʒok > {}^?pjo-dʒok$  ( ${}^?pø$  の変種) が京畿道や黄海道で起きた可能性がある<sup>1</sup>。また、現代語においては (1a) が標準語として各地に普及したものと推察できる。

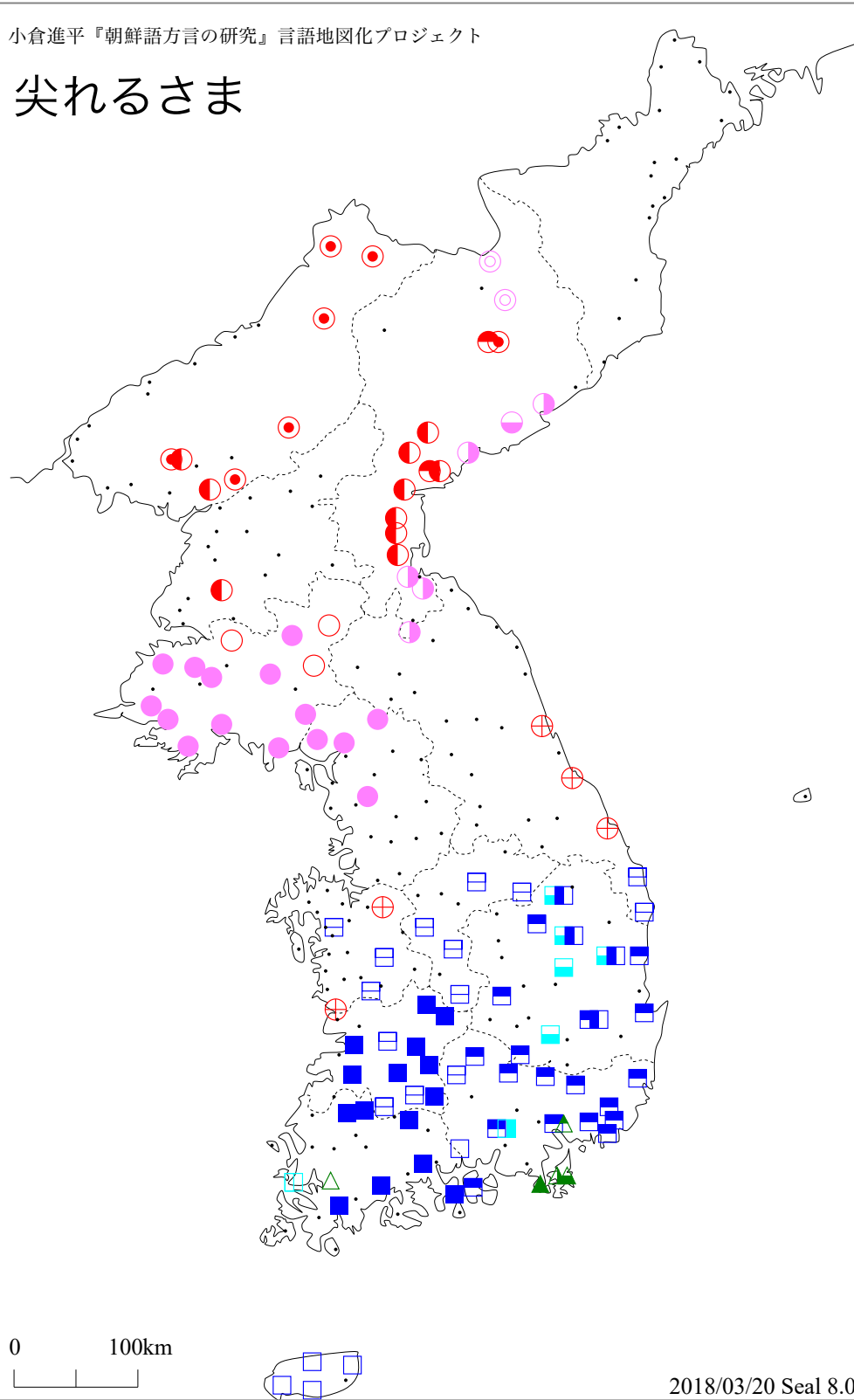
(3) は限られた地域にのみ見られる。おそらく (2) が由来となって転じたものであろう。

## 参考文献

- 韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987) 『韓国方言資料集』5 (全羅北道編) 城南：韓国精神文化研究院。
- 韓国精神文化研究院語文研究室編 (1991) 『韓国方言資料集』6 (全羅南道編) 城南：韓国精神文化研究院。
- 金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局。
- 玄平孝 (1962) 『济州島方言研究』出版地不明：精研社。
- 鄭仁浩 (2013) 「하강이중모음 ‘외’의 變化와 方言 分化 (下降二重母音 oi の変化と方言分化)」『方言学』18: 147-170. 韓国方言学会。

<sup>1</sup> 鄭仁浩 (2013: 156) では  ${}^?pjo > {}^?pø > {}^?pe/{}^?pe$  のような経路を想定するが、 ${}^?po-dʒok$  との関係には言及できていない。また、 ${}^?pjo > {}^?pø$  のような変化はあり得るだろうが、地理的分布を考慮すると、 ${}^?pjo$  が  ${}^?pø$  より新しいものである可能性や、 ${}^?pjo$  が地域限定的な変化によるものである可能性もあると思われる。

# 尖れるさま



- ʔpjo-dʒok
- ʔpjo-dʒuk
- ⊙ ʔpo-dʒok
- ⊖ ʔpo-dʒuk
- ◐ ʔpø-dʒok
- ◑ ʔpø-dʒuk
- ⊕ ʔpe-dʒok
- ⊖ ʔpe-dʒok
- ◐ ʔpe-dʒuk
- ◑ ʔpe-dʒuk
- po-ʔtʃok (sic)
- pø-ʔtʃok (sic)
- ◻ ʔpe-ʔtʃok
- ◻ ʔpe-ʔtʃuk
- ʔpe-ʔtʃok
- ◻ ʔpe-ʔtʃuk
- ʔpit-ʔtʃok
- ◻ ʔpit-ʔtʃuk
- △ ʔtʃot-ʔpit
- ▲ ʔtʃot-ʔpik
- ▲ ʔtʃon-ʔpit
- ▲ ʔtʃet-ʔpit
- ▲ ʔtʃon-gut
- NR

# 塵

澁谷 秋

## 1 はじめに

韓国の標準語は  $t^h$ i-kil(티끌)と mən-dʒi(먼지)であり, これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「雑」に「塵」という項目名で23種記録されている(上: 506-507)。

これらの語形は티끌系のもの と 먼지系 と その他の語形の三つに大きく分けられる。

### (1) 티끌系

(1a)  $t^h$ ii /  $t^h$ ii-ʔkil /  $t^h$ ii-<sup>h</sup>kɔl /  $t^h$ ii-<sup>h</sup>ki-rɔgi /  $t^h$ ii-gim-bɔ-ri /  $t^h$ ii-kɔ-bul /  $t^h$ ii-kɔp-tʃi

(1b) ʔtii-ʔkil / ʔtit-ʔkil / ʔtit-kil / ʔtin-ʔkil

(1c) tii-ʔkil / tin-ʔkil

### (2) 먼지系

(2a) mən-dʒi / mon-dʒi / mun-dʒi / mom-dʒi

(2b) mon-dʒi-ra-gi / mon-dok, (2c) moŋ-daŋ

### (3) その他

(3a) mi-gum, (3b) ku-dum, (3c) poŋ-deŋ-i

(1) 티끌系には語頭の子音が平音, 激音, 濃音のものがある。標準語形のように第一音節の母音が i のものは ʔtit-ʔkil / ʔtit-kil / ʔtin-ʔkil / tin-ʔkil だけで, 第一音節の母音が単母音の場合は終声に t または n が挿入される。それ以外の語形は第一音節の母音が二重母音 ii となる。

(2) 먼지系は標準語形の第一音節の変種と, それ以外のものに大きく分かれる。(2a) は標準語形 먼지 の変種であり, 中声には o, ɔ, u の三種類, 終声には n, m のものがある。(2b) の mon-dʒi-ra-gi / mon-dok は (2a) mon-dʒi に接辞が結合したり, 第二音節が変化したりした語形と考えられる。

티끌 と 먼지 は本来別の語義でありそれらが相補分布を成すわけではない。日本語で塵と埃を区別しようとしてもうまくいかないのと同様に, これらは似たような語義であるため小倉の調査結果ではどちらの語形も見られるのだと考えられる。

## 2 その他の語形

これ以外の語形として티끌系は『우리말 큰사전』(1991), 『標準国語大辞典』(1999), 『高麗大韓国語大辞典』(2009)に見出し語として以下の語形が記載されている。

티(濟州), 티가쟁이(咸南), 티겍지(江原, 忠清), 티게비(慶北, 忠北), 티갈(全北), 티깨락(全北), 티깨비(慶北), 티꼰(全北), 티꺼부지(慶南), 티꺼리(慶南), 티꼰(慶北),

全北, 忠清), 티결(全北), 티겍지(慶北), 티끄락(全南), 티끄락지(全北), 티끄래기(慶南, 忠北), 티끄리(慶尚), 티끄버리(慶南), 티끄부(慶北), 티క్క지(慶南), 티끌맹이(慶北), 티끌베기(慶北), 티끼비(慶南), 티엄(江原), 톻결(慶南), 톻끄러기(慶南)

먼지는『韓國方言資料集』(1989)で調査が行われていて, それによると上記以外の語形は京畿道方言として문주, 먼데기, 몬대기, 江原道方言として문주, 문데기, 문데비, 全羅北道方言として몽지, 몬대기, 慶尚北道方言として미금, 티겍찌, 慶尚南道方言として덴지, 미금, 濟州道方言として몬제레기などの語形が見られる。

咸鏡北道は小倉進平の調査データがないが, 『咸北方言辞典』(1986)によると문지, 티끌, 티끗の語形が記録されている。

### 3 地理的分布

(1) 티끌系は語頭子音によって分布地域が分かれる。(1a)の激音の語形は江原道, 忠清道, 慶尚南道に (1b)の濃音は黄海道, 平安道, 咸鏡南道に見られ, 激音と濃音の語形はおよそ南北に分かれて分布する。(1c)の平音の語形が見られる地点は少なく, 慶尚南道の釜山と, 平安北道の慈城の2地点のみである。

(2) 먼지系のうち, 現在の標準語形の mon-dzi は京畿道に2地点だけみられる。mon-dzi は黄海道, 濟州道全域と京畿道の一部, 忠北, 全南, 慶南に1地点ずつ散在している。最も広範囲に分布するのが mun-dzi で, 『韓國方言資料集』や『咸北方言辞典』の調査結果も含めると咸鏡道, 江原道, 忠清道, 全羅道, 慶尚道, 濟州道にみられ, 逆L字型に分布する。(2b)の mon-dzi-ra-gi と mon-dok は濟州道のみで, (2c)の mon-daŋ は平安道のみでみられる語形である。(3)その他のうち, (3a) mi-gum は慶尚南道のみで, (3b) ku-dum は濟州道のみ, (3c) poŋ-deŋ-i は平安北道のみでそれぞれ見られる。

### 4 文献上の記録

티끌系で最も古い語形は드틀, 들글で『積譜詳節』(1447), 『月印積譜』(1459), 『楞嚴經諺解』(1461,1462), 『法華經諺解』(1463)などにみられる。17世紀以降には語頭が激音の릿글または, 톻글의語形が, 『朴通事諺解』(1677)をはじめ, 『倭語類解』(1781), 『五倫行実図』(1797), 『太上感應篇』(1852)などでみられるようになる。濃音の語形は『柳氏物名攷』(182-), 『韓英字典』(1897), 『神学月報』(1908)などにみられる。

清淨은 杻고맛 드틀도 업슬 씨라 <1447 積譜詳節 20:35b>

또 다 붓아 들글 밍마라 흥 들글로 흥 劫 사마도 <1463 法華經諺解 3:89b>

官人이 미일에 물 릿가죽에 릿글이 석 자히나 무텃고 <1677 朴通事諺解中 43a>

세사 細沙 톻글 진 塵 몬지 이 埃 <1781 倭語類解上 08b>

塵 쇠글 <182- 柳氏物名攷 5>

먼지系で最も古い語形は몬지で、『釈譜詳節』(1447), 『救急簡易方諺解』(1489), 『訳語類解』(1775) 『倭語類解』(1781)などでみられる。19世紀以降は몬지가あらわれる。なお、『倭語類解』(1781)では티스글と몬지가並列される。

왕이 드르시고 싸해 디여 우르샤 모매 몬지 무티시고 <1447 釈譜詳節 11:21b>

灰塵 몬지 灰土 浮灰 몬지 니다 塌灰 몬지 안자 <1775 訳語類解補 7a>

티스글 진 塵 몬지 이 埃 <1781 倭語類解上 08b>

몬지 埃 <1880 韓仏字典 245>

## 5 考察

「塵」には티글系と먼지系の語彙があるが、『韓国方言資料集』の調査結果も考慮に入れると티글系と먼지系の語彙を特別使い分けている地域があるわけではない。

티글系の語形変化にはいくつかの説があるが、金武林(2012: 667-668)は中世語で見られる 드틀, 들글は双形(doublet)<sup>1</sup>であり、それらの基本語根を들(塵)と想定したうえで、들(塵)+을(接辞)と分析している<sup>2</sup>。ただし、現代語で티글同じく「塵」を表す티という語形があることから、中世語での基本語根を들(塵)と想定していいのか疑問が残る。語源はよくわからないが、変化過程は以下のように想定される。まず、中世語に見られる 드틀~들글がウムラウトにより들글 > 디글となり、地域によって第一音節が濃音または激音へと変化したのち、第一音節母音が単純化(티스글, 티글 > 티글または띠글 > 띠글)する。小倉の調査結果に見られる語形はこれらが母音変化を起こしたり、接辞が添加したりしたものと考えられる。また、小倉の調査結果で語頭子音が平音のものが外側に位置するのは周圏論的分布であると言える。

먼지系の語源に関しては金武林(2012: 355)가몬(物)+지(灰)と分析するが、詳しいことはよくわからない。몬지という語形が18世紀後半まで使用され、その後第二音節の母音が単純化し(mon-dzi), その後第一音節の変化により(2a)の語形が生じ、さらに接辞が添加することで(2b), (2c)の語形ができたものと考えられる。

(3)のその他の語形については由来はよくわからない。

## 参考文献

金武林(2012) 『韓国語語源辞典』 ソウル：知識と教養.

高麗大学校民族文化研究院国語辞典編纂室(2009) 『高麗大韓国語大辞典』 ソウル：창작마을.

国立国語研究院(1999) 『標準国語大辞典』 ソウル：斗山東亜.

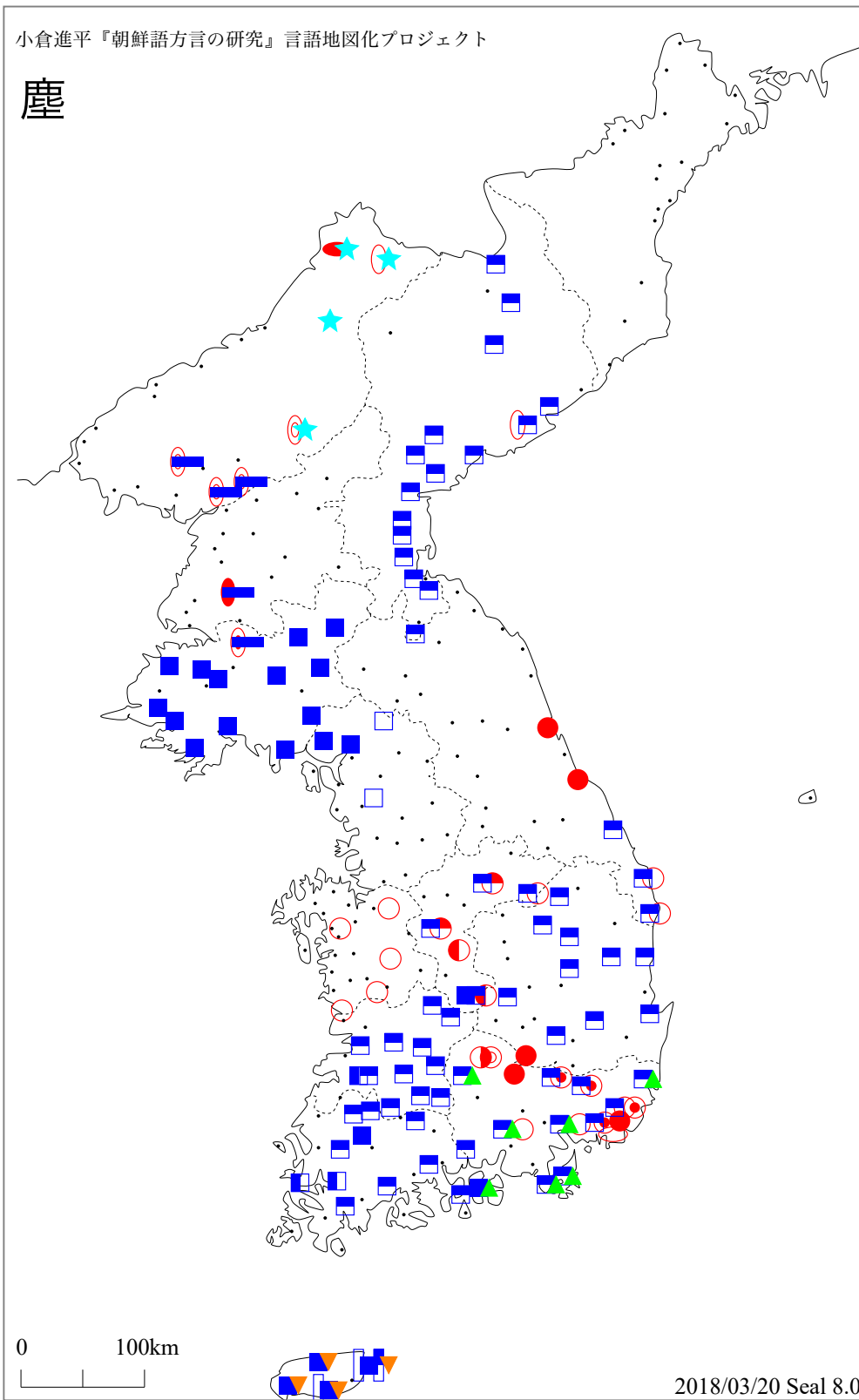
劉昌惇(1964) 『李朝語辞典』 ソウル：延世大学校出版部.

한글학회(1991) 『우리말 큰사전』 ソウル：語文閣.

<sup>1</sup> 同様の特徴を持つ語には나모~남(木), 녀느~넉(他), 버물다~범글다(繞), 밍글다~민들다(作)等がある。

<sup>2</sup> 金武林(2012)は接辞が結合して名詞を形成する例として거플(皮), 수플(林)を挙げている。

塵



- thii
- thii-ʔkil
- ⊙ thii-ʔkəl
- ⊙ thii-ʔki-rə-gi
- ◐ thii-gim-bə-ri
- ◑ thii-kə-bul
- ◒ thii-kəp-tʃi
- ʔtii-ʔkil
- ʔtit-ʔkil
- ◐ ʔtit-kil
- ◑ ʔtin-ʔkil
- tii-ʔkil
- tin-ʔkil
- mən-dzi
- mon-dzi
- ▣ mom-dzi
- ▤ mun-dzi
- ▥ mon-dok
- ▧ mon-dzi-ra-gi
- ▨ moŋ-daŋ
- ▲ mi-gum
- ▼ ku-dum
- ★ poŋ-dəŋ-i
- NR

## 執筆者一覽（五十音順）

岩井亮雄	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
金玉雪	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
國分翼	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程
澁谷秋	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
朱林彬	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了
全恵子	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了
徐攸廷	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
福井玲	東京大学大学院人文社会系研究科
李美姬	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
梁紅梅	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
林茶英	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程